山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和57年度)

河　村　吉　行

1　調査の経過

「遺跡保存地区」は吉田キャンパス南西部、サッカー場と第一学生食堂間に位置し、約2000㎡の地域がその指定地となっている。

本学が統合移転を開始した昭和41年、造成工事中に弥生土器、土師器、須恵器などの遺物の出土をみたことが契機となって本学での埋蔵文化財の調査・研究が開始された。当初、主として実施された遺跡の範囲確認調査の結果、本学内ほぼ全域に集落遺跡が分布していることが確認され、山口大学構内吉田遺跡として周知されるに至った。

しかし、統合移転工事計画の遂行に伴い埋蔵文化財の保護の重要性が指摘されるに及んで、昭和42年に学長を団長に、小野忠凞氏を中心とした学内外の関連分野の専門家によって吉田遺跡調査団が学内組織として発足した。吉田遺跡調査団は大学構内をⅠ～Ⅴの5地区に区分し、各地区において、さらに詳細な試掘調査によって遺構のひろがりと遺跡の性格の把握に努めるとともに、工事計画に従って順次発掘調査を実施した。[1)]

そのうち第Ⅲ地区は、キャンパス南部の現在はグラウンドおよび野球場となっている南北約 200m、東西約 500mの区域にあたるが、「遺跡保存地区」はその第Ⅲ地区の北区に包括される地域である。

統合移転に伴う諸工事が進むなか、昭和41年7月、第Ⅲ地区に近接する第一学生食堂の新営工事中に弥生時代中期の土器が出土した。これを受けて、グラウンド造成範囲が明らかになった昭和42年1月から2月にかけて、遺構・遺物包含層の埋存状況とその密度および分布範囲確認のため試掘調査を実施した。その結果、

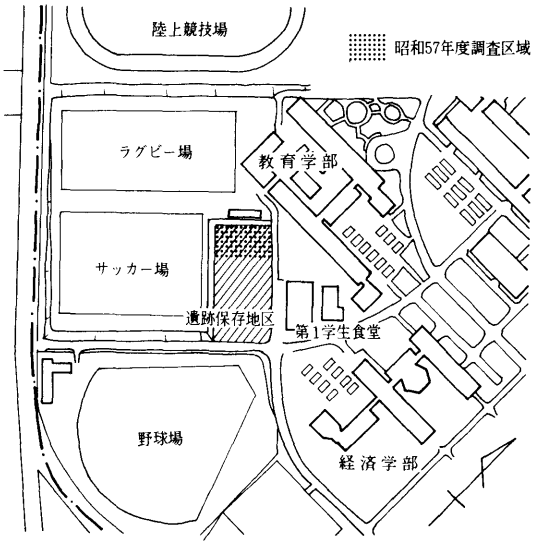


Fig. 53　調査区位置図

削平により平坦化されるラグビー場およびサッカー場の地域で、弥生時代中期から古墳時代前期を中心とした竪穴住居跡、縄文時代に遡る可能性のある河川跡などが検出された。この試掘調査に基づいて関係部局と協議した結果、削平が遺構面にまで及ぶ南門付近の地域約1100㎡（南区）、および第一学生食堂とその南側の地域約4500㎡（北区）において、昭和42年３月から発掘調査を実施することとなった。

このうち北区では、弥生時代～古墳時代の竪穴住居跡が多数検出された。なかでも北区の北半部では、弥生時代中期～古墳時代前期の竪穴住居跡が県内でも有数の分布を示していることが明らかとなった。住居形式・構造の変遷、集落形態・範囲の変遷が時代を追って学習できる、学術・研究上良好な遺構分布地域であることから、約2000㎡が「遺跡保存地区」として現状保存された。

しかしその後、調査団が統合移転諸工事への対応に忙殺され、この地区の調査は数棟の住居跡について行なわれたにすぎず、全域の調査は容易には実施できない状況であった。

当埋蔵文化財資料館は昭和53年に学内共同利用施設として設立され、学内の調査を行なってきた。昭和56年度に「遺跡保存地区」のすぐ北側で教育学部校舎増築に伴い発掘調査を実施したところ、弥生時代中期後半～古墳時代前期の竪穴住居跡４棟が検出され、各住居が「遺跡保存地区」と一連の集落を構成していることが確認された。これを受けて埋蔵文化財資料館運営委員会は、この４棟を含めて「遺跡保存地区」集落として完結させ、一括保存することが望ましいとの結論に達し、関係部局に上申したが、教育学部の将来構想、上記建物の機能および建築施工上の問題等から、その設計変更は困難であるとの結論に至った。その反面、「遺跡保存地区」の重要性が再認識され、構内他地域および周辺地域の同時期集落との比較・検討、資料の蓄積を進めることによって、その後の調査のモデルとなるのが確実なこと、また大学構内に存在する一大集落遺跡としての整備を必要とすることなどから、昭和57年度以降３ヵ年にわたり発掘調査を実施することとなった。

2　調査の概要

調査は昭和57年度から３ヵ年計画で実施する予定であったが、昭和58年度および60年度は大学構内の施設整備に伴う緊急調査への対応が優先したため、調査は57年度（第１次調査）、59年度（第２次調査）、60年度（第３次調査）、61年度（第４次調査）の計４ヵ年にわたることとなった。

現在資料整理中であるが、保存地区における４年次の調査の概要を以下に記することに

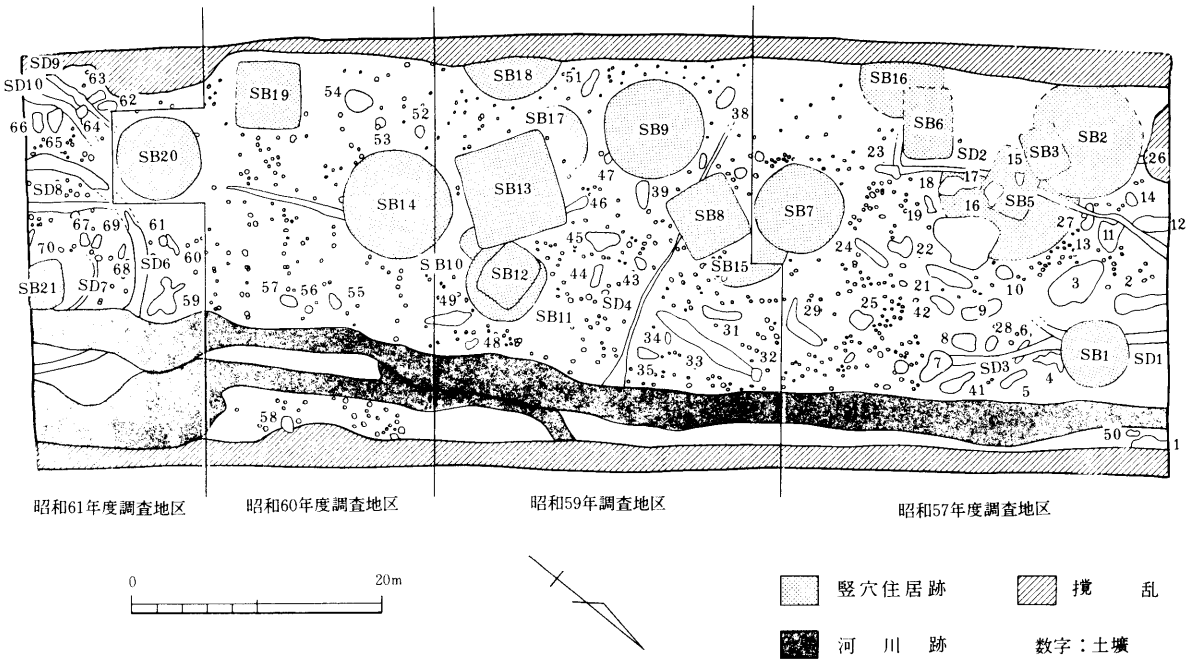


Fig54　遺跡保存地区遺構配置図

する。

検出した竪穴住居は弥生時代中期前半から古墳時代にかけての21棟で、弥生時代中期後半を主体とする。保存地区では中期前半～中頃、中期後半、後期前半、後期終末、古墳時代前期の、少なくとも五時期の竪穴住居跡が営まれていたことになる。中期後半の竪穴住居には床面積10㎡強のもの、30㎡前後のもののほかに、60㎡を超えるものの三種があるが、概して大形のものが多い。

61年度に調査した保存地区南端部では、径18ｍの弧状に巡る溝の内部で、方形に近い平面形態をもつ中期後半の住居跡を検出した。環濠をもつ住居群の一部と考えられ、環濠から九州系の須玖Ⅱ式の壺と周防を中心に出土する口縁部を下垂させる壺とが共伴しており興味深い。59年度に調査した古墳時代前期の住居跡のなかには、火災に遭い住居の桁材および垂木がそのまま焼け落ちた状態で検出されたものがあり、住居の上屋を想定する上で貴重な資料となった。また全年度において調査区東部を南から北へ貫流する古墳時代後期以降の河川跡を検出したが、この時期の住居は検出されておらず、周辺での今後の調査が期待される。

先に述べたように保存地区では計４次の調査を実施したが、今回は資料整理の完了した昭和57年度の調査成果を報告することにする。

3　昭和57年度の調査

〔１〕遺構・遺物

第１号竪穴住居跡（Fig. 55, PL. 26－(1)）

調査区北端部で検出した弥生時代中期後半の住居跡で、中央部南寄りを南北に第１号溝によって切られている。第４号土壙との切り合い関係は不明である。[2)] 平面形態は円形で上面径 540㎝、床面積19.0㎡の規模をもつ。壁高は検出面から26㎝である。主柱穴は６本で、西側３本は周壁に近接して配置されている。床面中央部には径約95㎝、深さ17㎝の円形の炉跡が造出される。壁溝は認められない。床面標高は約19.00ｍである。

出土遺物（Fig. 57－１，PL. 28(3)－１）

甕形土器

やや大きく開く口縁部は肥厚し、端部内面は跳ね上げ状を呈する。内外面とも横ナデ仕上げ。

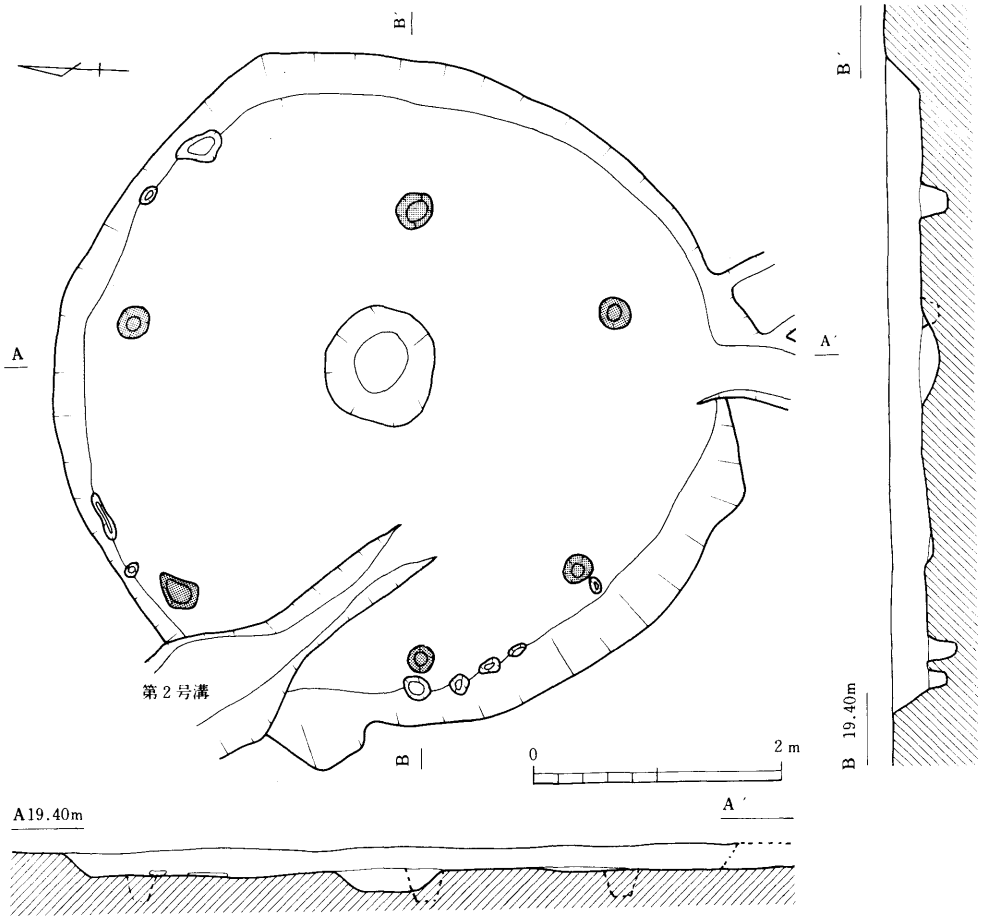


Fig. 55 第1号竪穴住居跡実測図

第2号竪穴住居跡（Fig. 56, PL. 26－(2)）

調査区の南西端で検出された弥生時代中期後半の住居跡で、第4号竪穴住居跡を切り、第3号竪穴住居跡、第26号土壙および第2号溝に切られている。平面形態は円形になるものと思われ、上面径推定約 880cm、床面積推定53.8m²の規模をもつ比較的大形の竪穴住居跡である。主柱穴は3本認められ、6～7本前後の主柱を有するものと推定される。また、周壁に沿って幅約25cm、床面からの深さ約6cmの壁溝が巡っている。第3号住居跡と切り合う付近には長さ86cm、幅約88cm、床面からの高さ約8cmの方形に近い階段状の張り出しが認められ、出入口としての機能をもつものかもしれない。床面標高は約18.75m。

なお、床面中央部付近には径約 104cm×88＋α cm、床面からの深さ26cmの炭化物の充塡した方形に近い炉跡が造出されている。

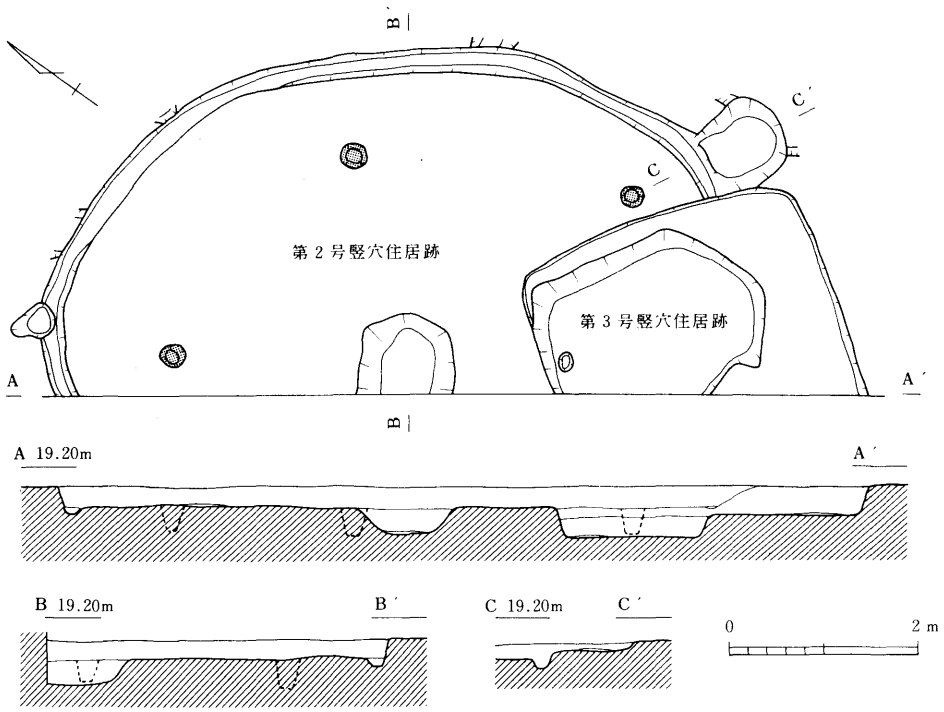


Fig. 56　第２・３号竪穴住居跡実測図

出土遺物（Fig. 57－２～13, PL. 28(3)－２～10・PL. 39－11～13）

壺形土器（２・３）

２はいわゆる鋤先状口縁をもつもので、拡張部は下垂する。現資料には浮文等はみられない。内外面とも横ナデによる調整を施すが、拡張部下面はナデ切れておらず、縦刷毛目が残る。３は断面三角形の退化した低い２条の貼り付け突帯をもつ頸部で、内外面とも磨滅・剝落のため調整不明。

甕形土器（４～10）

４は口縁端部内面が跳ね上げ状になるもので、頸部外面への強い横ナデにより口縁端部はやや肥厚気味になる。口唇部はほぼ平坦。５・６は直線に近く「く」の字に外反するもので、５は内面頸部以下ナデ、他は横ナデ。６は口縁部内外面横ナデ、他はナデ仕上げ。７～10は底部で、７・８・10は底径が小さく薄手である。９はやや上げ底がきつい。７・９・10は内、外底面ナデ、側面横ナデ仕上げであるが、８は胴部との境付近外面に縦刷毛目が施される。

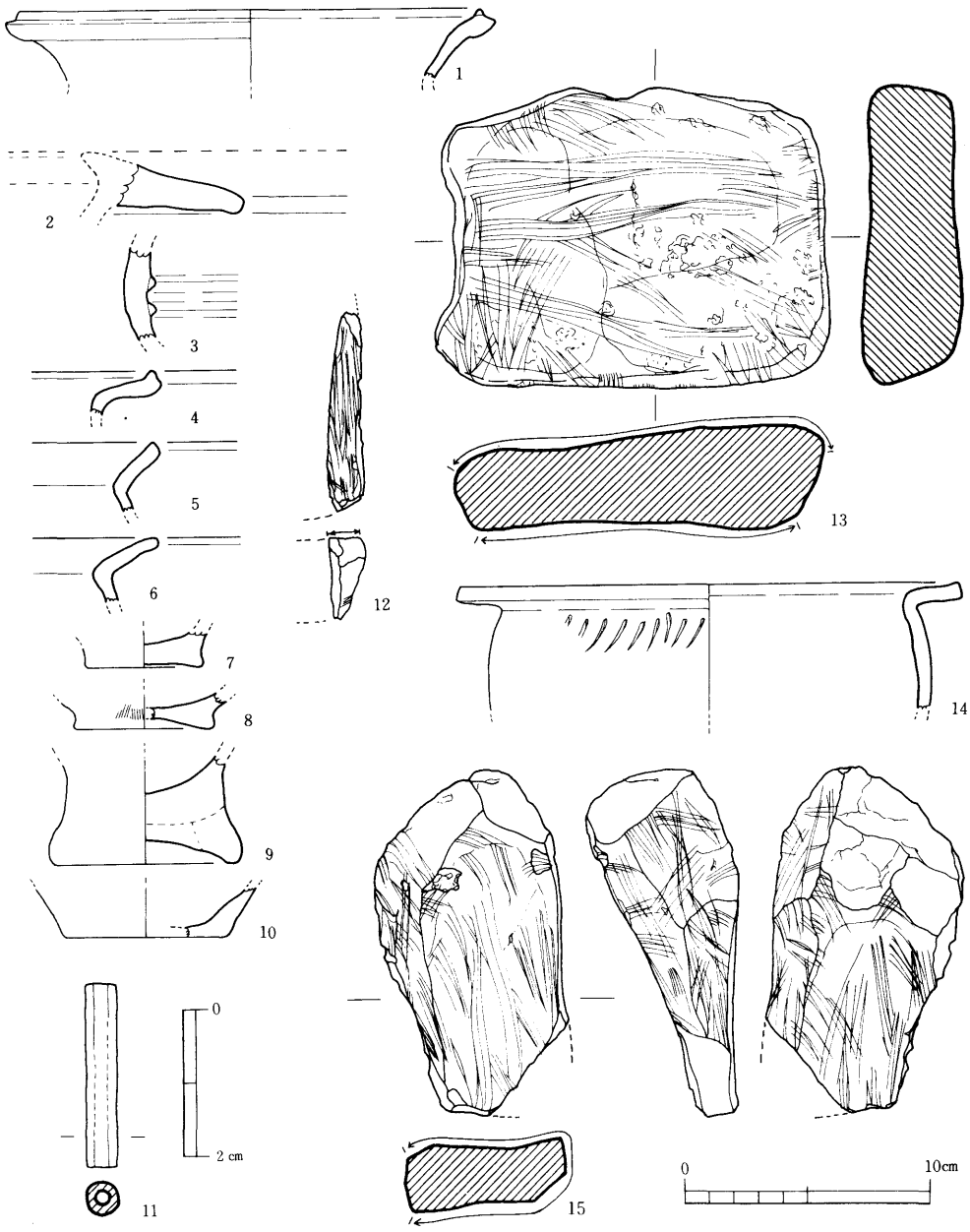


Fig. 57 第1・2・4・7号竪穴住居跡出土遺物実測図

管玉（11）

両面穿孔で完形。やや風化が認められる。碧玉製。長さ 2.3cm、外径4mm、内径は上端部 1.7mm、下端部2.0mm、重量0.40g。

砥石（12）

欠損品。仕上げ砥と考えられるもので、現資料では正面のみに研砥面が認められ、右側面は素材のまま放置している。チャート製。重量29ｇ。

台石（13）

扁平な転礫素材の作業台と考えられ、正裏両面に敲打による潰痕および粗い擦痕を残すが、正面左端部付近は積極的な擦過により窪み気味となる。珪化流紋岩製。重量1401ｇ。

第３号竪穴住居跡（Fig. 56, PL. 26－(2)）

調査区北西端部で検出され、第２号住居跡を切っている。平面形態は方形ないしは長方形と考えられ、北辺 310cm、東辺 232cm以上の規模をもち、検出面からの深さは30cmである。床面に柱穴１個を検出したが、主柱穴数は不明である。壁溝は巡っておらず、炉跡ないし竈は検出していない。なお、床面東・北部にはベッド状の高まりが認められた。遺物は土師器破片若干が出土したのみで、明瞭な時期比定は困難であるが、保存地区での住居・土壙の分布状況から推して、古墳時代中期以降の住居は検出されていないことから、弥生時代後期～古墳時代前期に属する蓋然性が高い。

第４号竪穴住居跡（Fig. 58, PL. 26－(2)）

調査区北西部で検出された住居跡で、第２号住居跡、第20号土壙、第２号溝によって切られている。後世の削平により西半部は消失し、東半部において壁溝のみが残存する。平面形態は円形で、径約８ｍ、床面積推定約50㎡の規模をもつものと考えられる。主柱は３本検出したが、柱穴配置からみて８本柱の構造になるものと思われる。壁溝は幅30～45cm、深さ８～12cmで、炉跡は認められなかった。第２号住居跡との切り合い関係および出土遺物から、弥生時代中期前半～中頃のものと考えられる。

出土遺物（Fig. 57－14, PL. 28(3)－14）

壺形土器

水平に近く強く折れ曲がる長めの口縁部をもち、頸部下位外面にはヘラによる「ノ」の字状の刺突文が巡る。口縁部内外面、頸部外面横ナデ、他はナデ仕上げ。

第５・６号竪穴住居跡（Fig. 58・59, PL. 26－(2)）

第５号住居跡は調査区北西部、第４号住居跡の内部で検出され、壁溝の存在状況によって住居跡として取り扱った。北東隅の壁溝のみが残存しており規模は不明。第２号溝、第16号土壙との重複関係が認められるが、切り合いは不明。平面形態は方形ないしは長方形になろう。壁溝は幅30～50cm、深さは床面から約10cmで、炉跡ないし竈は未検出。

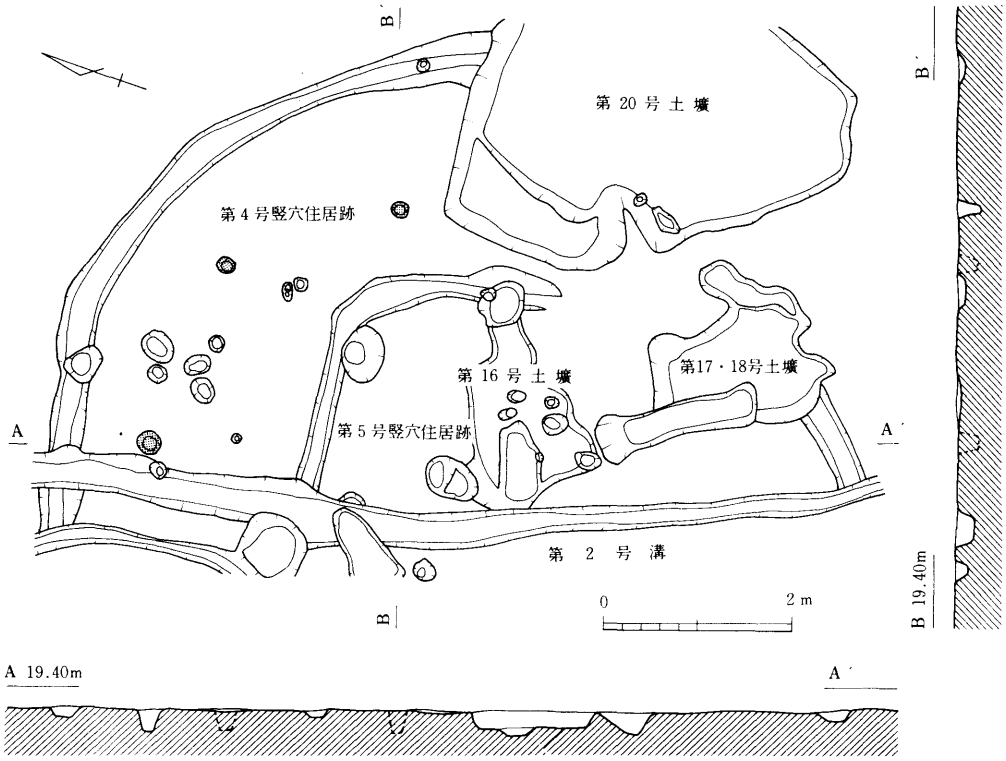


Fig. 58 第4・5号竪穴住居跡実測図

第6号住居跡は平面形態方形ないしは長方形と考えられるもので、第2号溝を切っている。東辺約 3.8mの規模をもち、壁溝は認められない。床面標高は約18.90m。

5号・6号住居とも土師器若干が出土したのみで時期比定は困難であるが、他の遺構との切り合い関係から6号住居の方が新しい。方形系統の住居跡は56年度の教育学部校舎増築に伴う調査で後期後半のものが、また、「遺跡保存地区」および昭和58年度に実施したラグビー場フェンス改修に伴う調査で古墳時代前期のものが検出されており、5号・6号とも弥生時代後期後半～古墳時代前期の比較的近接した時期の住居跡であろう。

第7号竪穴住居跡（Fig. 60, PL. 26－(3)）

調査区南西端部で検出した平面形態円形の住居跡で、壁溝のみが検出され周壁の立ち上がりは後世の削平により消失している。主柱は6本で比較的壁溝に近接して配置されている。床面積は34.8m²。壁溝は幅35～40cmで床面全周を巡っていたものと思われる。ほぼ円形に近い炉跡は床面西部に偏在し、上面径92cm×78cm、床面からの深さは約22cmである。出土遺物には弥生土器片若干があるが、平面形態が円形であることおよび保存地区での円

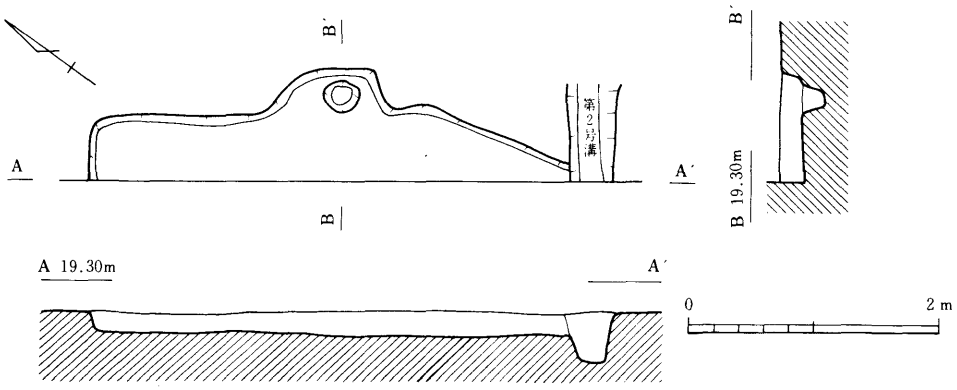


Fig. 59　第6号竪穴住居跡実測図

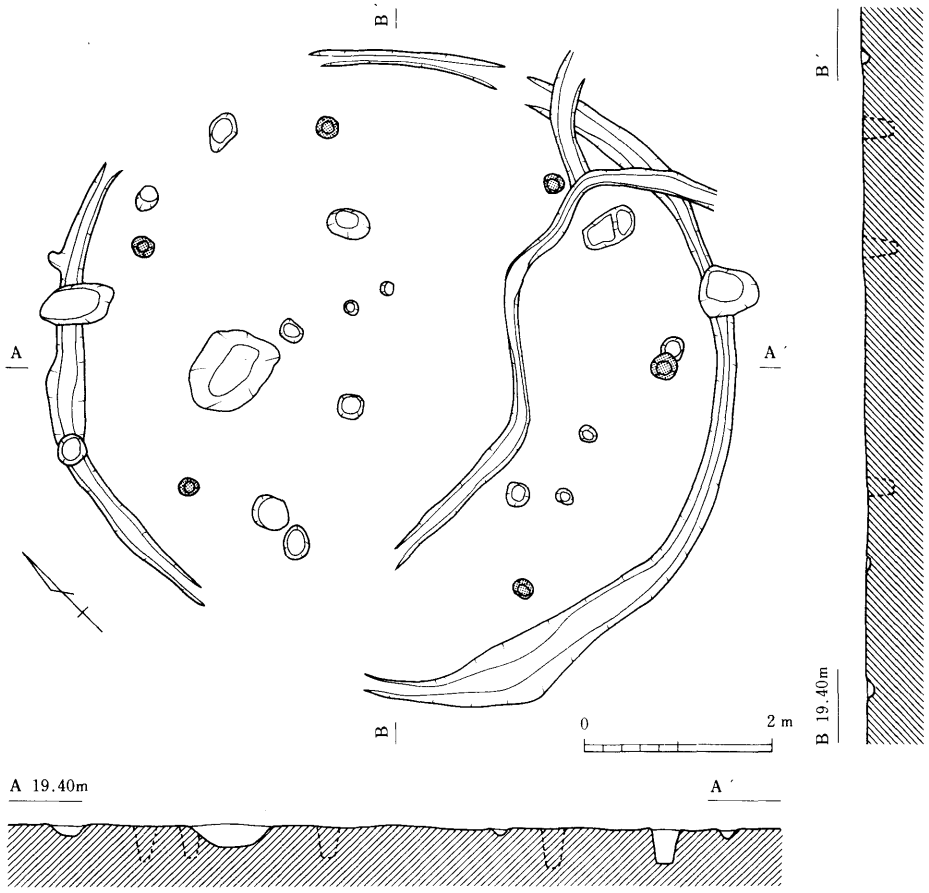


Fig. 60　第7号竪穴住居跡実測図

形住居の時期、分布状況から弥生時代中期のものと考えられる。

出土遺物（Fig. 57－15, PL. 39－15）

砥石

正・裏・右側面を研砥面とする転礫素材の砥石で、正裏両面の使用頻度は高い。重量612ｇ。珪長岩（フェルサイト）製。

土壙

33基検出した。北半部で分布頻度が高いが、土壙相互の切り合いは少なく、わずかに第13号土壙と第17号土壙、第17号土壙と第18号土壙が切り合う程度である。平面形態は不整形のものが大半を占め、長楕円形のものが混在する。後世の削平により残存状態はあまりよくないが、検出面での規模は長軸80cmと比較的小形の第28号土壙から長軸 565cmの第20号土壙まで様々であり、長軸 180～ 230cmおよび 300～ 350cm前後のものが多い。

また、各土壙からの出土遺物にも多寡があるが、おおむね竪穴住居と併行する弥生時代中期前半から古墳時代前期のものが多い。

第１号土壙（Fig. 61）

調査区北端部、第１号住居跡の北に近接して営まれた不整形な土壙である。長軸 282cm以上、短軸68cm以上、検出面からの深さ26cmの規模をもつ。底面は平坦で、東端部はテラス状の平坦面を有する。

出土遺物（Fig. 62－16～18, PL. 28(3)－16～PL. 29－18）

鉢形土器（16）

小形で、張りの少ない胴部に短く緩やかに外反する口縁部をもち、端部は尖り気味に終わる。外面、胴部内面は磨滅・剝落のため調整不明、口縁部内面は細かい刷毛目仕上げ。

甕形土器（17・18）

17は「く」の字に短く外反する口縁部をもち、口縁端部はわずかに外反する。外面は口縁部下半にまでおよぶ右上がりのタタキがみられ、胴部内面は刷毛目仕上げ。18はほぼ丸底の底部で、底部内面はナデ仕上げを行なう。

遺物の出土量が極めて少なく、また器形を知りうるものが鉢形土器に限られるため詳細な時期比定はできないが、甕は丸底の底部のものと、短く外反する口縁部をもち胴部外面に右上がりのタタキを有するものとが共伴している。県内におけるタタキ目技法は畿内庄内式土器の影響をもって成立したと考えられていることから、これらの土器は庄内併行期、弥生後期終末～古墳時代初頭に位置づけることができよう。

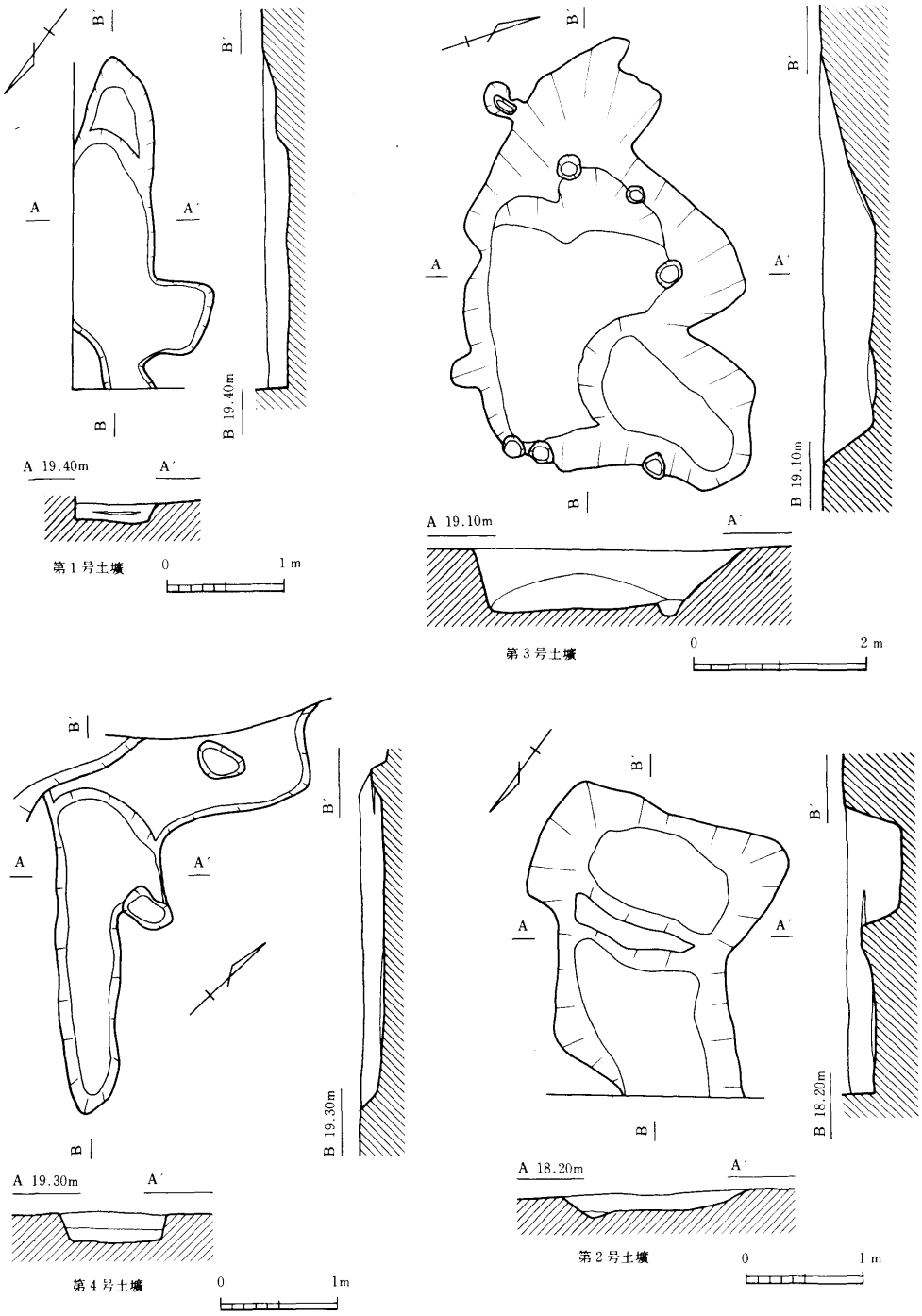


Fig. 61　第1～4号土壙実測図

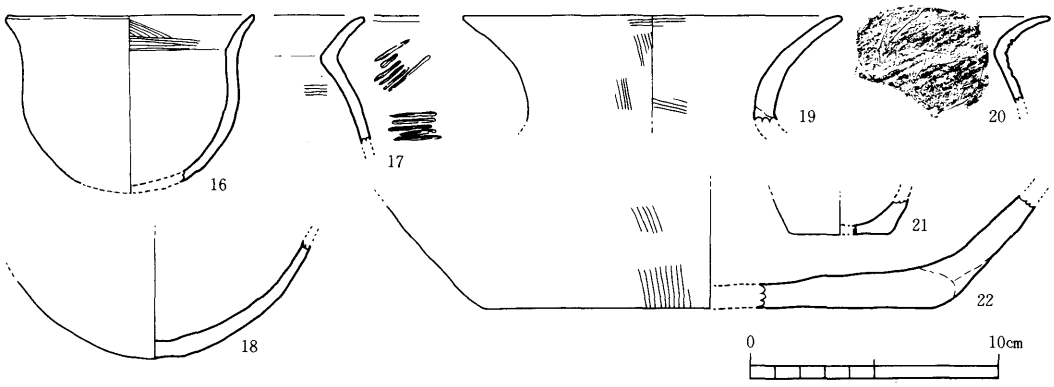


Fig. 62　第1・2号土壙出土遺物実測図

第2号土壙（Fig. 61）

調査区北端部、第1号住居跡の西に近接して検出された平面形態長楕円形の土壙である。2基の土壙の重複の可能性があるが、切り合いが不明瞭であるため一括して取り扱った。長軸 248cm以上、短軸は東側部分 216cm、西側部分 174cmの規模をもち、検出面からの深さはそれぞれ48cm、19cmである。

出土遺物（Fig. 62－19～22, PL. 29－19～22）

甕形土器（19～21）

19は大きく外反する長い口縁部をもち、口縁端部はやや尖り気味に終わる。内外面とも刷毛目のち横ナデ仕上げ。20は短く外彎しながら「く」の字に屈曲する口縁部をもち、口縁端部は尖る。外面は右上がりのタタキが口縁部下半まで施される。

壺形土器（22）

大形の壺の底部で平底。内面と外底面はナデ、他は縦刷毛目仕上げ。

以上の土器は平底の壺の底部を含むことから、庄内併行期でも1号土壙よりは古い時期のものと考えられる。

第3号土壙（Fig. 61）

調査区の北部、第1号住居跡の南、第2号土壙の東に近接して営まれた平面形態不整形の土壙である。長軸 471cm、短軸 312cmの規模をもち、遺跡保存地区では比較的大形の部類に入る。西壁は東へ緩やかに下降しており、最深部の東側で検出面からの深さ54cmを測る。出土遺物は弥生土器壺、甕、砥石など多量で、床面からわずかに浮いた状態で出土している。弥生時代後期前半。

出土遺物（Fig. 63～67, PL. 29－23～PL. 32－89・PL. 39－90）

壺形土器（23・24・32）

23は大きく開く口縁部をもち、わずかに肥厚する端部外面に1条の凹線風の沈線が巡る。頸部外面には幅広の低い粘土帯を貼付後、凹線を巡らし突帯状に仕上げている。内外面とも風化のため調整不明。24は複合口縁となるもので、頸部から短く「く」の字に外反し、さらに内上方へ短く直線的に立ち上がる口縁部をもつ。口縁部の器壁は薄く、端部は平坦。胴部の張りは強い。口縁部、頸部内外面横ナデ、胴部内面粗いナデ、外面風化のため調整不明。

甕形土器（25～31・33～89）

口縁部が内面に稜をもたず短く外反するもの（25～29・31・35・64・67・68）や逆「L」字状に強く外反するもの（61・62）もあるが、主体を占めるのは「く」の字状に外反するものである。短く緩やかに外反するものには、端部外面に1～2条の凹線風の沈線が巡るもの（25～27・35）がある。概して器壁が厚く、31を見る限り長胴で胴部最大径は中位より上にあり口径を上回る。

25は口縁端部が肥厚し、内外面横ナデ仕上げ。26は胴部の張りが強く口縁部は外彎気味に外反する。口縁部、頸部内外面横ナデ、胴部内外面ナデ仕上げ。35は口縁端部を内上方へ拡張し、端部外面に2条の凹線風の沈線が巡る。口縁部内外面横ナデ、胴部内面ヘラ削りを行なうが、外面は風化のため調整不明。31は胴部と同じ壁厚で口縁部にいたる。口縁部、頸部内外面横ナデ、胴部外面粗い縦刷毛目、内面粗いナデ仕上げを行なう。28・29は口縁部が直線的に外反する。いずれも口縁部内外面横ナデ。胴部は28は内面ナデ、外面風化のため調整不明。29は内外面風化のため調整不明。56・57は口縁端部が肥厚する。いずれも口縁部内外面横ナデ、胴部内外面ナデ仕上げ。64・67は端部外面に粗い横ナデが施されており、口縁部内外面横ナデ、胴部内外面ナデ仕上げ。68は胴部最大径が口径に近く、口縁端部はやや丸みをおびる。

逆「L」字状に外反するものは口縁部が直線的に強く屈曲し、頸部内面に明瞭な稜をもたず屈曲し口縁端部がほぼ平坦なもの（61・62）と、短く屈曲し肥厚する口縁端部外面が窪むもの（48）とがある。61は口縁部、頸部内外面横ナデ、胴部内面ナデ、外面風化のため調整不明。62は内外面とも横ナデで、口縁部内面は強い横ナデによりやや窪み気味となる。いずれも中期的様相をおびる。48は口縁部内外面横ナデ、胴部内面ナデ、外面風化のため調整不明。

口縁部が「く」の字に外反するものは、直線的に開くもの（37～47・49～58・60・65・66・69～74）が主体を占め、内彎気味に開くもの（30・59）、外彎気味に開くもの（75）もある。

37は張りの弱い胴部に強く屈曲する口縁部をもち、口縁端部は横ナデにより窪む。口縁部内外面横ナデ、胴部内面ナデ、外面風化のため不明。頸部外面はヘラによる押圧を加えている。38は口縁部がわずかに外彎気味に開き、やや肥厚する端部外面は横ナデにより窪む。口縁部内外面横ナデ、胴部内面ナデ、外面風化のため不明。39・50・51は胴部の張りがほとんどなく長胴で、口縁部の屈曲度が弱い。39は口縁部外面が窪み、50・51は平坦。いずれも口縁部内外面横ナデ、胴部内外面ナデ仕上げ。40～42・45は口縁部が肥厚して外反するもので、口縁端部外面が横ナデにより窪む。いずれも口縁部内外面横ナデで胴部外面ナデ仕上げを行なうが、41・42は粗い。胴部内面は40がヘラ削り、41がヘラ削りののちナデ、42がナデ仕上げを行なう。43・53は口縁部の屈曲がやや強く、43は内彎気味に外反し、頸部外面はヘラによる押圧を加えている。口縁部内外面横ナデ、胴部内外面ナデ仕上げ。53は口縁部内外面、胴部内面横ナデ、胴部外面ナデ仕上げ。44は口縁部が肥厚し、内外面とも横ナデ調整を行なう。46・47は器壁が薄く、46は口縁端部外面が横ナデにより窪む。47は口縁部が強く屈曲し、端部は跳ね上げ口縁となる。いずれも口縁部内外面横ナデ、胴部内外面ナデ仕上げ。52・72・73は薄手で、いずれも口縁部内外面横ナデ、胴部内外面ナデ仕上げを行なうが、72は口縁部内面横刷毛目ののち横ナデを行なう。53・54は頸部にしまりがなく、外彎気味に緩やかに外反する。54は口縁部内外面横ナデ、胴部内面ナデ、外面風化のため不明。55は口縁部内外面横ナデ、胴部内外面ナデ仕上げ。60は口縁端部付近で内彎して開くもので、口縁部内外面横ナデ、胴部内外面風化のため不明。65・66は小形品と思われ、口縁部を短く折り曲げる。65は口縁部内外面横ナデ、胴部内面ナデ、外面風化のため不明。66は口縁部内外面横ナデ、胴部外面縦刷毛目仕上げ。69は口縁部外面縦刷毛目ののち横ナデ、内面横ナデ、胴部外面刷毛目ののちナデ、内面はナデて仕上げる。74はやや張りの強い胴部にやや厚手の口縁部をもち、端部は尖り気味に終わる。外面は粗い縦刷毛目仕上げを行なうが、口縁部、頸部はさらに横ナデを行なう。口縁部内面は横ナデ、胴部内面風化のため不明。

30・59は口縁部が内彎気味に「く」の字に外反するものである。30は粘土貼付により口縁端部を肥厚させ、外面にヘラによる凹線風の沈線が巡る。外面、口縁部内面横ナデ、胴部内面ナデ仕上げ。59は口縁部内外面横ナデ、胴部外面縦刷毛目、内面ヘラ削りを行なう。

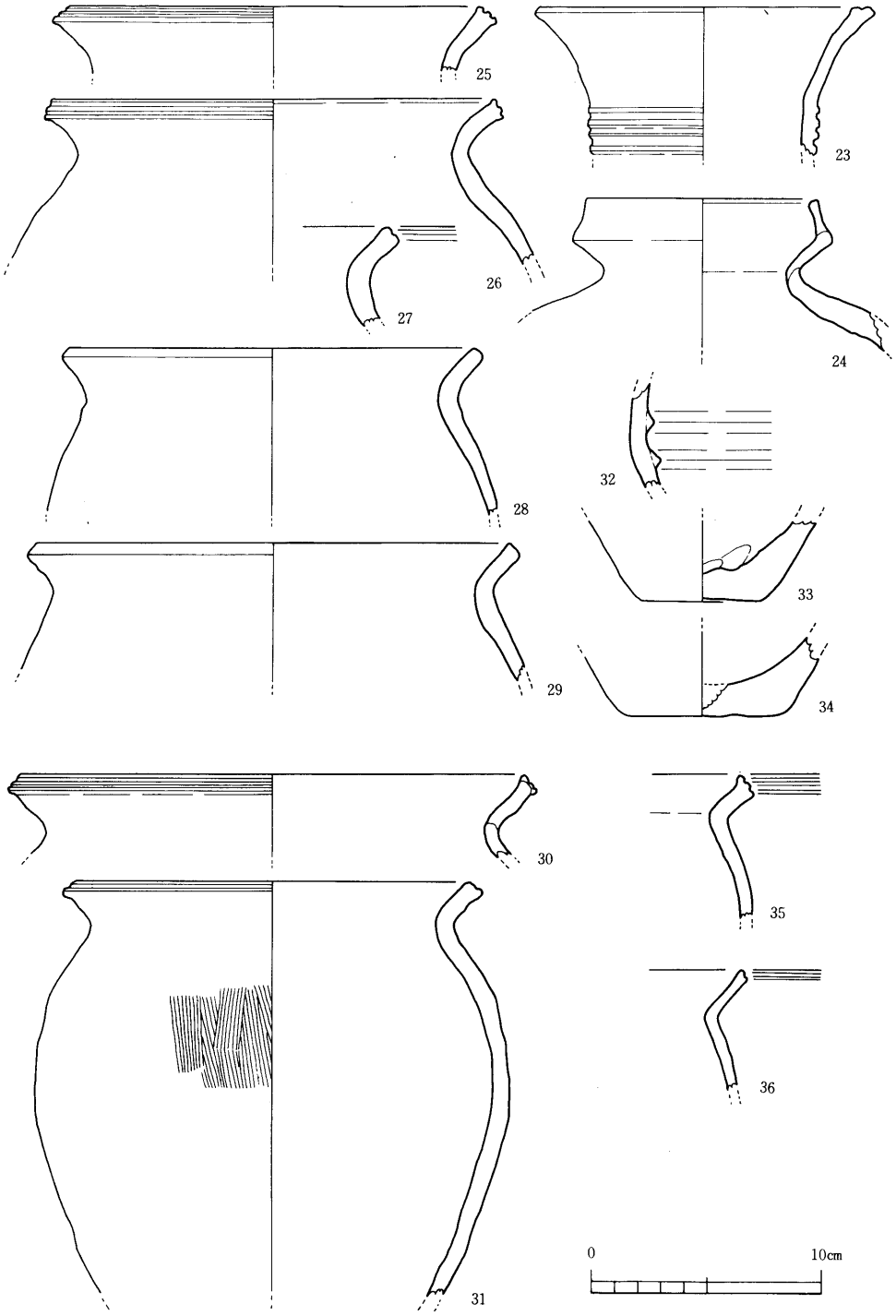


Fig. 63 第３号土壙出土遺物実測図（１）

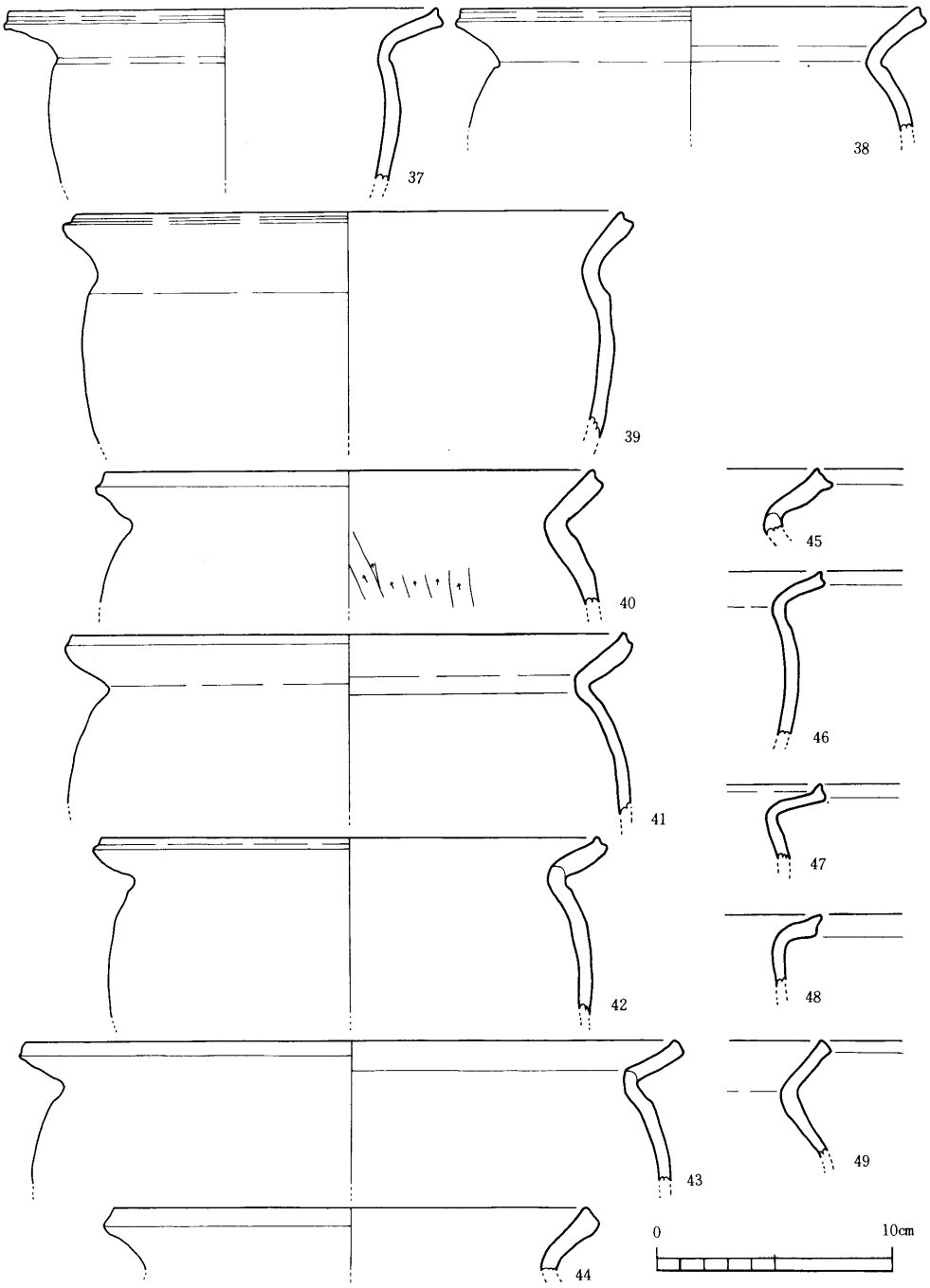


Fig. 64　第３号土壙出土遺物実測図（２）

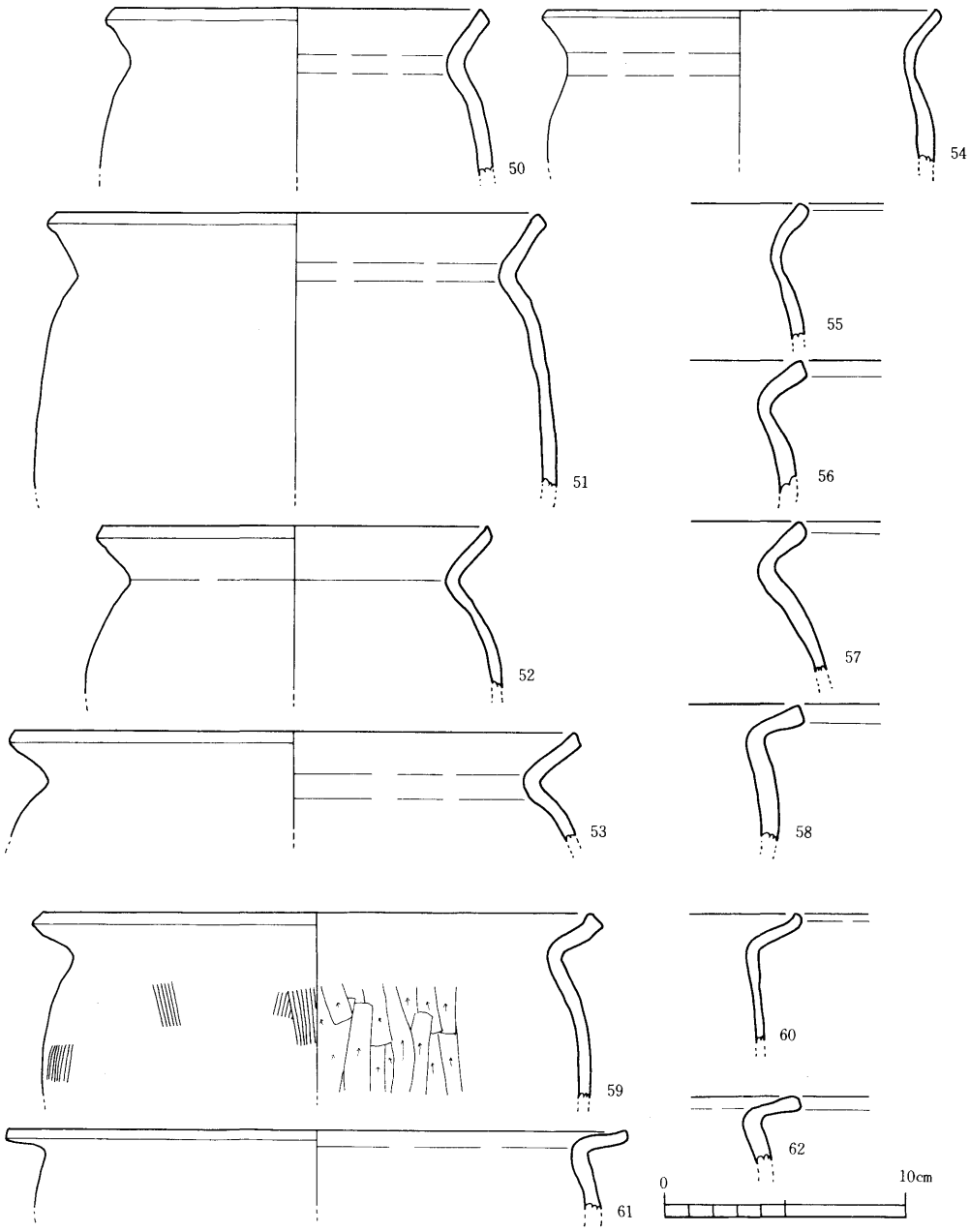


Fig. 65　第３号土壙出土遺物実測図（３）

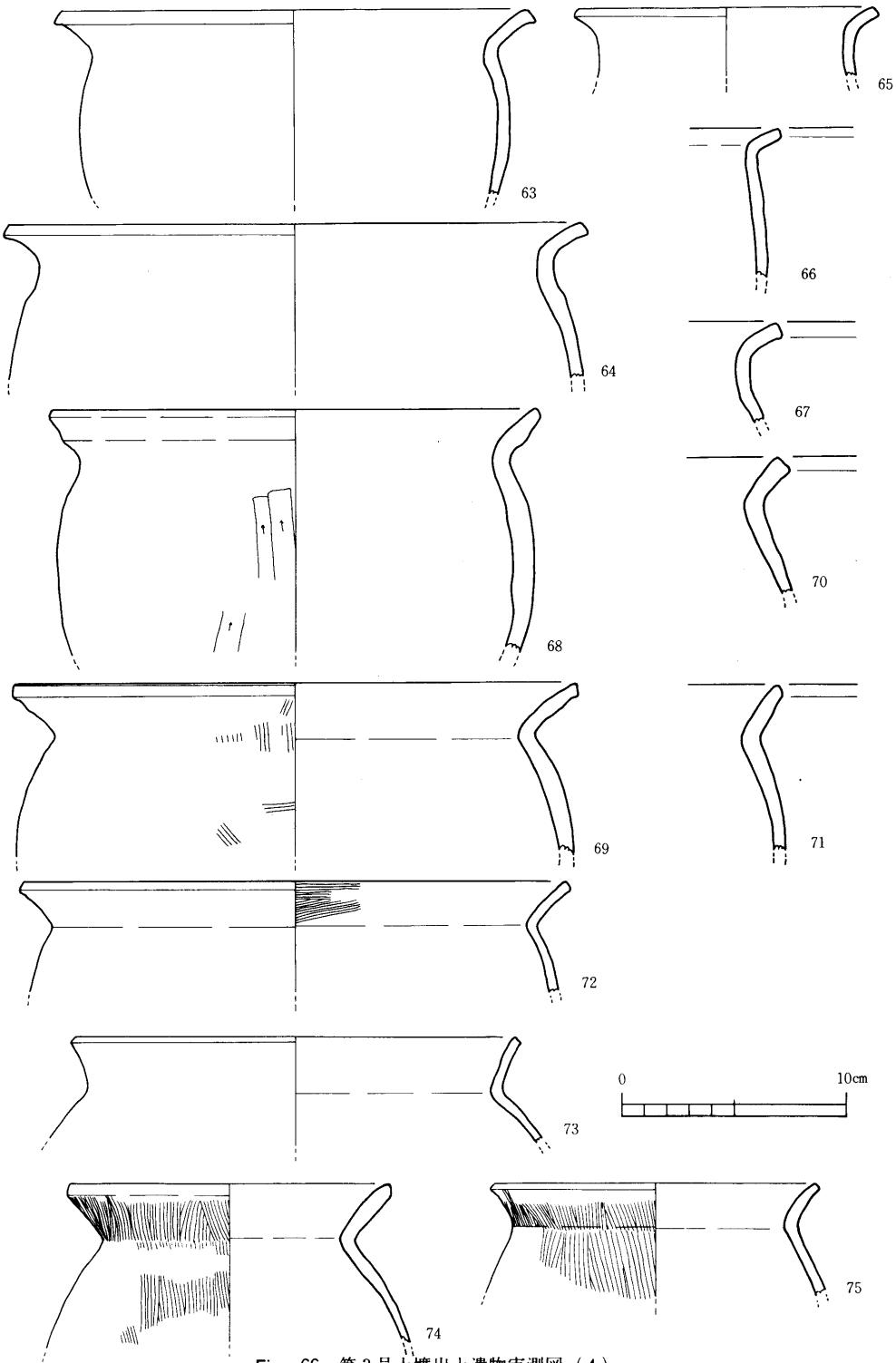


Fig. 66　第３号土壙出土遺物実測図（４）

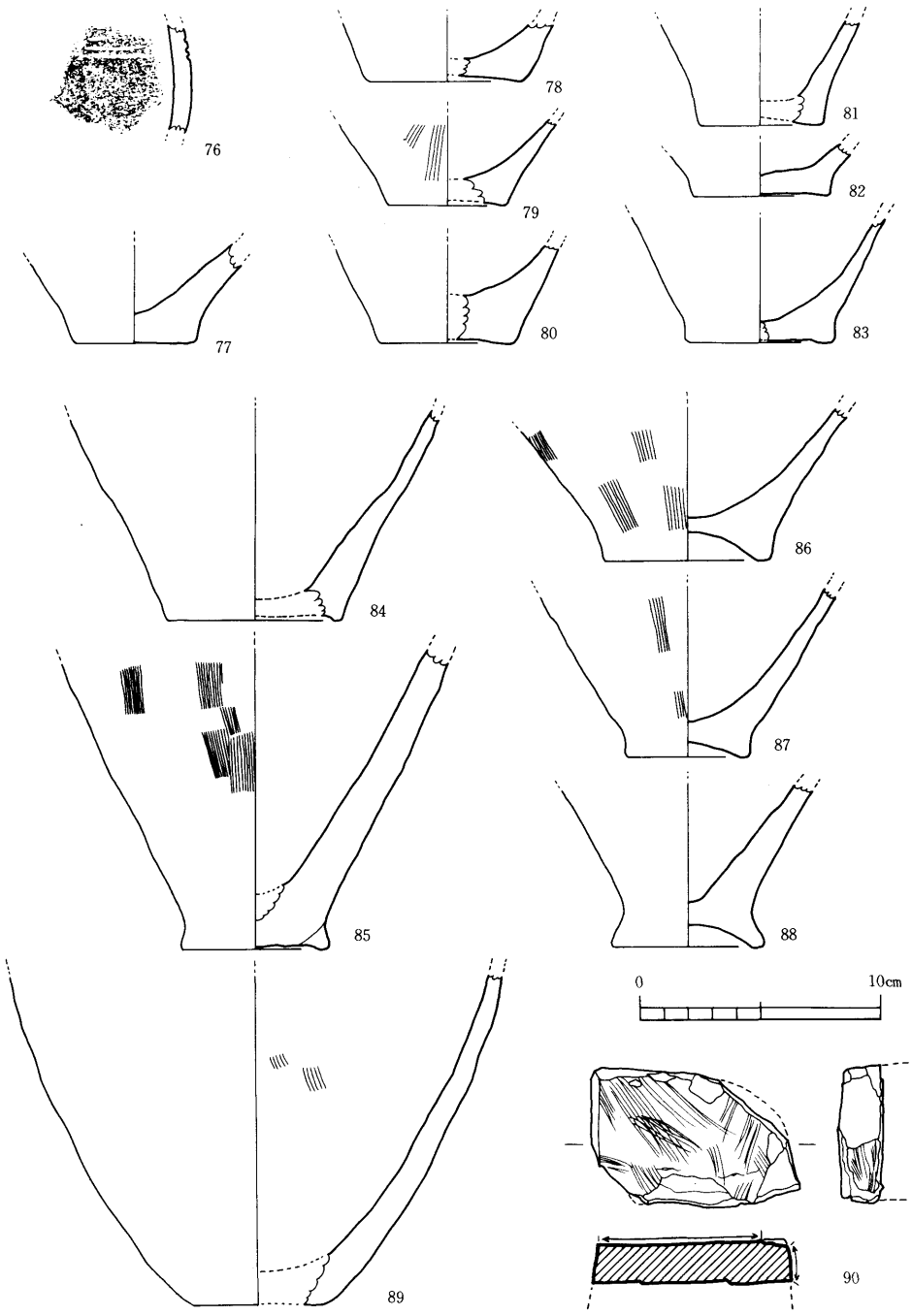


Fig. 67　第３号土壙出土遺物実測図（５）

75は口縁部が外彎気味に短く開き、端部は平坦である。外面縦刷毛目仕上げを行なうが、口縁部外面は横ナデを加えている。また、胴部と口縁部とで刷毛目原体を使い分けており、精粗の差がみられる。口縁部内面横ナデ、胴部内面ナデ仕上げ。76は外面に3条のヘラ描き沈線が巡り、外面縦刷毛目、内面ナデ仕上げ。混入品であろう。

33・34・77～89は底部で、壺と甕の区別がつきにくいが大半は甕の底部であろう。いずれも底径が小さく、平底ないしは平底に近いもの（33・34・77～85)、上げ底のもの（86～88)、不安定な平底のもの (89) がある。風化が著しく、各個体のすべての調整は知りえないが、外面はナデ仕上げのもの（77・84)、縦刷毛目仕上げのもの（79・85～87）がある。また、内面はナデ仕上げのものが多い（77～86）が、89は内面下半ナデ、上半縦刷毛目の痕跡が残る。

砥石（90)

正面および右側面を研砥面とする砥石で、仕上げ砥と考えられる。上下端、左側面は未使用面が残る。正面右側面上半を中心に欠損が著しい。流紋岩製。重量137ｇ。

第4号土壙（Fig. 61, PL. 26－(4))

調査区北端部で検出された平面形態不整形の土壙である。北半部を第1号住居跡によって失っているが、その切り合い関係は不明である。長軸方向は北－南で長軸 320cm以上、短軸90cm、検出面からの深さは21cmの規模をもつが、残存状態は良好とはいえない。底面よりやや上位で、弥生土器壺、甕が出土し、これらの出土遺物から第1号住居跡と近接した弥生時代中期後半のものと考えられる。

出土遺物（Fig. 68, PL. 32－91～104)

壺形土器（91～94)

91は大きく外彎しながら開く口縁部をもち、口縁端部が跳ね上げ状になる。口縁部内外面刷毛目のち横ナデ、端部内外面横ナデ仕上げ。92は口縁部内面にやや扁平な断面三角形の1条の貼付突帯が巡る。93・94は胴上半部の破片で、93は少なくとも2条のヘラ描き沈線が巡る。92・93とも内外面磨滅・剥落のため調整不明。94は貝殻腹縁による4条の沈線下に無軸の羽状文を施文する。内外面ヘラミガキで仕上げる。

甕形土器（95～104)

95～100は口縁部～胴上半部の破片で、「く」の字状に屈曲する口縁部をもち、端部が跳ね上げ状になるものである。口縁部が内彎気味に開くもの（95・96）と直線的に開くもの（97～100）とがあり、水平に近く折れ曲がるもの（96～98）もある。口縁端部外面が横

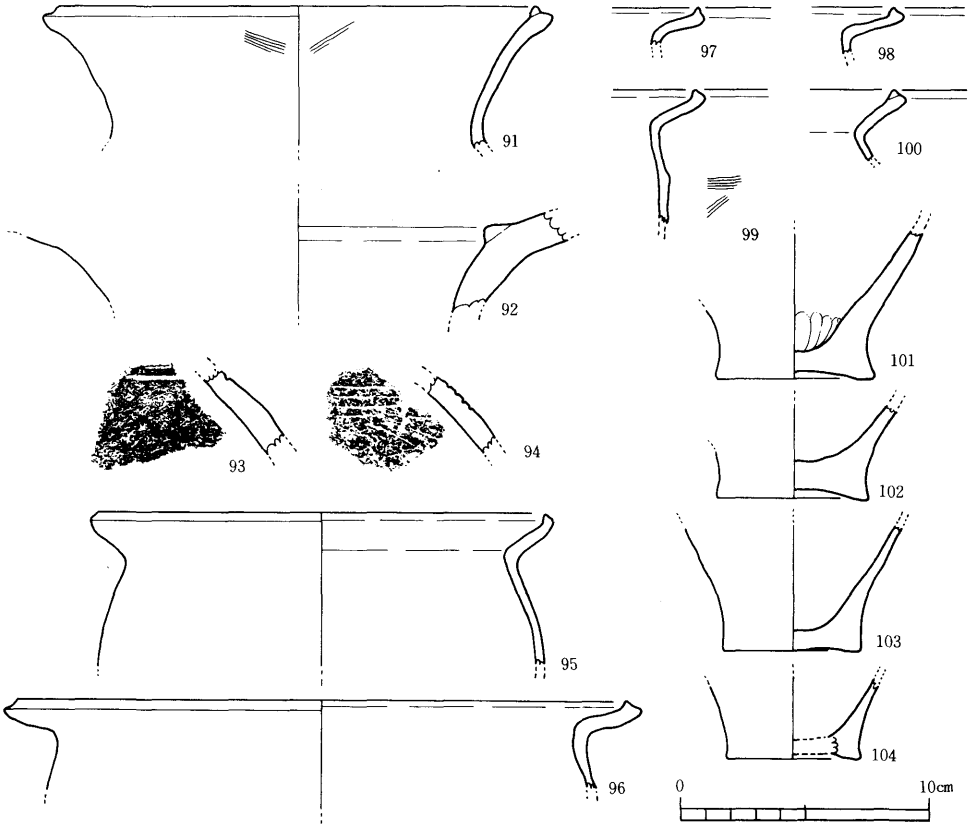


Fig. 68　第4号土壙出土遺物実測図

ナデによりやや窪むものが多い。いずれも口縁部内外面横ナデで、95・96は磨滅・剝落のため胴部の調整は不明であるが、99は胴部外面刷毛目、内面ナデ仕上げ。

101～104は底部。接地面がやや裾広がりになるもの（101・102）はやや上げ底気味で、側面が垂直に下降するもの（103・104）は小さな平底に近い。外底面および内面はナデで、101は内面に指圧整形痕が残る。外面は、横ナデが観察される104を除いて、いずれも磨滅・剝落が著しく調整は不明。

第5号土壙（Fig. 69, PL. 27－(1)）

調査区北部、第4号土壙の東に近接して営まれた平面形態三日月形の土壙である。2基の土壙の重複の可能性があるが切り合い関係が不明瞭で、一括して取り扱った。長軸方向は北西－南東で、長軸236cm、短軸90cmの規模をもつ。東半部はテラス状の平坦面を有しており、最深部の西半部で検出面からの深さは26cmである。出土遺物には弥生土器壺、甕がある。弥生時代後期後半。

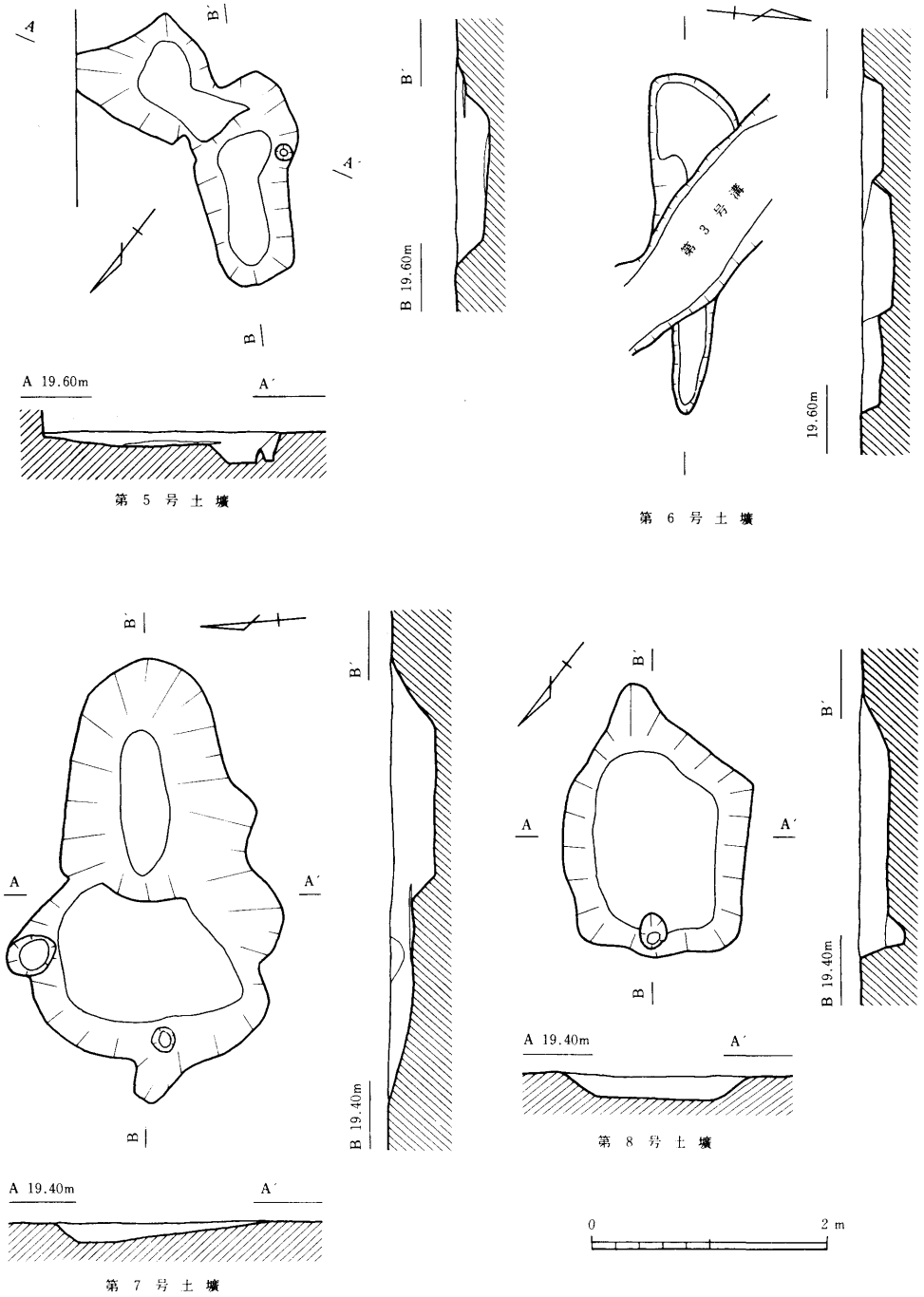


Fig. 69 第5～8号土壙実測図

出土遺物（Fig. 70－105・106, PL. 32－105・106）

壺形土器（105）

内傾する筒状の頸部をもち、口縁部はそのまま緩やかに短く外反する。内外面とも磨滅・剝落が著しく調整不明。

甕形土器（106）

「く」の字に外彎しながら開く口縁部をもち、端部は尖る。口縁部内外面横ナデ、内面細かい横刷毛目仕上げで、頸部内面はナデている。外面は磨滅・剝落のため調整不明。

第6号土壙（Fig. 69）

調査区北部、第1号住居跡の南、第5号土壙の西に近接して営まれた土壙で、第3号溝との切り合い関係は不明である。平面形態は長楕円形で、長軸284cm、短軸約75cmの規模をもち、底面はほぼ平坦である。長軸方向は東－西。遺存状態が悪く、検出面からの深さは15cmを残すのみである。出土遺物には弥生土器壺、甕がある。弥生時代中期。

出土遺物（Fig. 70－107・108, PL. 32－107・PL. 33－108）

壺形土器（107）

張りの強いソロバン形の胴部をもつ長頸壺で、胴部最大径の部位に扁平な断面三角形の突帯を1条貼付する。内外面とも磨滅・剝落のため調整不明。

甕形土器（108）

上げ底気味の底部で、側面は横ナデ、他はナデ仕上げ。

第7号土壙（Fig. 69）

調査区中央部の東隅、第6号土壙の南東で検出された平面形態長楕円形の土壙である。第3号溝との切り合い関係は不明。長軸方向は東－西で、長軸378cm、短軸190cmの規模をもつ。西半部にテラス状の平坦面をもち、最深部の東半部で検出面からの深さ39cmを測る。出土遺物は西半部の平坦面に貼り付いた状態で出土しており、弥生土器壺、甕、高坏等がある。弥生時代中期前半。

出土遺物（Fig. 70－109～114, PL. 33－109～114）

壺形土器（109）

いわゆる鋤先状の口縁部をもつもので、端部には粘土帯を貼付して斜上下に拡張させるが未発達である。拡張部外面には少なくとも2個を単位とした円形浮文が巡る。拡張部付近内外面横ナデ、他はナデ仕上げ。他の土器に比べ胎土が良い。

甕形土器（110～113）

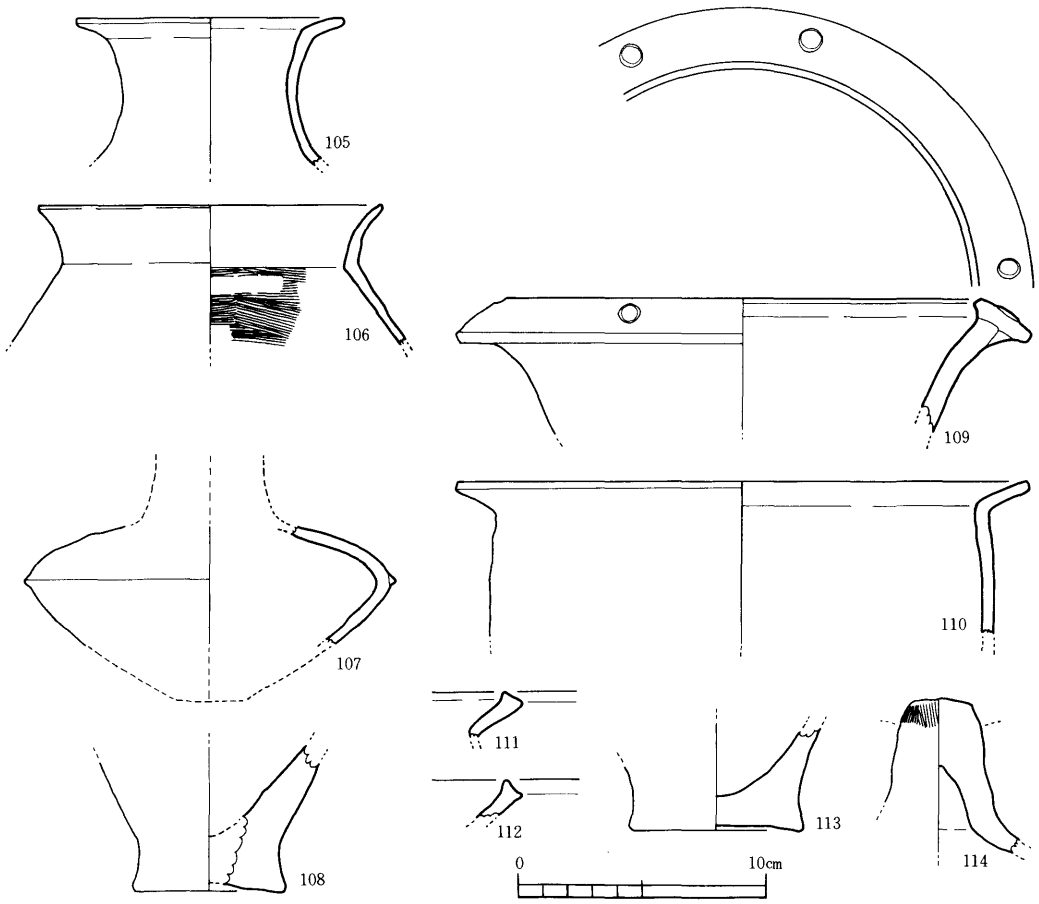


Fig. 70　第5～7号土壙出土遺物実測図

110は逆「L」字状に近く強く屈曲する口縁部をもち、胴部は張らない。111・112は跳ね上げ口縁をもつものである。いずれも口縁部内外面横ナデ、111は胴部磨滅・剝落のため調整不明。113は底部で、わずかに上げ底気味。側面横ナデ、外底面・内面ナデ仕上げ。

高坏形土器（114）

短脚の高坏で、脚部中位付近で屈曲し外方へ開く。坏部に挿入された部位に縦刷毛目が残存しており、外面は刷毛目仕上げと思われる。内面は粗くナデている。

第8号土壙（Fig. 69, PL. 27－(2)）

調査区中央部東隅、第7号土壙の西に近接して営まれた土壙である。西壁に接して柱穴との切り合いがみられる。平面形態は五角形状を呈し、長軸232cm、短軸158cm、検出面からの深さ21cmの規模をもつ。遺物は少なく、底面からやや浮いた状態で弥生土器壺、

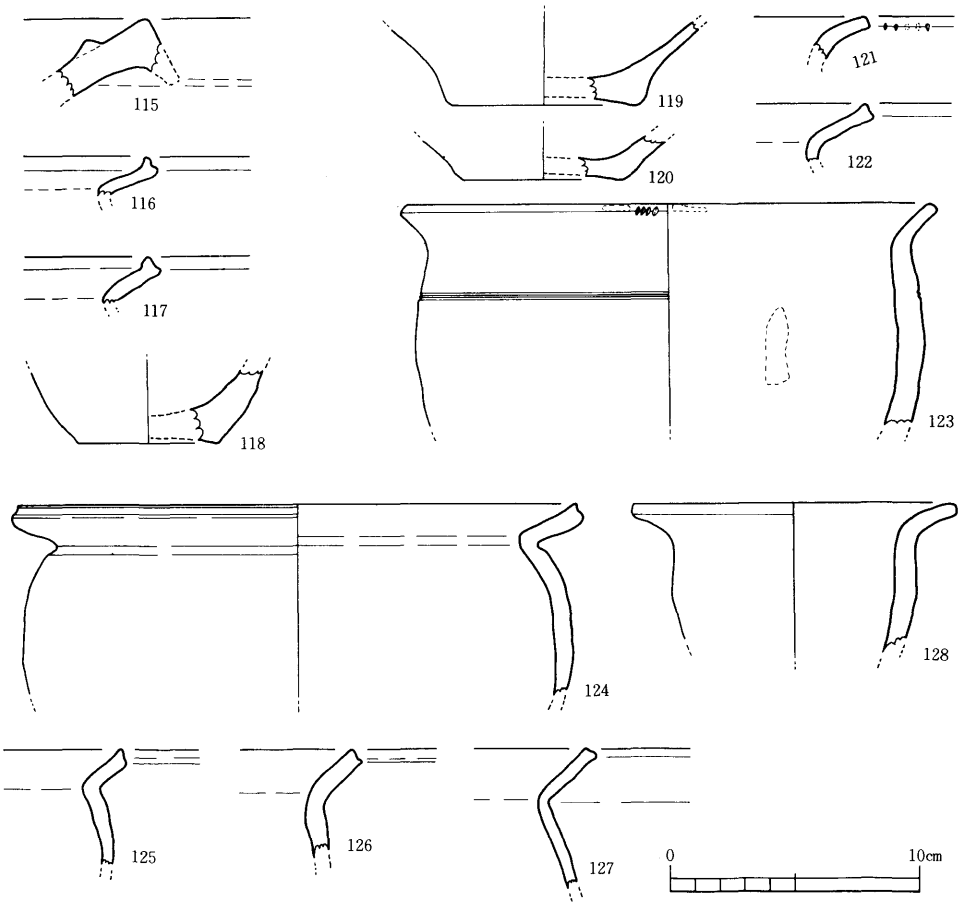


Fig. 71　第8・10・12号土壙出土遺物実測図

甕が出土した。弥生時代中期後半。

出土遺物（Fig. 71－115～118, PL. 33－115～118）

壺形土器（115・118）

115は屈曲して斜めに下垂する口縁部で、下垂度は小さいものと考えられる。内面には断面三角形の扁平な貼付突帯が弧状に巡るが小破片のためその展開は不明である。口唇部外面への施文は現資料ではみられない。内外面とも横ナデ仕上げ。

甕形土器（116・117）

いわゆる跳ね上げ口縁をもつもので、内外面とも横ナデ仕上げ。

第9号土壙（Fig. 72, PL. 27－(3)）

調査区中央部、第8号土壙の西に近接して営まれた土壙である。平面形態は長楕円形で、

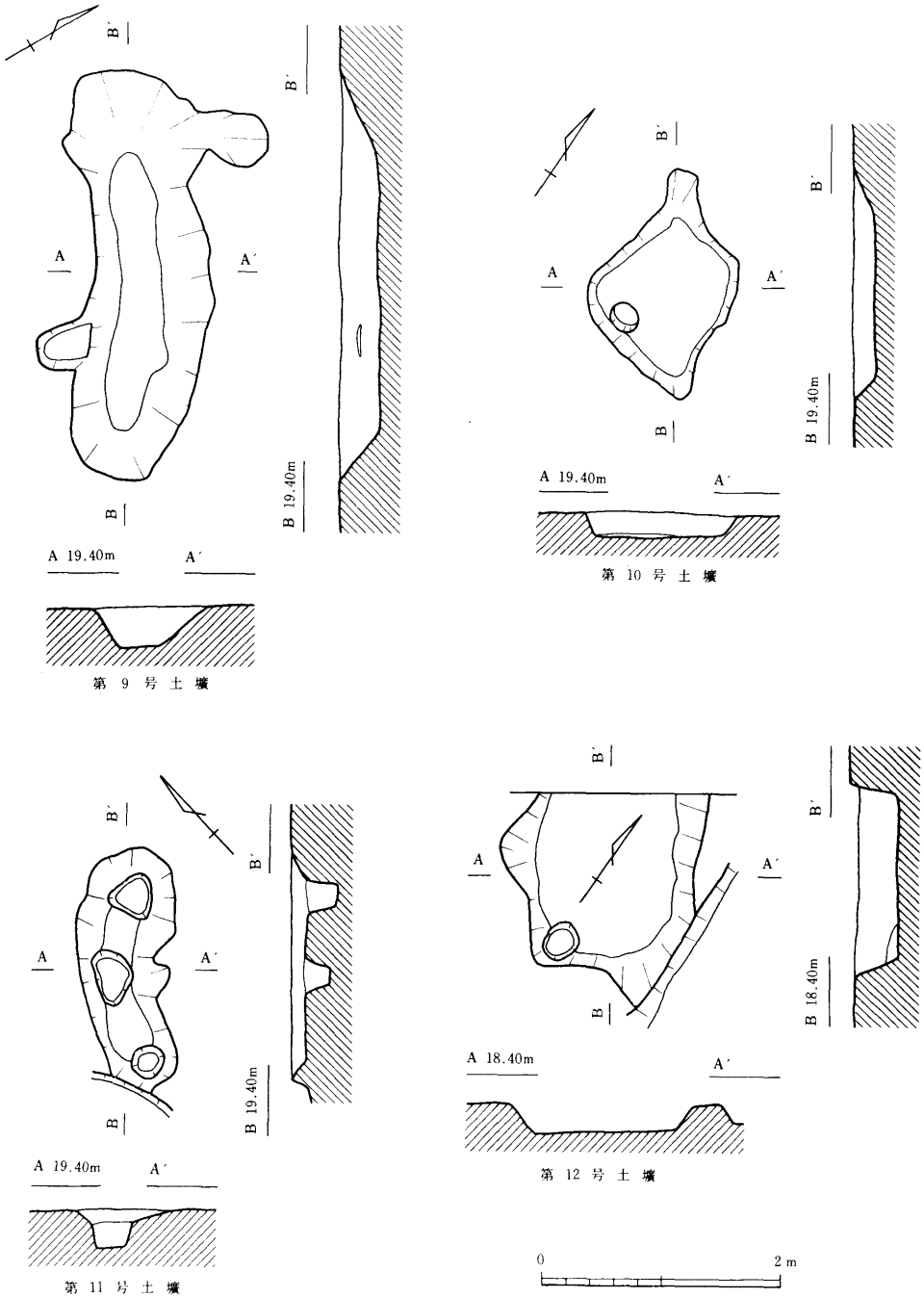


Fig. 72 第9～12号土壙実測図

長軸方向は北西－南東。壁面の立ち上がりは比較的緩やかで長軸340cm、短軸194cmの規模をもつ。底面はほぼ平坦で検出面からの深さは33cm。出土遺物には弥生土器壺、甕があり、ほぼ底面に貼り付いた状態で出土した。弥生時代後期前半。

出土遺物（Fig. 73・74, PL. 33－129～PL. 34－147）

壺形土器（Fig. 73－129・130）

口縁部を短く上下に拡張するもので、130は口縁部外面に円形浮文を貼付する。129・130とも内外面横ナデ仕上げ。

甕形土器（Fig. 73－131～Fig. 74－147）

131～144は「く」の字に外反する口縁部をもつもので、口縁端部外面にヘラによる凹線風の沈線が巡るもの（131～137）、端部が平坦に近いもの（138～141）、跳ね上げ口縁となるもの（142～144）がある。端部外面が窪むもののなかには胴部の張りがほとんどないもの（135・137）がある。口縁端部が平坦に近いものは口縁部が直線的に開き、小形品が含まれている。跳ね上げ口縁となるものは、口縁部が内彎しながら開くもの（142）と、直線的に開くもの（143・144）とがあり、144は142・143に比べ器壁が厚く、口縁部が短く外反する。調整は、口縁部内外面横ナデで、胴部外面はナデ仕上げのもの（132～137・139～141）と刷毛目仕上げのもの（142・144）とがあり、134・135・137・140のナデは粗い。胴部内面はナデるもの（132～134・137・138・140・141・144）が多く、刷毛目仕上げのもの（136）やヘラ削りののちナデるもの（142）もある。

145～147は底部で、ほぼ平底のもの（145・146）とやや上げ底気味のもの（147）とがある。いずれも底部側面付近横ナデで、他はナデ仕上げ。147は粗くナデられている。

第10号土壙（Fig. 72）

調査区のほぼ中央部、第9号土壙と第4号住居跡間に営まれた土壙である。平面形態は不整方形を呈し、長軸192cm、短軸128cmの規模をもつ。底面はほぼ平坦で、南壁付近で柱穴と切り合っている。検出面からの深さは17cmで遺存状態は悪い。底面からやや上位で弥生土器壺、甕が出土した。弥生時代前期末と中期前半のものが混在する。

出土遺物（Fig. 71－119～123, PL. 33－119～123）

壺形土器（119・120）

底部の破片。119はわずかに上げ底で、内面、外底面ナデ、側面横ナデ仕上げ。胴部外面磨滅・剝落のため調整不明。120は底部とほぼ同じ器壁厚で胴部にいたる。内面ナデ、外面調整不明。

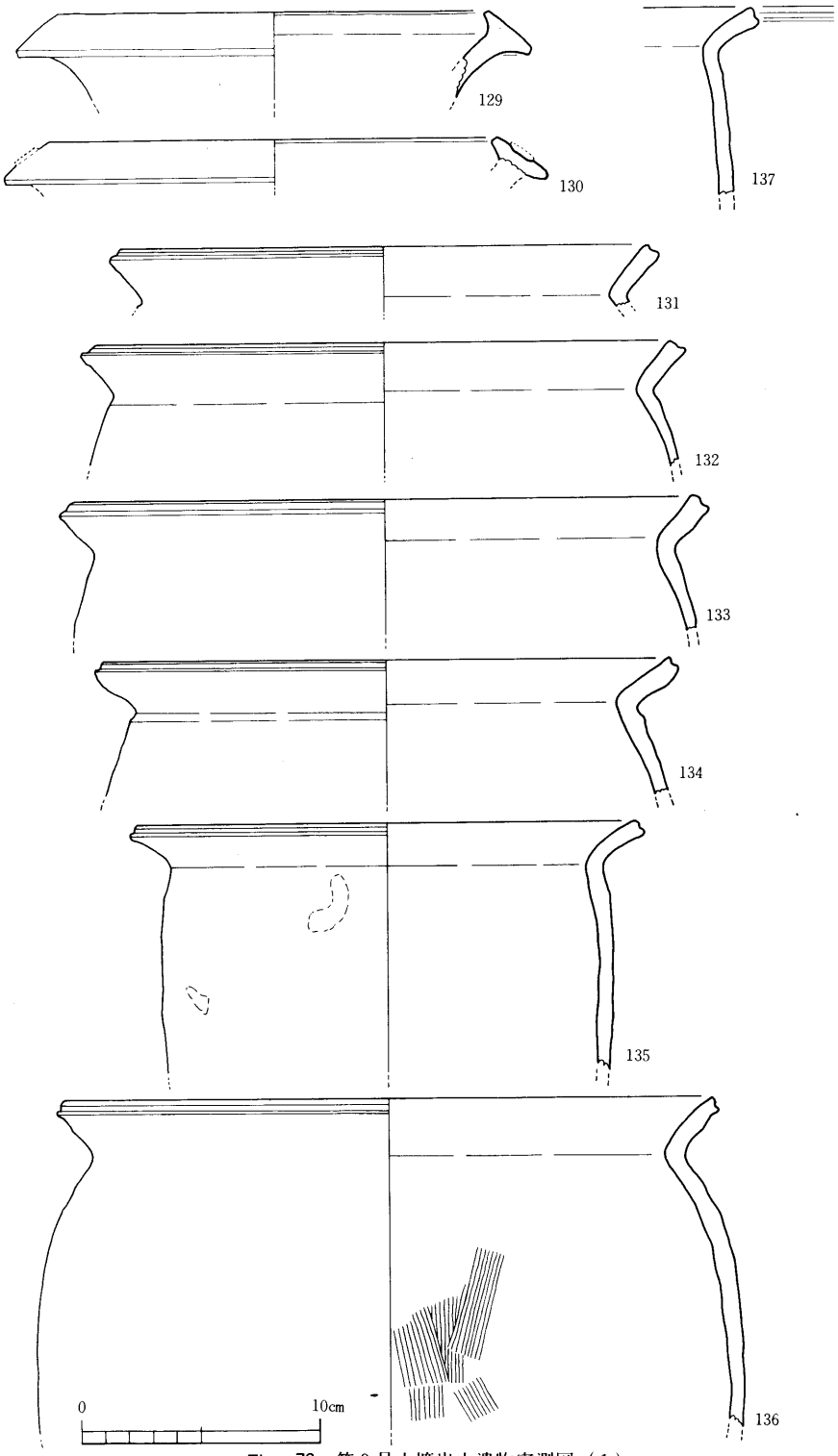


Fig. 73　第９号土壙出土遺物実測図（１）

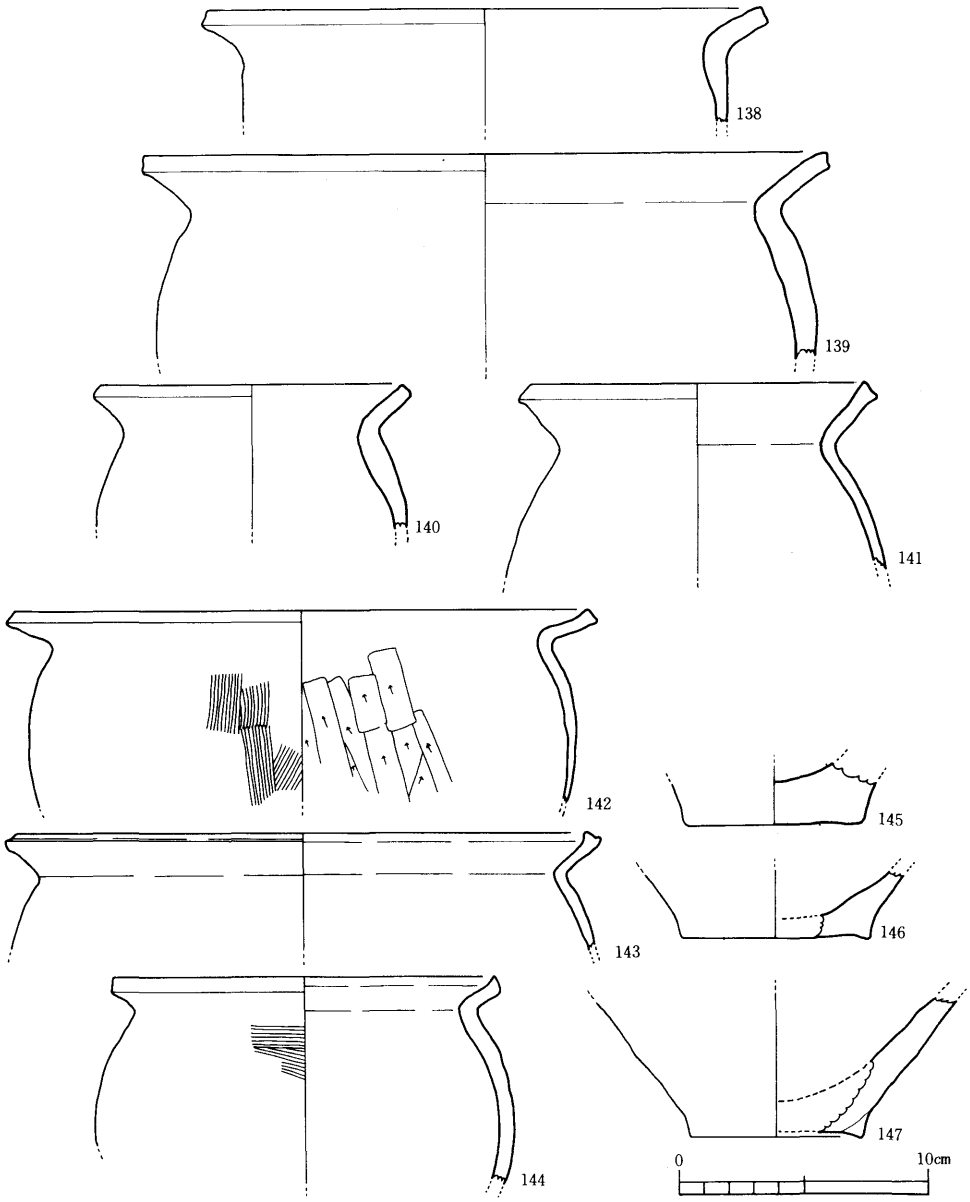


Fig. 74 第９号土壙出土遺物実測図（２）

甕形土器（Fig. 121～123）

121・123は如意形に短く外反する口縁部をもち、端部外面にヘラによる刻目を施す。123は頸部下位に２条のヘラ描き沈線が巡り、胴部の張りは小さい。口縁端部内外面および胴部内面に丹の痕跡が残る。121は内外面横ナデ、123は口縁部内外面横ナデ、胴部内面

ナデ、外面磨滅・剝落のため調整不明。122は直線に近く「く」の字状に屈曲する口縁部で内外面横ナデ仕上げ。

第11号土壙（Fig. 72）

調査区北西部、第3号土壙のすぐ東で検出された平面形態不整楕円形の土壙で、第2号溝によって南端部を切られている。底面での3個の柱穴との切り合いがみられるが、前後関係は不明である。長軸方向は北東－南西で、長軸189cm以上、短軸75cmの規模をもつが、遺存状態が悪く、検出面からの深さは11～12cmを残すにすぎない。土壙内から弥生土器若干が底面よりやや上位で出土したが、第2号溝との切り合い関係から下限は弥生時代中期と考えられる。

第12号土壙（Fig. 72）

調査区北西端部付近、第11号土壙のすぐ西側で検出された土壙で、西への延長部分は調査区外にあたるため完掘していない。また、第2号溝によって東端部を切られているため、平面形態は判然としないが長楕円形に近くなるものと考えられる。長軸方向は北西－南東で、長軸148cm以上、短軸145cmの規模をもつ。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは37cmである。出土遺物には弥生土器甕がある。弥生時代後期前半。

出土遺物（Fig. 71－124～128, PL. 33－124～128）

甕形土器

口縁部が「く」の字に外反し、内面に稜線を画して屈曲するもの（124・125・127）と、緩やかに外反するもの（126・128）とがある。前者は張りのある胴部にやや強く屈曲する短い口縁部をもち横ナデにより口縁端部外面が窪むもの（124・125）と、直線的に開くやや長めの口縁部をもつもの（127）とがある。128は小形の甕。124～128とも口縁部内外面横ナデ、124・128は胴部内外面ナデ、126は胴部内面ナデ仕上げ。125・127は胴部内外面とも磨滅・剝落のため調整不明。

第13号土壙（Fig. 75）

調査区北西部、第11号土壙の南に近接して営まれた土壙で、そのほぼ中央部を第2号溝、第27号土壙によって切られている。平面形態は不整形な長楕円形に近く、長軸方向は北東－南西である。長軸192cm以上、短軸84cmの規模をもつが、遺存状態が悪く、検出面からの深さは最深部で10cmを残すにすぎない。土壙内からは、底面からわずかに上位で弥生土器壺、甕が出土した。弥生時代中期後半。

出土遺物（Fig. 76, PL. 34－148～155）

壺形土器（148～150）

148は口縁部が屈曲して下垂するもので、器壁が薄く、比較的きゃしゃなつくりである。下垂した口縁部外面には施文はみられない。149は大きく直線的に開く口縁部をもち、端部がカマボコ状に肥厚する、類をみないものである。148・149とも口縁部内外面に丁寧な横ナデを行なうが、口縁部下半は磨滅・剝落のため調整不明。150は断面「M」字状の突帯を貼付する胴部の破片。内外面とも磨滅・剝落のため調整不明。

甕形土器（151～155）

いずれも「く」の字に屈曲する口縁部をもつもので、胴部の張りが小さく胴部最大径は口径を上回らない。151・153は直線的に開く比較的長めの口縁部をもち、口縁部内面の横ナデが強い。152は151・153に比べ口縁部の屈曲度が強い。154は直線的に開く口縁部をもち、肥厚する口縁端部を跳ね上げるものである。器壁は薄い。口縁端部外面にはヘラによる凹線風の沈線が巡る。151～154とも口縁部内外面横ナデ仕上げで、151・152は胴部内外面ナデ仕上げ。153・155は内面のナデしか観察できない。154は胴部内外面とも磨滅・剝落のため調整不明。

第14号土壙（Fig. 75）

調査区北西端部付近、第２号住居跡の北に近接して営まれた土壙である。東壁付近で柱穴との切りあいが見られるが先後関係は不明である。平面形態は楕円形に近い形状を呈し、長軸方向は北－南。長軸148㎝、短軸94㎝の規模をもつが、遺存状態は極めて悪く、検出面からの深さはわずか９㎝を測るにすぎない。底面からやや上位で弥生土器壺の底部等が出土したが、量は極めて少ない。弥生時代中期。

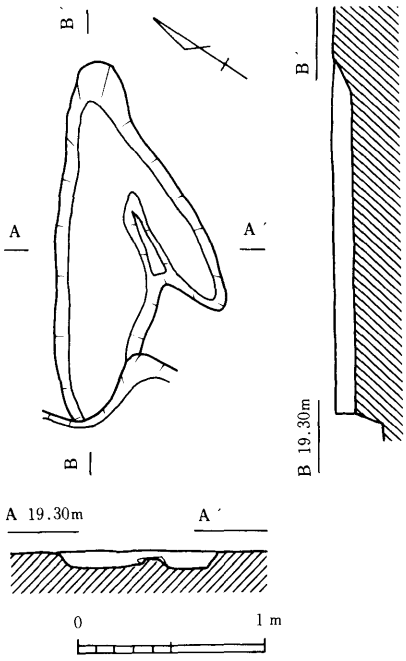
出土遺物（Fig. 77－156, PL. 34－156）

壺形土器

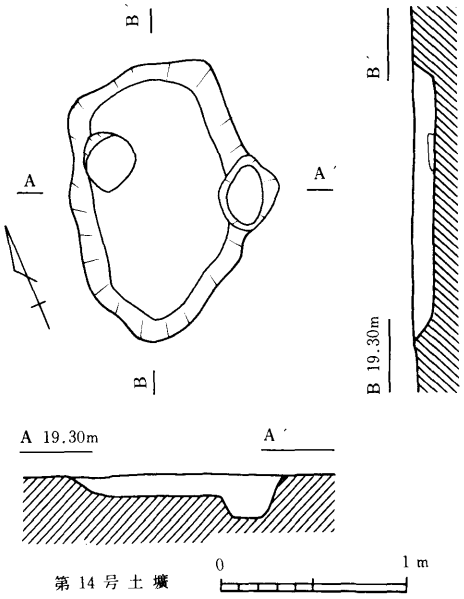
わずかに上げ底気味の底部から胴部は直線的に立ち上がる。内外面とも磨滅・剝落のため調整不明。

第15号土壙（Fig. 75）

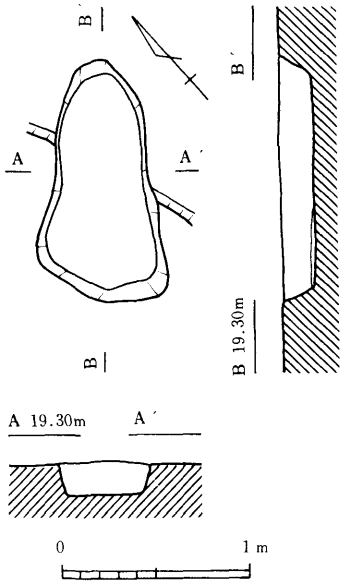
調査区北西部付近、第２・３号住居跡のすぐ東で検出された平面形態不整楕円形の土壙で、中央部を第２号溝によって切られている。遺跡保存地区の土壙のうちでは小形の部類に属する。長軸方向は北東－南西で、長軸130㎝、短軸46㎝、検出面からの深さ18㎝の規模をもつ。出土遺物は極めて少なく、甕形土器が底面からやや上位で出土した。弥生時代終末～古墳時代初頭。



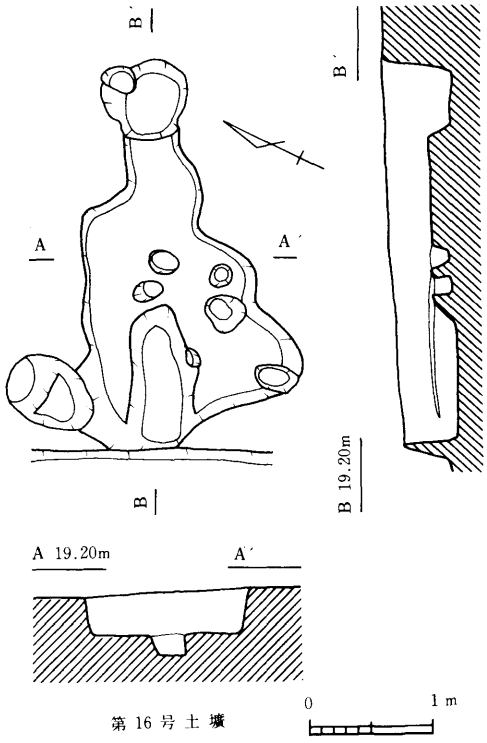
第 13 号 土 壙



第 14 号 土 壙



第 15 号 土 壙



第 16 号 土 壙

Fig. 75　第13～16号土壙実測図

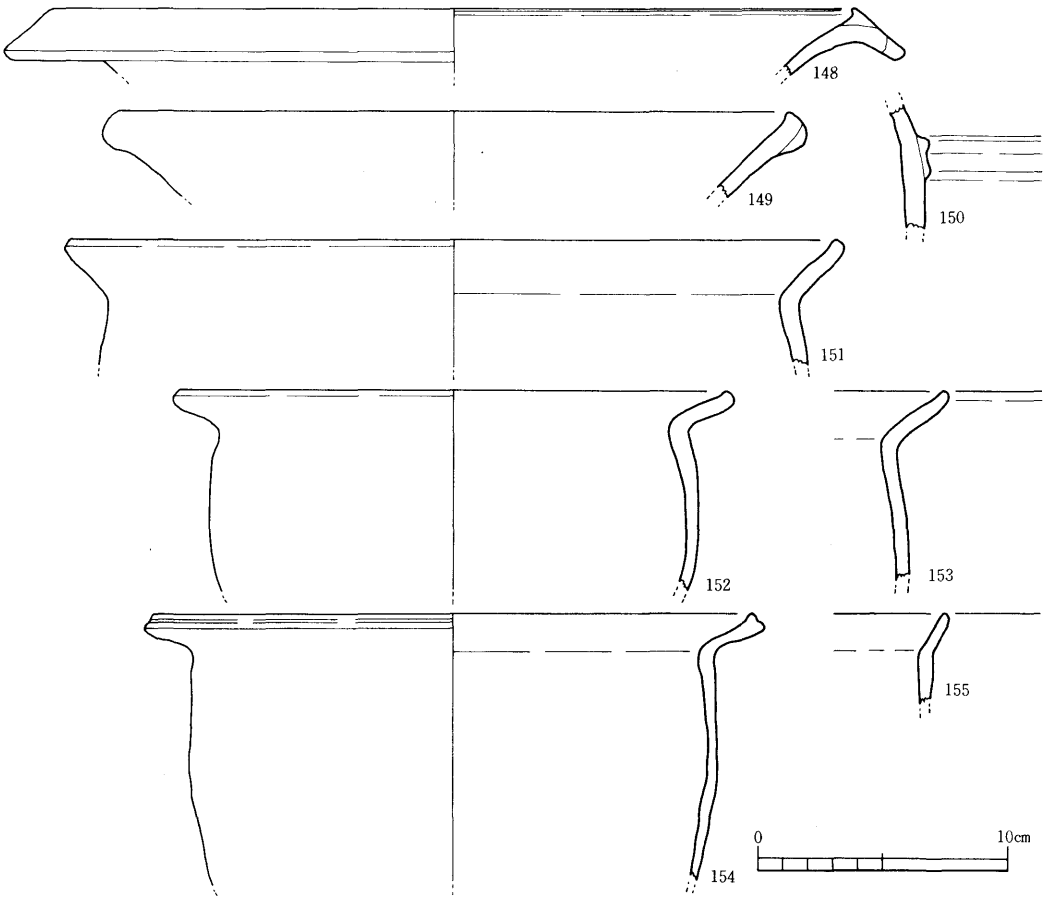


Fig. 76　第13号土壙出土遺物実測図

出土遺物（Fig. 77－157, PL. 34－157）

甕形土器

張りの強い胴部に外彎しながら開く口縁部をもち、口縁端部は尖り気味に終わる。胴部外面には平行タタキを施す。口縁部内外面横ナデ、内面ナデ仕上げ。

第16号土壙（Fig. 75）

調査区中央部の西寄り、第２・３号住居跡、第15号土壙のすぐ東に近接して営まれた土壙である。第５号住居跡によって東端部をわずかに切られている。北半部のテラス状の平坦面には、切り合い関係不明の柱穴多数が検出された。長軸方向は北東－南西で、長軸206cm以上、短軸88cm、最も深い西端部で検出面からの深さ32cmの規模をもつ。土壙内からは弥生土器甕、高坏が底面よりやや上位で出土した。弥生時代中期。

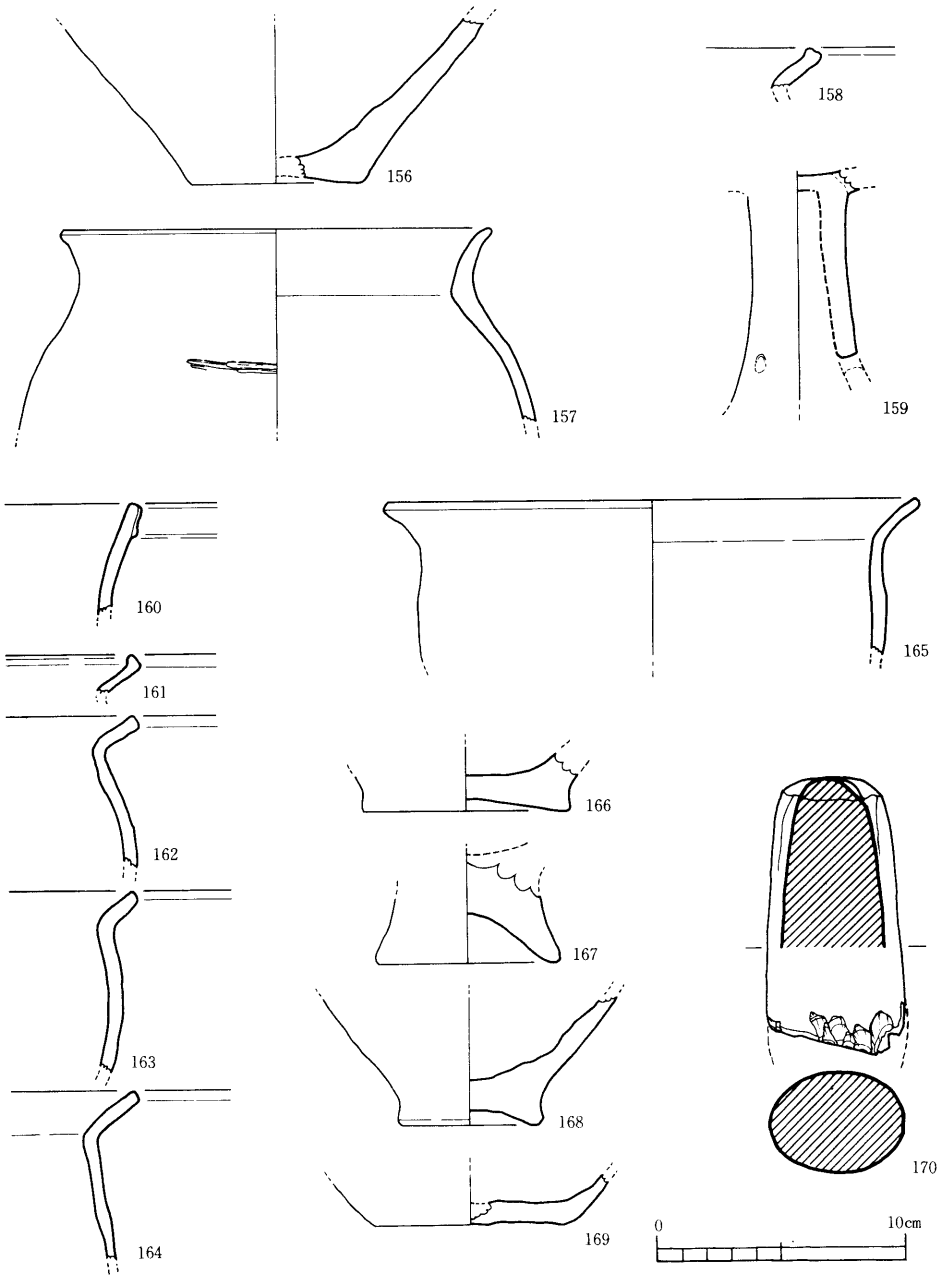


Fig. 77　第14～17号土壙出土遺物実測図

出土遺物（Fig. 77－158・159, PL. 34－158・159）

甕形土器（158）

跳ね上げ口縁になるもので、内外面とも横ナデ仕上げ。

高坏形土器（159）

坏部に脚柱を挿入する長脚の高坏脚部で、三方に円形透かしをもつ。シボリ痕は不明瞭で、坏部と脚部の接合部付近の外面は横ナデで、他はナデ仕上げ。

第17号土壙（Fig. 78, PL. 27－(4)）

調査区中央部西寄りのトレンチ西壁付近で、第16号土壙の南に近接して検出された土壙で、第18号土壙を切っている。平面形態長楕円形、長軸方向北西－南東で、長軸224cm、短軸50cmの規模をもつ。底面は平坦に近く、検出面からの深さは34cm。出土遺物には弥生土器壺、甕、鉢、および石斧があり、底面からやや上位で出土した。弥生時代中期前半。

出土遺物（Fig. 77－160～170, PL. 35－160～169・PL. 39－170）

壺形土器（160・166）

160は長頸壺の口縁部で、端部外面に断面長方形の突帯を貼付し、強い横ナデにより突帯中央部が窪む。壺と思われる166はわずかに上げ底で、側面横ナデ、他はナデ仕上げ。

甕形土器（161～165・167・168）

跳ね上げ口縁をもつもの（161）と、「く」の字状に外反する口縁部をもつもの（162～165）とがある。後者には内面に稜をもたず短く外反するもの（162・163）、張りのほとんどない胴部をもち直線的に外反するもの（164・165）とがある。いずれも口縁部内外面とも横ナデで、162・163・165は胴部内外面ナデ、164は胴部外面ナデ仕上げを行なう。167・168は底部。167は上げ底で器壁が厚く、裾部が外方へ大きく開く。168は窪み底で、外底面および外面に黒斑がみられる。いずれも側面、接地面横ナデ、外面、外底面および内面ナデ仕上げで、168は調整が粗い。

鉢形土器（169）

ほぼ平底の底部で、内面、外底面ナデ仕上げ、側面は磨滅・剝落のため調整不明。

石斧（170）

刃部および頭部の一部を欠損した太型蛤刃石斧で、断面形は楕円形。珪化デイサイト製で現存長11.2cm、最大幅5.6cm、最大厚4.2cm、頭部幅4.1cm、頭部厚2.8cm。重量412ｇ。

第18号土壙（Fig. 78, PL. 27－(4)）

調査区中央部西寄りのトレンチ西壁付近、第16号土壙の南に近接して検出された土壙

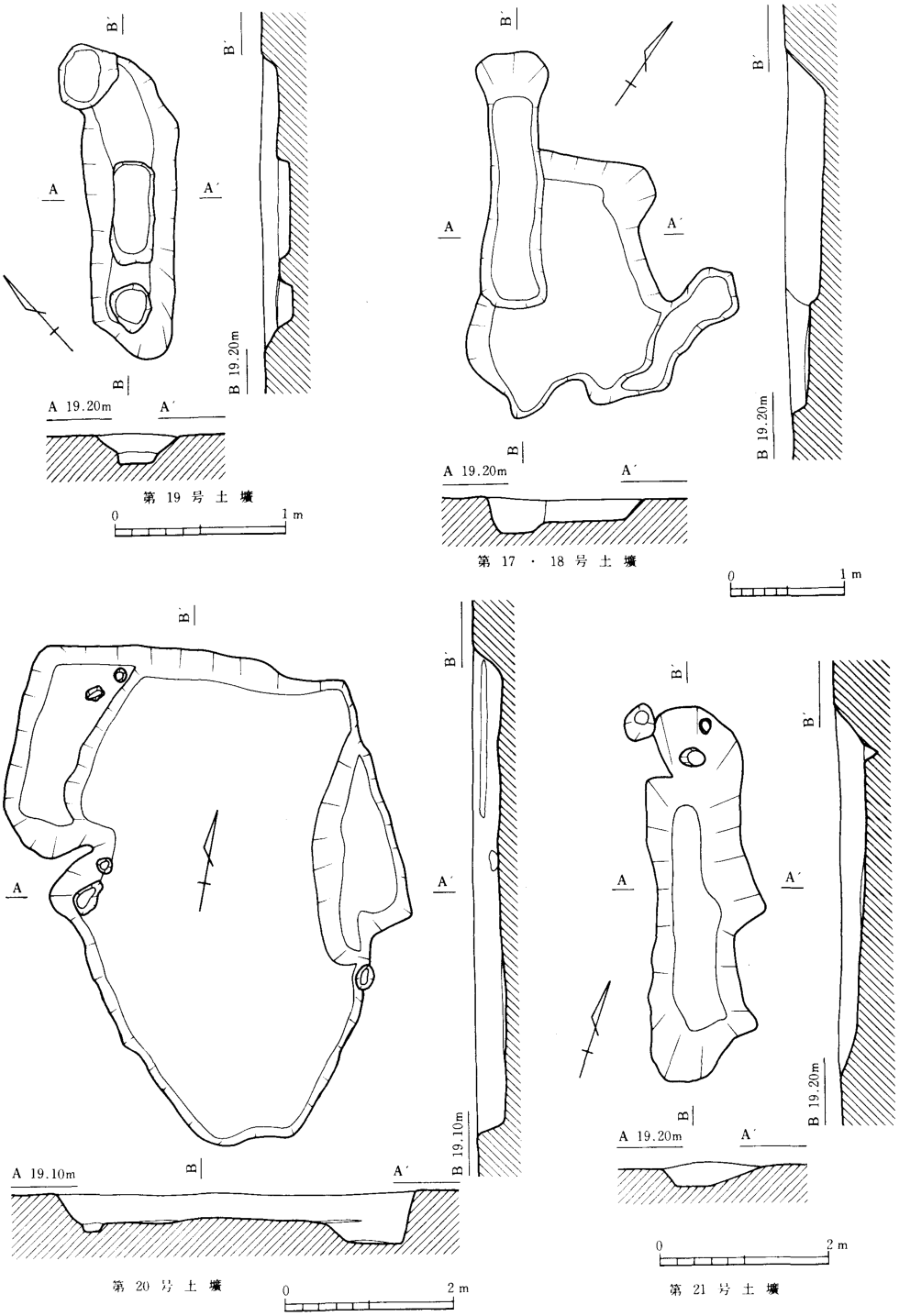


Fig. 78 第17～21号土壙実測図

で、第17号土壙によって切られている。平面形態は不整形な方形で、東端部にテラス状の平坦面をもつ。長軸234cm、短軸156cmの規模をもち、最も深い南端部で検出面からの深さ20cmを測る。遺物は東端部の平坦面を中心に、底面よりやや上位で弥生土器壺、甕、鉢、高坏が出土した。弥生時代中期後半。

出土遺物（Fig. 79－171～175, PL. 35－171～175）

壺形土器（171）

ソロバン状の胴部をもち、胴部最大径付近に断面三角形の突帯を1条貼付する。長頸壺の可能性がある。磨滅・剝落のため調整不明。

甕形土器（172・173）

「く」の字に外反する口縁部をもち、端部が跳ね上げとなるものである。172は口縁部が内彎しながら外反し、胴部の張りは弱い。172・173とも口縁部内外面横ナデ、胴部外面縦刷毛目、内面ナデ仕上げを行なう。

鉢形土器（174）

平底の鉢の底部と考えられるもので、器壁は薄い。内面ナデ仕上げ、外面調整不明。

高坏形土器（175）

わずかに斜めに下垂する鋤先状口縁をもつ小形の高坏で、坏部は内彎して開き、口縁部内側の張り出しは強い。口縁部内外面横ナデ、坏部内面ナデ、外面磨滅・剝落のため調整不明。

第19号土壙（Fig. 78）

調査区西壁付近、第17・18号土壙のすぐ東で検出した平面形態長楕円形の土壙である。北端部、南端部で柱穴との切り合いがあるが先後関係は不明である。長軸方向は北東－南西で、長軸156cm、短軸76cmの規模をもつ。底面中央部には長方形に近い掘り込みをもち、検出面からの深さは25cmである。出土遺物は皆無であった。

第20号土壙（Fig. 78）

調査区中央部、第19号土壙の北に近接して営まれた平面形態不整五角形の土壙で、第4号住居跡の壁溝を切っている。平面形態から2基の土壙の重複の可能性があるが、切り合い関係が不明なため一括して取り扱った。長軸432cm、短軸320cmで、保存地区で検出された土壙中でも最大の規模をもつ。西端部には幅約45cmのテラス状の平坦面を有する。底面は中央部付近がやや高く、検出面からの深さは最浅部で18cm、最深部で45cmを測る。遺物は極めて少なく、底面から約20cm上位で弥生土器若干が出土した。

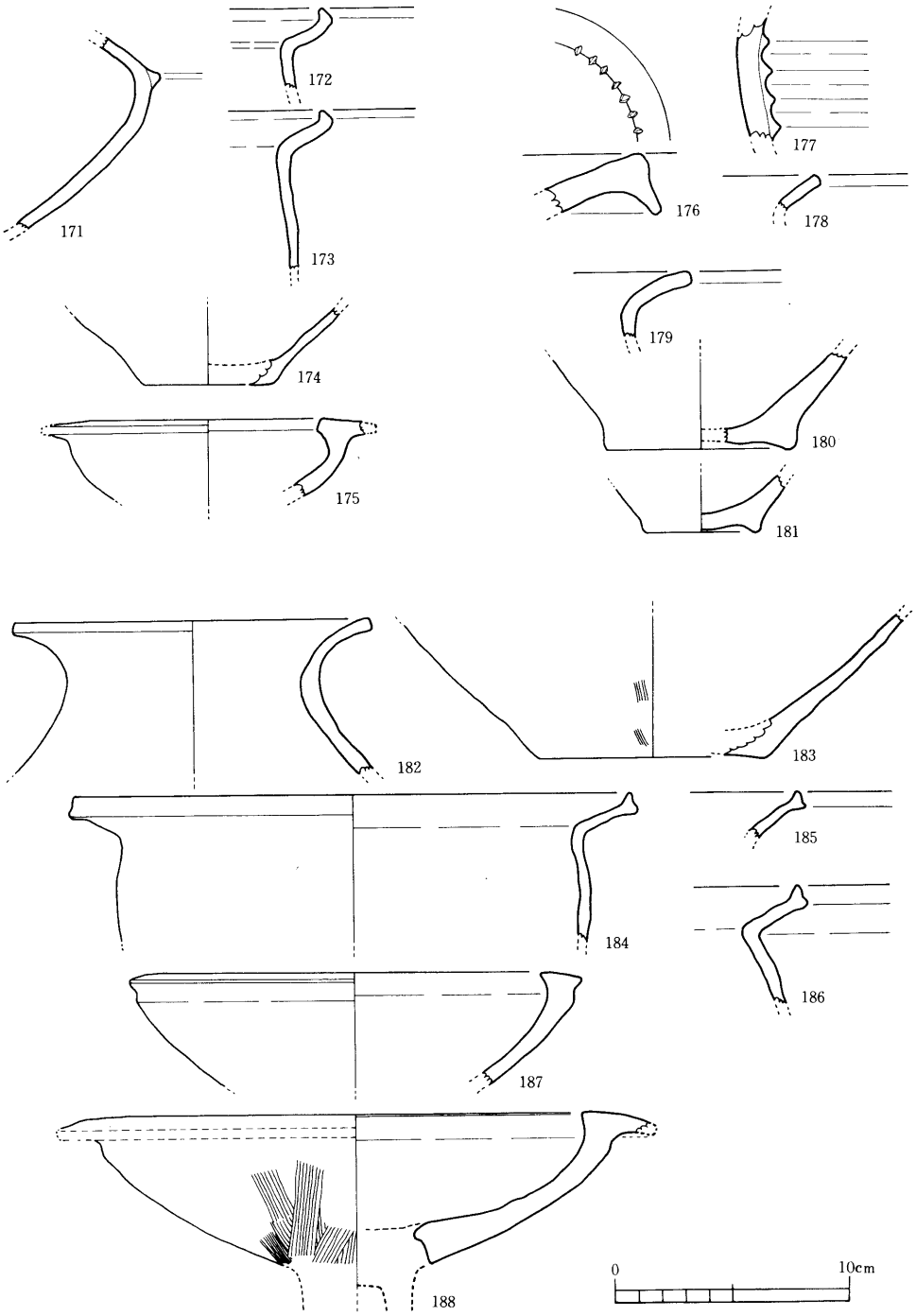


Fig. 79　第18・21～23号土壙出土遺物実測図

第21号土壙（Fig. 78）

調査区中央部、第20号土壙のすぐ東で検出された平面形態長楕円形の土壙である。北端部での柱穴との切り合い関係は判然としない。長軸方向は北－南で、長軸328cm、短軸88cmの規模をもつ。底面は南から北へ下降しており、検出面からの深さは最浅部で16cm、最深部で25cmを測る。壁面の立ち上がりは緩やかである。遺物は土壙検出面付近で弥生土器壺、甕が若干出土したにとどまった。弥生時代中期後半。

出土遺物（Fig. 79－176～178, PL. 35－176～178）

壺形土器（176・177）

176は下垂する口縁部をもつもので、端部は先細りとなる。口縁部外面の平坦面に施文は見られないが、内面との稜線上にヘラによる刻目を施す。磨滅・剝落のため調整不明。177は頸部の破片で、外面に断面三角形の少なくとも4条の貼付突帯が巡る。外面横ナデ仕上げ、内面磨滅・剝落のため調整不明。

甕形土器（178）

直線的に短く開く口縁部の破片で、内外面とも横ナデ調整を行なう。

第22号土壙（Fig. 80）

調査区中央部、第20および21号土壙の南で検出された「L」字形の土壙で、平面形態および検出面から底面までの深さなどから、平面形態長楕円形の2基の土壙の重複の可能性があるが、切り合い関係が不明なため一括して取り扱った。南北方向長軸202cm、短軸56cm、北東－南西方向長軸258cm、短軸58cmの規模をもち、検出面からの深さは西端部で16cm、南端部で21cm。北端部の底面は、西・南半部に比べ一段低くなっており、検出面からの深さ30cmである。出土遺物には弥生土器甕がある。弥生時代後期。

出土遺物（Fig. 79－179～181, PL. 35－179～181）

壺形土器

179は外彎しながら開く口縁部で、内外面とも磨滅・剝落のため調整不明。180・181は凹み底の底部で、181は鉢になるかもしれない。いずれも接地点付近内外面横ナデで、180は外面、外底面ナデ、内面磨滅・剝落のため調整不明。181は内面、外底面ナデ、外面磨滅・剝落のため調整不明。

第23号土壙（Fig. 80）

調査区南西隅、第6号住居跡のすぐ東で検出された土壙である。第2号溝が比較的平坦な溝底をもつのに対し、この部分で一段底面が低くなっていることから、土壙として取り

扱った。第2号溝と切り合っているが、その先後関係は不明である。平面形態は長楕円形に近くなるものと思われ、長軸方向は北西－南東である。長軸220cm以上、短軸82cmの規模をもち、底面は平坦に近く、検出面からの深さは18cmである。出土遺物には弥生土器壺、甕、高坏がある。弥生時代中期後半。

出土遺物（Fig. 79－182～188, PL. 35－182～PL. 36－188）

壺形土器（182・183）

182は外彎しながら大きく開く口縁部で、胴部内面ナデ仕上げ、他は風化のため調整不明。183はほぼ平底の底部で器壁が薄い。外面に縦刷毛目の痕跡が残る。接地点付近外面横ナデ、外底面ナデ、内面風化のため調整不明。

甕形土器（184～186）

口縁部内面に粘土を貼付し、顕著な跳ね上げ口縁とするものである。直線的に開く口縁部の屈曲度は強い。184～186とも口縁部内外面横ナデで端部は強い横ナデで窪む。胴部内面ナデ仕上げ、外面風化のため調整不明。

高坏形土器（187・188）

187は口縁端部が肥厚し平坦面を有するもので、口縁端部の外側への張り出しはみられない。口縁端部内外面横ナデ、他は風化のため調整不明。188は鋤先状口縁を有する高坏で、坏部は浅く口縁端部の内面への張り出しは弱い。端部平坦面は斜めに下垂する。口縁端部内外面横ナデ、坏部外面縦刷毛目、内面ナデ仕上げ。

第24号土壙（Fig. 80）

調査区中央部の南寄り、第7号住居跡の北で検出された土壙である。平面形態は長楕円形に近く、壁面の立ち上がりは比較的急である。南北両端部で柱穴状の遺構と切り合っているが、先後関係は明らかでない。長軸方向は北－南で、長軸348cm、短軸68cmの規模をもつ。底面は平坦に近く、検出面からの深さは25cmである。出土遺物には弥生土器壺がある。弥生時代中期。

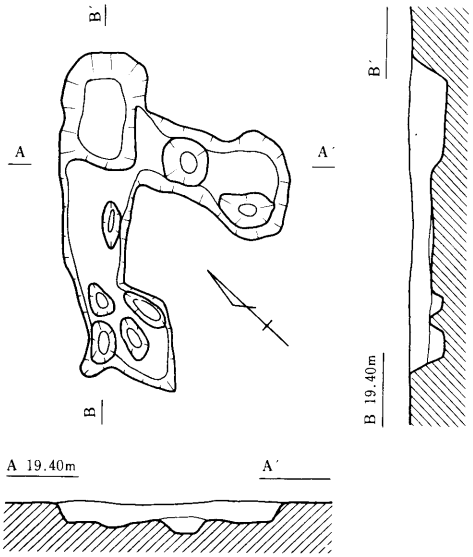
出土遺物（Fig. 81－189, PL. 36－189）

壺形土器

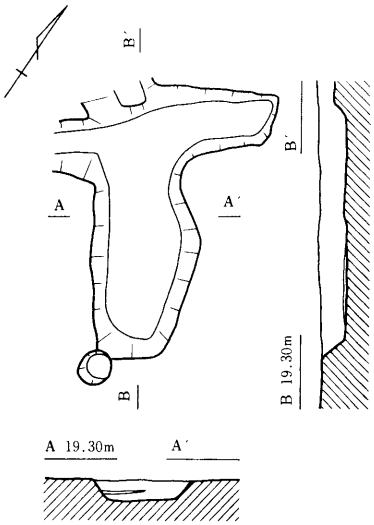
大きく朝顔形に開く口縁部をもつと思われる壺の頸部。外面には少なくとも3条の断面三角形の扁平な貼付突帯が巡る。外面突帯部分横ナデ、他はナデ。

第25号土壙（Fig. 80）

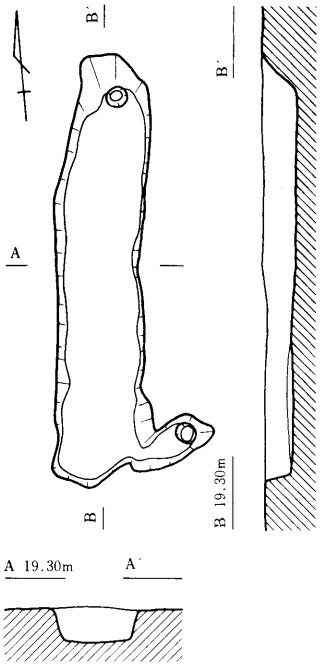
調査区の南東部、第24号土壙の北東で検出された方形状の不整形な土壙である。西・北



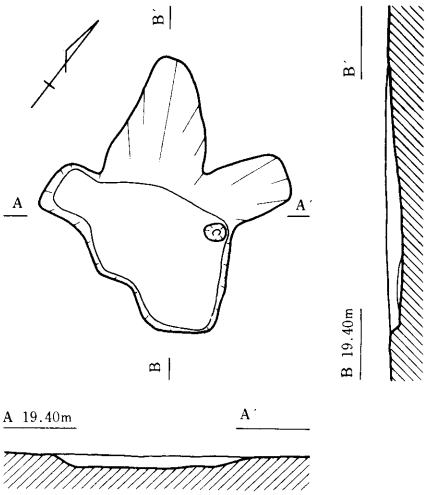
第 22 号 土 壙



第 23 号 土 壙



第 24 号 土 壙



第 25 号 土 壙

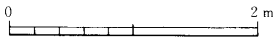


Fig. 80 第22～25号土壙実測図

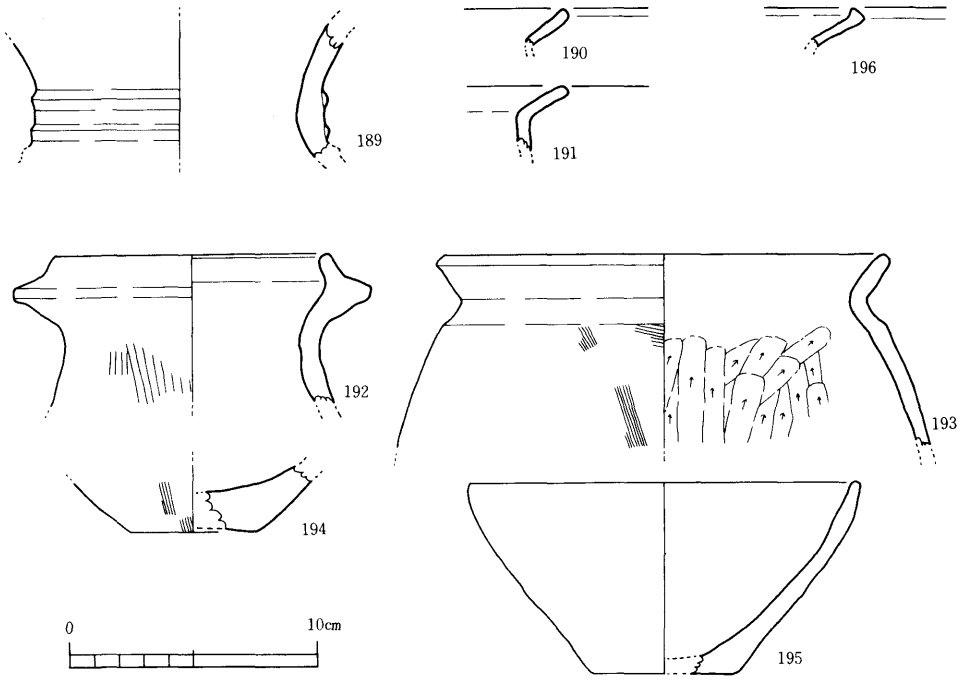


Fig. 81　第24～26・41号土壙出土遺物実測図

両壁面は検出面から緩やかに下降しており、南半部で最終的な底面に達する。長軸220cm、短軸210cm、検出面からの深さは最深部で15cmの規模である。遺物は弥生土器甕等若干が出土したのみである。弥生時代中期。

出土遺物（Fig. 81－190・191, PL. 36－190・191）

甕形土器

190・191とも直線的に「く」の字に外反する短い口縁部をもつもので、191は胴部の張りは弱い。いずれも内外面横ナデ仕上げ。

第26号土壙（Fig. 82）

調査区北西隅で検出された土壙である。第２号住居跡との切り合い関係は不明。西への延長部分を後世の削平により失っており、平面形態は明らかでない。長軸方向は北西－南東で、長軸114cm以上、短軸34cmの規模をもつ。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは11cmである。出土遺物は少なく、底面からやや上位で弥生土器壺、甕、鉢が出土した。弥生時代後期前半。

出土遺物（Fig. 81－192～195, PL. 36－192～195）

壺形土器（192）

小形のいわゆる複合口縁壺である。内傾する短い頸部をもち、口縁部の開きは小さい。内上方へ斜めに突出する拡張部は未発達で、口縁端部よりやや下位に貼付される。口縁部内外面横ナデ、頸部外面粗い縦刷毛目、内面ナデ仕上げ。

甕形土器（193・194）

193は張りの強い胴部をもち、口縁部は短く「く」の字に外反する。頸部外面には強い横ナデが施される。口縁部内外面横ナデ、胴部外面刷毛目、内面強いナデ仕上げ。194は底部で、壺かもしれない。外面縦刷毛目、外底面および内面はナデ仕上げ。

鉢形土器（195）

平底の底部から胴部が直線的に立ち上がり、口縁端部付近で内彎する。口縁端部は丸く終る。口縁部内外面横ナデ、胴部内外面、および外底部はナデ仕上げ。

第27号土壙（Fig. 82）

調査区北西部、第２号住居跡の北東に近接して営まれた土壙で、第13号土壙を切り、第２号溝によって切られている。平面形態は中央部のくびれた双円形を呈する。長軸方向は北西－南東で、長軸123cm、短軸40cmの規模をもつ。底面は平坦で、検出面からの深さは38cmである。遺物は弥生土器数点が底面からやや上位で出土したが、器形・時期を窺い知るものはない。

第28号土壙

調査区中央部東寄りで検出された小規模な土壙で、第８号土壙の北に近接して位置する。他の遺構との切り合い関係はないが、後世の削平により遺存状態は悪い。平面形態は楕円形に近く、長軸80cm、短軸55cmの規模をもつ。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは13cmである。遺物は底面に貼り付いた状態で弥生土器数点が出土したが、器形・時期を窺い知るものはない。

第29号土壙（Fig. 82, PL. 28－(1)）

調査区南東部、第７号住居跡の北東で検出された土壙である。平面形態、検出面より底面までの深さなどから２基の土壙の重複が考えられるが、切り合い関係が不明なため一括して取り扱った。底面はいずれも平坦に近く、南北方向に長軸をもつものは長軸352cm、短軸85cm、検出面からの深さ28cmで、北東－南西に長軸をもつものは長軸328cm、短軸36cm、検出面からの深さ48cmの規模をもつ。出土遺物には土師器があるが、その量は極めて少ない。古墳時代前期に属するものであろう。

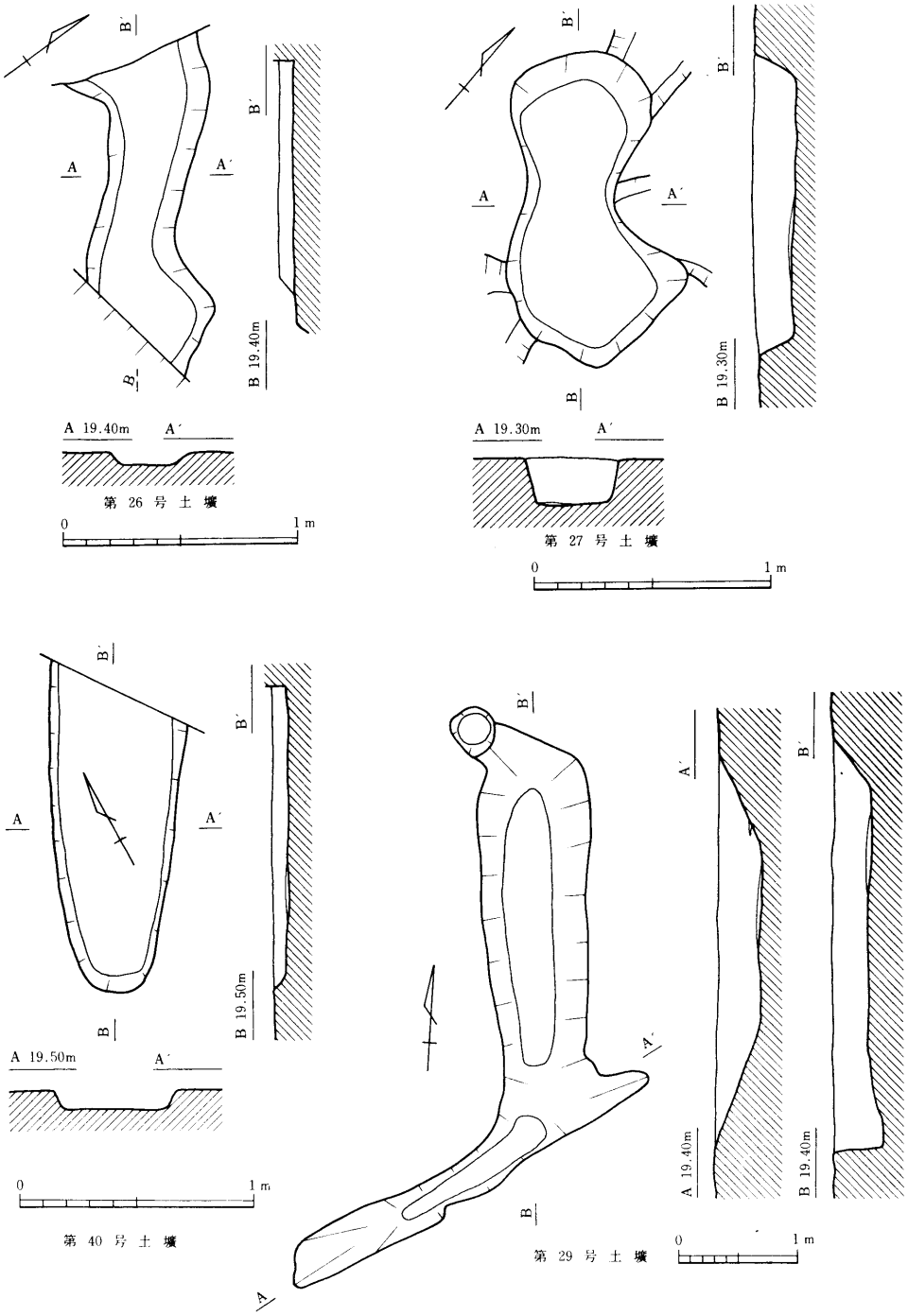


Fig. 82　第26・27・29・40号土壙実測図

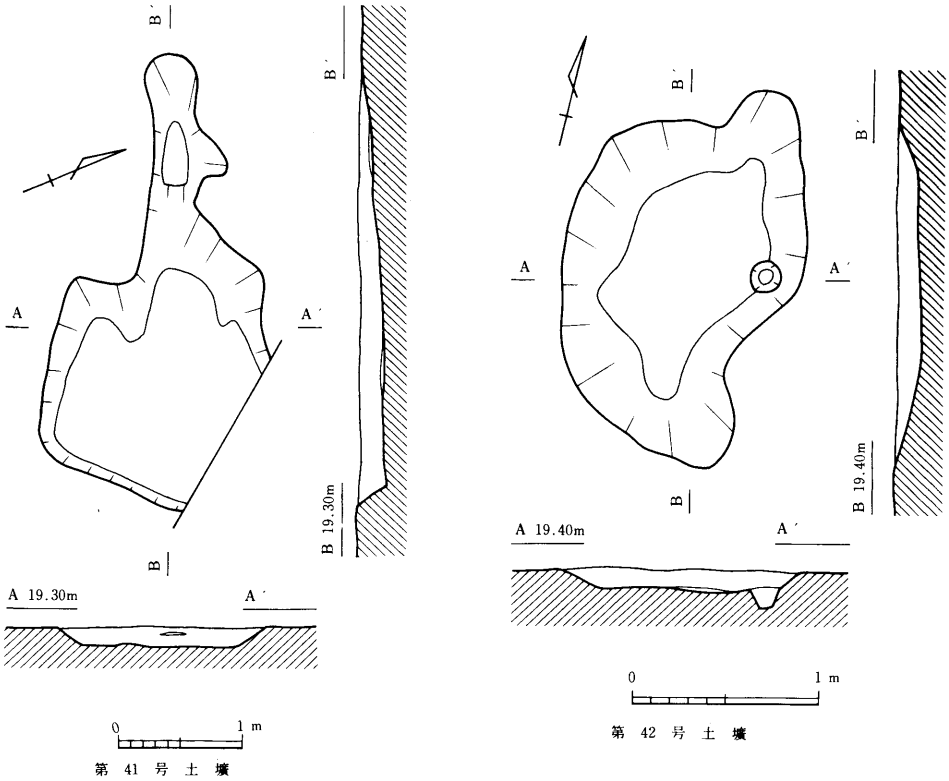


Fig. 83　第41・42・50号土壙実測図

第40号土壙（Fig. 82）

調査区北西部、第１号住居跡の東で検出された土壙で、北東への延長部分は一部調査区外にあたるため完掘していないが、溝の可能性がある。平面形態は長楕円形に近い形状のものと考えられ、長軸114cm以上、短軸52cm、底面は平坦で検出面からの深さ14cmを測る。出土遺物には弥生土器若干がある。

第41号土壙（Fig. 83）

調査区中央部東端、第17号土壙の北に近接して営まれた不整形な土壙である。長軸362cm、短軸170cmの規模をもつ。遺存状態は悪く、検出面からの深さは西半部で検出されたテラス状の平坦面までが10cm、西半部に比べ一段低くなっている東半部で16cmを残すにすぎない。遺物は弥生土器甕など若干が出土した。弥生時代中期後半。

出土遺物（Fig. 81－196, PL. 36－196）

甕形土器

直線的に開く口縁部をもち、端部を跳ね上げるものである。内外面とも横ナデ仕上げ。

第42号土壙（Fig. 83, PL. 28－(2)）

調査区中央部、第９号土壙の南で検出された楕円形に近い不整形な土壙である。長軸方向は北一南で長軸182cm、短軸128cmの規模をもつ。遺存状態は悪く、検出面からの深さ15cmを残すのみである。出土遺物はない。

第50号土壙（Fig. 83）

調査区北隅、第１号住居跡の北に近接して営まれた小規模な土壙である。北端部で柱穴と切り合っているが、その前後関係は不明である。平面形態は三日月状を呈し、東西軸121cm、南北軸70cmの規模をもつ。底面は平坦で、検出面からの深さ11cmを残すのみで遺存状態は悪い。土壙内からの出土遺物はない。

第１号溝

調査区北部を弧状に北西－南に貫く溝で第１号住居跡、第３号溝を切っている。南への延長部分は後世の削平により失われている。調査区北壁付近で上面幅86cm、溝底幅44cm、深さ約35cmであるが、第３号溝と切り合う付近で溝幅を減じ上面幅約50cm、溝底幅約32cmとなる。出土遺物には土師器甕がある。４Ｃ後半。

出土遺物（Fig. 84－197・198, PL. 36－197・198）

甕形土器

197は短い頸部をもついわゆる複合口縁の甕で、上段部は短く内傾する。外面および口縁部内面横ナデ、内面頸部以下ナデ仕上げ。198は外面に右上がりのタタキをもつ甕で内面は刷毛目仕上げ。

197は下関市伊倉遺跡[3]のＢ区の土壙出土のものに酷似し、同遺跡では右上がりのタタキをもつ甕の底部と共伴している。山本一朗氏の述べるように[4]同遺跡のＢ地区土壙の一括資料、特に複合口縁壺は、纏向４式相当期のものであり、布留式の古段階に位置づけられるものである。

第２号溝

調査区東半部を北－南に貫く溝で、第６号住居跡の東付近までは比較的蛇行が少ないが、第23号土壙と切り合う付近で直角に近く東へ流路を変えており、土壙、住居跡との切りあいが多い。溝上面幅および溝底幅は北部でそれぞれ約55cm、約30cmであるが、６号住居跡東付近では上面幅約25cm、溝底幅約15cmと南に向かうにつれて溝幅を減じている。溝深は

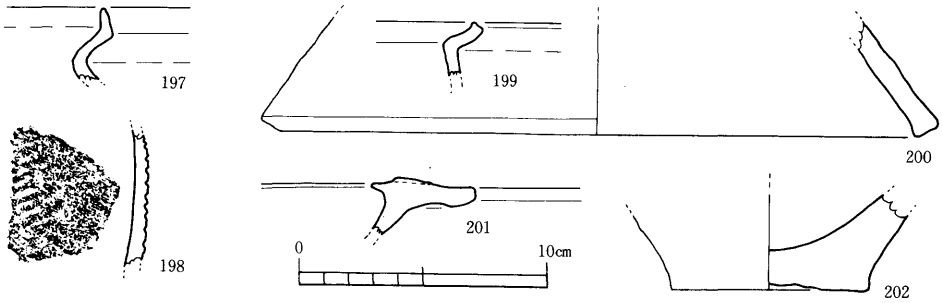


Fig. 84　第１～３号溝出土遺物実測図

20～26cmで溝底は北部が低い。出土遺物には弥生土器甕、高坏がある。弥生時代中期。

出土遺物（Fig. 84－199・200, PL. 36－199・200）

甕形土器（199）

「く」の字状に短く外反する甕の口縁部で、口縁部内面を跳ね上げている。内面頸部以下は磨滅・剝落のため調整不明であるが、他は横ナデ仕上げ。

高坏形土器（200）

脚部の破片。脚端部付近内外面は横ナデ仕上げであるが、破片上半内外面は磨滅・剝落のため調整不明。

第３号溝

調査区北東部を北西－南東に貫く溝で、第１号溝によって切られている。後世の削平により長さ約９ｍを検出したにとどまった。溝上面幅および溝底幅は、第６号土壙付近でそれぞれ約90cm、約50cm、第７号土壙付近でそれぞれ約80cm、約40cmで、上面幅はほぼ一定している。溝深は約20～30cm。出土遺物には弥生土器壺がある。弥生時代中期中葉。

出土遺物（Fig. 84－201・202, PL. 36－201・202）

壺形土器

201は鋤先状口縁をもつもので、扁平な円形浮文を貼付した口縁部外面はほぼ水平に近い。内外面とも横ナデ仕上げ。202は底部で内面、外底面ナデ、底部側面横ナデ仕上げ。他は磨滅・剝落のため調整不明。

その他の遺構

調査区ほぼ全面で多数の柱穴が検出された。竪穴住居跡の主柱穴も含まれていると思われるが、遺構上面の削平が著しく、柱穴配置による遺構の復原は困難であった。以下、出土遺物について述べる。

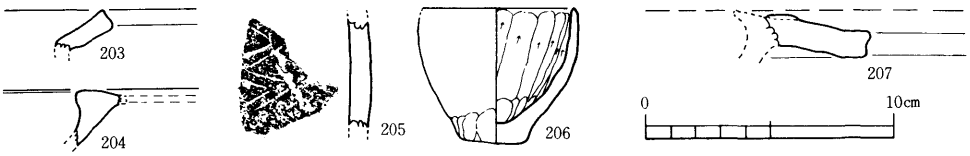


Fig. 85　柱穴出土遺物実測図

出土遺物（Fig. 85, PL. 36－203～PL. 37－207）

203は短く外反する甕形土器の口縁部で、内外面とも横ナデ仕上げ。柱穴101出土。204は高 ·形土器の口縁部と思われ、口縁端部が肥厚し鋤先状の口縁となるが、端部の外側への張り出しが弱く未発達である。内外面とも横ナデ仕上げ。柱穴134出土。205は外面にヘラによる羽状文を施文する壺形土器の胴部。内外面とも磨滅・剝落著しく調整不明。柱穴190出土。206は手捏ねの鉢形土器で、口縁部および胴部の一部を欠損する。内彎しながら立ち上がる胴部は中位付近で直立し、口縁部は直線的に立ち上がる。口縁端部は尖りぎみに終る。内外面ともナデ仕上げで、内面および底部側面には連続する指圧痕が認められる。柱穴239出土。207は鋤先状口縁をもつ壺形土器で、口縁端部の斜外方への張り出しは強い。外面の平坦面には扁平な円形浮文を貼付する。内外面とも横ナデ仕上げで、特に口唇部外面は強くナデられ窪む。柱穴359出土。

その他の出土遺物

1）トレンチ出土の遺物（Fig. 86, PL. 37－208～PL. 38－233・PL. 39－234～236）

昭和42年調査時に設定したトレンチからの出土遺物であるが、包含層出土のものか遺構出土のものか判然としないため、以下、器種ごとに取り扱う。弥生時代中～後期のものがあるが中期のものが多い。

壺形土器（208～213）

208は直線的に「く」の字に外反する口縁部の破片で、端部は平坦。頸部外面に扁平な断面三角形の突帯が巡り、ヘラによる刻目を施す。209は長頸壺の口縁部と思われるもので、外面には口縁端部よりやや下位に断面三角形の貼付突帯が1条巡る。210・211は鋤先状の口縁部をもつもので、210は端部内面の内側への張り出しが強い。211は口縁部外面の広い平坦面に、平面「U」字形の浮文を貼付する。口縁端部の斜外方への張り出しは強い。212は頸部の破片で、内面に内側へ突出する断面三角形の突帯が巡る。外面には断面長方形に近い扁平な幅広の粘土帯を貼付後、ヘラによる沈線を施しているため、少なくとも3条の断面三角形の突帯を貼付したようにみえる。213は少なくとも2条の断面方形の貼

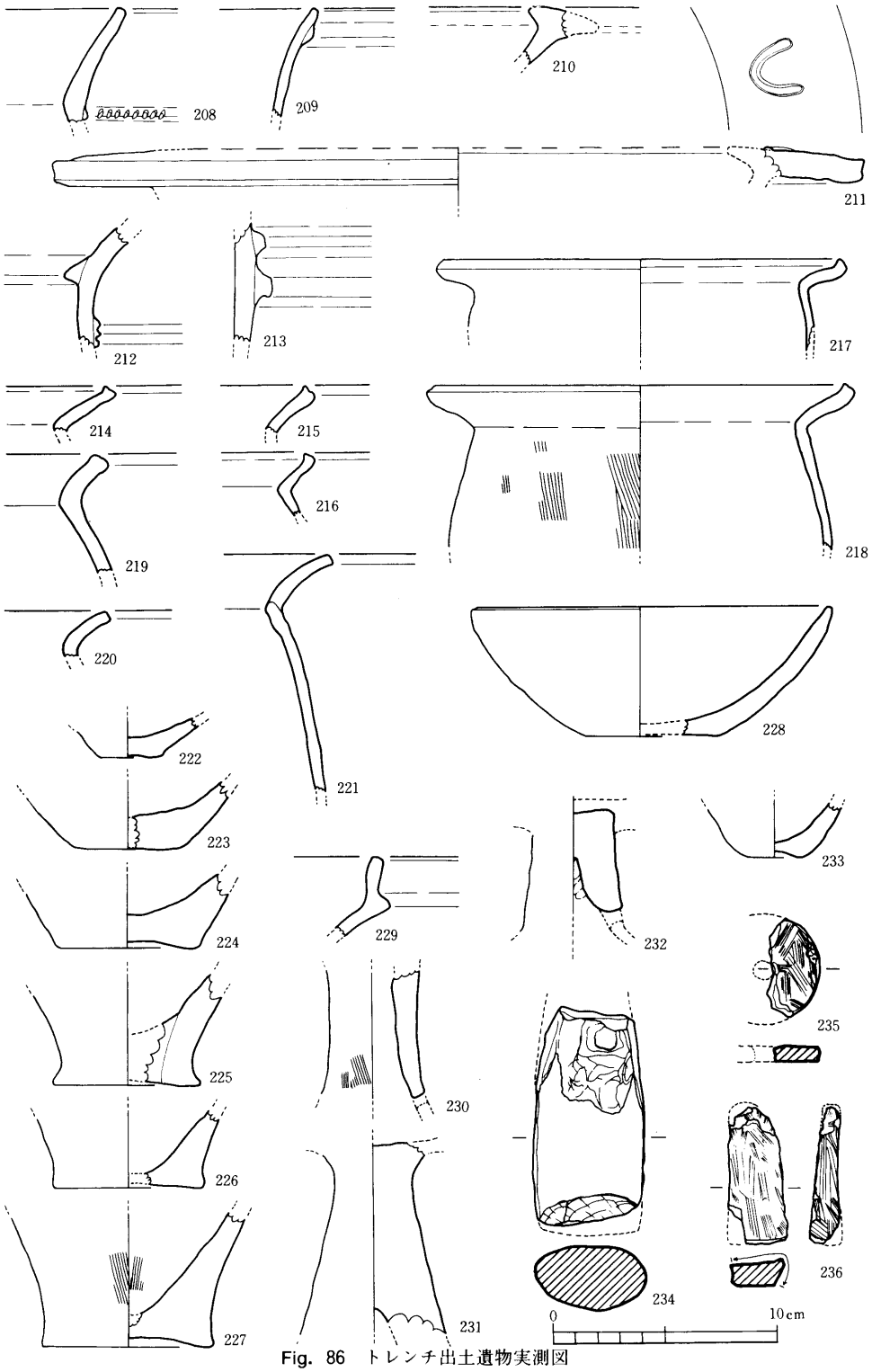


Fig. 86　トレンチ出土遺物実測図

付突帯を有する胴部の破片。208は端部内外面横ナデ、外面縦刷毛目ののち横ナデ、内面横刷毛目仕上げ。211は内外面横ナデ仕上げ。212・213は突帯付近横ナデ、他はナデ調整。209・210は磨滅・剝落のため調整不明。

甕形土器（214～227）

214～218は跳ね上げ口縁をもつもので、口縁部は「く」の字状に外反するが、217は「L」字状に近く強く屈曲する。口縁端部は窪むもの（214・215）と平坦なもの（216～218）とがある。219～221は「く」の字に外反する口縁部をもつもの。219は外彎気味に短く屈曲し、胴部外面下半に煤が付着している。220は短く外反する口縁部の外面ほぼ全面に煤が付着している。221は内面に明瞭な稜をもち、外彎しながら強く屈曲する口縁部をもつ。214～220とも口縁部内外面横ナデ。内面は216～219がナデ、220が頸部付近ナデ、胴部刷毛目仕上げ。外面は217がヘラナデ、218・219・221が縦刷毛目仕上げで、216は風化のため調整不明。222～227は底部で、わずかに上げ底ないしは窪み底のものが多い。風化が著しく調整が不明瞭なものが多いが、227は胴部下半内外面を縦刷毛目、底部内外面ナデ、側面を横ナデする。223・225は内面ナデ仕上げ、224は外底部内面ナデ仕上げ。

鉢形土器（228）

浅い鉢形土器で、底部から口縁部付近まで内彎しながらほぼ同一の厚さの器壁で立ち上がる。口縁端部は尖り気味に終わる。口縁部内外面横ナデで、端部付近は強くナデている。他はナデ仕上げ。

高坏形土器（229～232）

229は口縁部の破片。内面への粘土帯の貼付によって口縁上半部で屈曲して上方へ立ち上がる。内外面とも横ナデ仕上げ。230～232は脚部の破片。230は長脚の円形透かしをもつもので、外面縦刷毛目仕上げを行なう。231・232は坏部へ脚柱を挿入するもので、いずれも内面ナデ仕上げを行なうが、232はヘラによる押圧整形痕が明瞭に残る。外面磨滅・剝落のため調整不明。

手捏ね土器（233）

窪み底の底部の破片。内面ナデ仕上げを行なう。

石器（234～236）

234は太型蛤刃石斧で刃・頭部を欠損する。右側面上半は自然面を残し、研磨は認められない。上半部を中心として剝落が著しい。泥質片岩製。最大幅4.9cm、最大厚2.8cm、重量224ｇ。235は角閃石安山岩（四熊ヶ岳産）製の紡錘車で、約1／2を欠損する。正裏両面

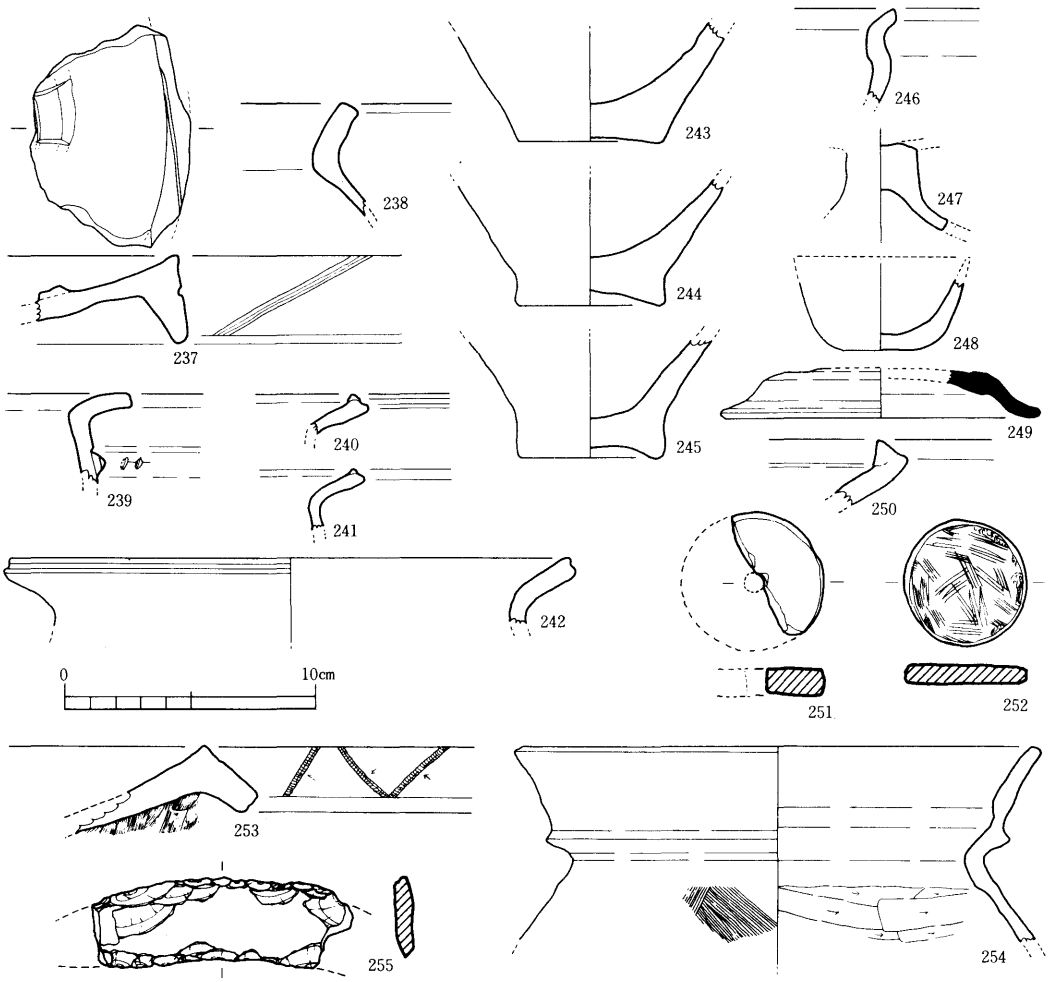


Fig. 87 トレンチおよびその他の出土遺物実測図

に不定方向からの顕著な研磨痕が認められる。復原径49.0㎜、厚さ7.0㎜、重量９ｇ。236は直方体に近い形状を有する仕上げ砥と思われる砥石で、上・下両端部を欠損する。正裏両面および右側面を研砥面としている。石英斑岩製。重量22ｇ。

２）遺構に伴わない遺物(Fig.87,PL.38－237～250･253･254･PL.39－251･252･255)

ｉ）表土・攪乱壙出土遺物(Fig.87－237～252,PL.38－237～250･PL.39－251･252)

ａ）弥生土器

壺形土器（237・238）

237は口部が下垂するもので、外面の平坦面にはヘラによる幅広の鋸歯文を施文する。

内面には断面台形状の扁平な円弧状の突帯を貼付する。口縁端部内外面横ナデ、以下ナデ仕上げ。238は短く「く」の字状に外反する厚手の口縁部をもつ。口縁部内外面横ナデ、外面ナデ、内面ヘラ削りを行なう。

甕形土器（239～245）

239は逆「L」字状に屈曲する口縁部をもち、頸部の下位にはヘラによる刻目を施した断面三角形の突帯が巡る。外面、口縁部内面横ナデ、胴部内面ナデ仕上げ。240・241は跳ね上げ口縁をもつもので、240・242は端部外面が窪む。いずれも内外面横ナデ仕上げ。243～245は底部で、平底に近いもの（243）と上げ底ないしは窪み底のもの（244・245）とがある。いずれも側面横ナデ、他はナデ仕上げ。

b）土師器（246～248）

246は短く緩やかに外反する小形の甕ないしは鉢形土器の口縁部。口縁部内外面横ナデ、他はナデ仕上げ。247は大きく裾広がりになる小形の高坏形土器の脚部。坏部および脚部内面ナデ仕上げ、他は風化のため調整不明。248は手捏ねに近い小形の鉢形土器で、底部は不安定な平底。内外面ともナデ仕上げ。

c）須恵器（249）

口縁部が反り気味に緩やかに下降する蓋坏の蓋で、端部は丸い。口縁部内外面回転横ナデ、天井部内外面回転横ナデののち静止ナデ。

d）瓦質土器（250）

擂鉢で、口縁端部内面に断面三角形の粘土帯を貼付し、口縁端部を肥厚させる。体部内面に少なくとも2条の櫛歯状工具による描き上げがみられる。外面横刷毛目、他は横ナデ仕上げ。

e）土製品（251）

紡錘車で約1／2を欠損しており、石製のもの（235・252）に比べてやや大ぶり厚手である。正裏両面とも焼成前穿孔がみられ、中央部に向かうにつれてわずかに山高となる。復原径57.0㎜、厚さ11.5㎜、重量16ｇ。胎土に若干の微砂粒を含み、焼成良好。淡橙灰色を呈する。

f）石器（252）

紡錘車未製品と思われるもので、正裏両面に不定方向からの研磨痕が認められる。径48.5㎜、厚さ8.0㎜、重量23ｇ。角閃石安山岩（四熊ヶ岳産）製。

ii）出土状況不明の遺物（Fig. 87－253～255, PL. 38－253・254・PL. 39－255）

Tab. 8　出土遺物観察表

（①口径 ②底径 ③器高）　（①外面 ②内面）　法量（　）は復原値

番号	器種	法　量（cm）	色　調	胎　土	焼　成	備　考
SB－1						
1	甕	①(18.8)	にぶい橙色 (5YR 7/4)	良　好	良　好	口縁部1/7～1/8破片
SB－2						
2	壺		浅黄橙色 (10YR 8/3)	やや不良	良　好	
3	壺		①にぶい黄橙色 (10YR 7/3)　②灰色 (5YR 1/5)	良　好	良　好	
4	甕		にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	やや不良	良　好	
5	甕		浅黄色 (2.5Y 7/4)	良　好	良　好	
6	甕		①にぶい黄橙色 (10YR 7/4)　②橙色 (5YR 7/6)	良　好	良　好	
7	甕	②(4.6)	①にぶい黄橙色 (10YR 6/3)　②淡黄色 (2.5Y 8/3)	精　良	良　好	
8	甕	②(5.6)	①橙色 (2.5YR 6/6)　②灰色 (5Y 1/4)	良　好	良　好	口縁部1/4破片
9	壺	② 7.6	①赤橙色 (10R 6/8)　②にぶい橙色 (5YR 7/4)	良　好	良　好	
10	鉢	②(6.6)	赤橙色 (10R 6/8)	良　好	良　好	
SB－4						
14	甕	①20.2	①にぶい橙色 (7.5YR 7/4)　②浅黄橙色 (10YR 8/3)	良　好	良　好	口縁部1/5破片
SK－1						
16	鉢	①(10.0)	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	不　良	不　良	口縁部1/3破片
17	甕		①赤灰色 (10R 5/1)　①橙色 (2.5YR 6/6)	やや良好	良　好	口縁部1/5～1/6破片
18	甕	② 2.5	橙色 (2.5YR 7/6)	やや不良	良　好	
SK－2						
19	甕	① 15.2	①橙色 (2.5YR 6/8)　②淡橙色 (5YR 8/4)	精　良	良　好	
20	甕		浅橙色 (10YR 8/3)	精　良	やや不良	
21	甕	② 4.0	①にぶい黄橙色 (10YR 7/4)　②明黄褐色 (10YR 7/6)	良　好	良　好	底部1/2破片
22	壺	② 18.0	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	不　良	良　好	底部1/4破片
SK－3						
23	壺	①(14.2)	①橙色 (5YR 7/6)　②にぶい橙色 (5YR 7/3)	不　良	やや不良	口縁部1/6～1/7破片
24	壺	①(10.0)	①赤橙色 (10R 6/8)　②黄灰色 (2.5Y 4/1)	良　好	良　好	口縁部～胴部上半
25	壺	①(17.8)	にぶい橙色 (5YR 7/4)	精　良	良　好	口縁部1/4破片
26	壺	①(19.4)	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	やや不良	良　好	口縁部1/5破片
27	壺		①橙色 (7.5YR 7/6)　②浅橙色 (10YR 8/3)	不　良	良　好	
28	壺	①(17.8)	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)	不　良	不　良	口縁部1/5～1/6破片
29	壺	①(20.6)	にぶい橙色 (5YR 7/4)	不　良	不　良	口縁部1/5～1/6破片
30	甕	①(22.0)	淡橙色 (5YR 8/4)	良　好	精　良	口縁部1/5～1/6破片
31	甕	①(17.2)	①黄褐色 (10YR 5/6)　②にぶい橙色 (7.5YR 7/3)	不　良	良　好	
32	壺		①赤橙色 (10R 6/8)　②明黄褐色 (10YR 7/6)	不　良	やや不良	

(①口径 ②底径 ③器高)　(①外面 ②内面)　法量（　）は復原値

番号	器種	法　量 (cm)	色　調	胎　土	焼　成	備　考
33	壺	②(5.1)	①赤橙色 (10R 6/8)　②明黄褐色 (10YR 6/6)	良　好	良　好	底部1/3破片
34	壺	② 6.0	①赤橙色 (10R 6/8)　②浅橙色 (10YR 6/8)	やや不良	良　好	底部1/2破片
35	甕		浅黄色 (2.5Y 7/4)	不　良	不　良	口縁片
36	甕		にぶい橙色 (7.5YR 7/3)	やや不良	良　好	口縁片
37	甕	①(18.0)	にぶい橙色 (5YR 6/4)	やや不良	良　好	口縁部1/3破片
38	甕	①(19.3)	にぶい橙色 (5YR 6/4)	良　好	良　好	口縁部1/3破片
39	甕	①(23.0)	①にぶい橙色 (5YR 6/4)　②橙色 (2.5YR 7/6)	やや不良	良　好	口縁部1/3破片
40	甕	①(20.6)	①にぶい橙色 (2.5Y 6/4)　②黒色 (2.5Y 2/1)	良　好	良　好	口縁部1/4～1/5破片
41	甕	①(23.4)	①橙色 (7.5YR 6/6)　②黒褐色 (10YR 3/1)	良　好	良　好	口縁部1/3破片
42	甕	① 21.0	①にぶい橙色 (7.5YR 7/4)　②黒褐色 (10YR 3/1)	良　好	良　好	口縁部1/2破片
43	甕	①(27.4)	褐灰色 (5YR 4/1)	良　好	精　良	口縁部1/3～1/4破片
44	甕	①(20.0)	黒色 (10YR 2/1)	良　好	良　好	口縁部1/3破片
45	甕		①暗褐色 (7.5YR 3/4)　②橙色 (2.5YR 6/8)	良　好	良　好	口縁片
46	甕		①赤橙色 (10R 6/6)　②明黄褐色 (10YR 6/6)	良　好	良　好	
47	甕		明赤褐色 (2.5YR 5/8)	良　好	精　良	
48	甕		①にぶい黄褐色 (10YR 5/4)　②橙色 (2.5YR 7/6)	やや不良	不　良	
49	甕		①黒褐色 (7.5YR 3/1)　②褐灰色 (7.5YR 1/5)	やや不良	良　好	
50	甕	①(15.2)	黒灰色 (5YR 4/1)	良　好	精　良	口縁部1/4破片
51	甕	①(20.0)	①赤橙色 (10R 6/6)　②褐灰色 (7.5YR 5/1)	良　好	良　好	口縁部1/3破片
52	甕	①(16.0)	①にぶい黄橙色 (10YR 7/4)　②褐灰色 (10YR 4/1)	良　好	良　好	口縁部1/3破片
53	甕	①(23.3)	にぶい黄褐色 (10YR 5/4)	やや不良	良　好	口縁部1/5～1/6破片
54	甕	①(16.0)	①浅黄橙色 (10YR 8/4)　②浅黄色 (2.5Y 7/4)	良　好	やや不良	口縁部1/3破片
55	甕		暗灰色 (N 3/0)	やや不良	良　好	口縁片
56	甕		①にぶい赤褐色 (5YR 5/3)　②明黄褐色 (10YR 7/6)	良　好	精　良	口縁片
57	甕		浅橙色 (7.5YR 8/6)	やや不良	不　良	口縁片
58	甕		①褐灰色 (10YR 4/1)　②にぶい橙色 (5YR 7/4)	やや不良	やや不良	口縁片
59	甕	① 22.8	①明黄褐色 (10YR 7/6)　②橙色 (2.5YR 7/6)	良　好	良　好	口縁部1/2破片
60	甕		橙色 (2.5YR 6/6)	不　良	不　良	口縁片
61	甕	①(25.7)	明褐灰色 (5YR 7/2)	良　好	良　好	口縁片
62	甕		にぶい橙色 (5YR 7/4)	良　好	良　好	口縁片
63	甕	①(20.6)	にぶい黄褐色 (10YR 5/3)	良　好	良　好	口縁部1/5～1/6破片
64	甕	①(25.5)	①褐灰色 (5YR 4/1)　②にぶい黄橙色 (10YR 7/4)	不　良	良　好	口縁部1/3破片
65	甕	①(13.1)	①にぶい黄橙色 (10YR 7/4)　②灰色 (7.5Y 5/1)	良　好	良　好	口縁部1/5～1/6破片
66	甕		①明黄褐色 (10YR 6/8)　②明黄褐色 (2.5Y 7/6)	良　好	良　好	口縁片
67	甕		橙色 (2.5YR 6/8)	精　良	精　良	口縁片

（①口径 ②底径 ③器高）　（①外面 ②内面）　法量（　）は復原値

番号	器種	法　量（cm）	色　調	胎　土	焼　成	備　考
68	甕	①(25.1)	①橙色(2.5YR6/6) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	不　良	良　好	口縁部1/3破片
69	甕	①(25.0)	①橙色(2.5YR6/8) ②橙色(5YR7/6)	やや不良	良　好	口縁部1/6～1/7破片
70	甕		にぶい橙色(7.5YR7/4)	不　良	不　良	口縁片
71	甕		灰赤色(7.5R4/2)	良　好	良　好	口縁片
72	甕	①(24.0)	①淡赤橙色(2.5YR7/4) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	不　良	良　好	口縁部1/4～1/5破片
73	甕	①(20.0)	①明褐色(2.5YR5/8) ②黄灰色(2.5Y4/1)	やや不良	やや不良	口縁部1/6～1/7破片
74	甕	①(14.2)	にぶい橙色(5YR7/4)	良　好	良　好	口縁部1/3～1/4破片
75	甕	①(14.2)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	良　好	良　好	口縁部1/3～1/4破片
76	甕		①暗赤褐色(5YR3/3) ②黒褐色(7.5YR3/1)	やや不良	やや不良	胴部上半
77	甕	②(5.0)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	良　好	良　好	底部
78	甕	②(6.4)	橙色(2.5YR6/8)	やや不良	やや不良	底部
79	甕	②(5.0)	①赤褐色(10R5/3) ②褐灰色(10YR4/1)	良　好	良　好	底部1/3破片
80	甕	②(5.6)	灰褐色(7.5YR5/2)	やや不良	良　好	底部1/3破片
81	甕	②(5.0)	①にぶい橙色(5YR7/4) ②明黄褐色(10YR6/6)	良　好	やや不良	底部1/5～1/6破片
82	甕	② 5.6	①明黄褐色(2.5Y7/6) ②浅黄色(5Y8/4)	やや不良	やや不良	底部1/2破片
83	甕	② 6.0	①赤橙色(10R6/8) ②にぶい橙色(5YR7/4)	良　好	良　好	底部1/2破片
84	甕	②(7.2)	①浅黄橙色(10YR8/4) ②黄灰色(2.5Y4/1)	良　好	良　好	底部1/3破片
85	甕	②(6.0)	①橙色(2.5YR6/8) ②灰色(7.5Y4/1)	良　好	良　好	底部1/3破片
86	甕	②(6.8)	①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②黄灰色(2.5Y4/1)	良　好	良　好	底部1/8破片
87	甕	②(5.0)	①橙色(2.5YR6/8) ②黄灰色(2.5Y4/1)	不　良	良　好	底部1/4破片
88	甕	② 6.2	①淡赤橙色(2.5YR7/4) ②灰褐色(5YR6/2)	不　良	良　好	底部1/2破片
89	甕	②(5.4)	①赤橙色(10R6/6) ②浅橙色(7.5YR8/4)	良　好	良　好	底部1/3破片
SK－4						
91	壺	①(19.2)	明黄褐色(10YR7/6)	良　好	良　好	口縁部1/6～1/7破片
92	壺		①明黄褐色(2.5Y7/6) ②橙色(5YR7/6)	良　好	不　良	口縁部下半
93	壺		にぶい橙色(7.5YR6/4)	やや不良	やや不良	胴部上半
94	壺		にぶい橙色(7.5YR6/4)	良　好	やや不良	胴部上半
95	甕	②(18.0)	灰黄褐色(10YR6/2)	良　好	良　好	口縁部1/4破片
96	甕	①(24.6)	淡赤橙色(2.5YR7/4)	精　良	良　好	口縁部1/5～1/6破片
97	甕		にぶい橙色(5YR7/4)	良　好	良　好	口縁片
98	甕		にぶい橙色(5YR7/4)	良　好	やや不良	口縁片
99	甕		赤灰色(2.5YR6/1)	良　好	良　好	口縁片
100	甕		①にぶい褐色(7.5YR5/4) ②明黄褐色(10YR7/6)	不　良	良　好	口縁片
101	甕	②(6.2)	橙色(2.5YR6/8)	不　良	良　好	底部
102	甕	②(6.0)	赤橙色(10R6/8)	不　良	良　好	底部

(①口径 ②底径 ③器高)　(①外面 ②内面)　法量（　）は復原値

番号	器種	法　量（cm）	色　調	胎　土	焼　成	備　考
103	甕	②(5.5)	①赤橙色(10R6/6)　②灰色(N5/0)	良　好	良　好	底部
104	甕	②(5.5)	①橙色(2.5YR6/8)　②灰色(N6/0)	良　好	良　好	底部1/5～1/6破片
SK－5						
105	壺	①(10.7)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	不　良	不　良	口縁部1/6破片
106	甕	①(13.8)	①浅黄橙色(7.5YR8/3)　②にぶい橙色(7.5YR7/4)	良　好	良　好	口縁部1/5～1/6破片
SK－6						
107	壺		①淡赤橙色(2.5YR7/4)　②灰色(10Y4/1)	不　良	良　好	長頸壺胴部1/3破片
108	甕	② 8.0	①赤橙色(10R6/6)　②にぶい黄橙色(10YR7/4)	良　好	良　好	底部1/2破片
SK－7						
109	壺	①(19.0)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	良　好	良　好	口縁部1/3破片
110	甕	①(22.8)	褐灰色(5YR6/1)	やや不良	やや不良	口縁部1/6破片
111	甕		橙色(5YR7/6)	良　好	不　良	口縁片
112	甕		①にぶい褐色(5YR5/3)　②橙色(2.5YR7/6)	良　好	良　好	口縁片
113	甕	②(6.7)	赤橙色(10R6/8)	良　好	やや不良	底部片
114	高坏		黄橙色(10YR7/8)	精　良	やや不良	脚部上半
SK－8						
115	壺		浅黄色(7.5YR8/6)	やや不良	やや不良	口縁片
116	甕		浅黄橙色(7.5YR8/4)	精　良	不　良	口縁片
117	甕		①淡赤色(2.5YR6/2)　②赤橙色(10R6/8)	良　好	良　好	口縁片
118	壺	② 5.6	①赤橙色(10R6/6)　②灰白色(2.5Y7/1)	やや不良	やや不良	底部
SK－9						
129	壺	①(18.0)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	精　良	良　好	口縁部1/5～1/6破片
130	壺	①(18.5)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	良　好	良　好	口縁部1/5～1/6破片
131	甕	①(22.0)	①にぶい褐色(7.5YR6/3)　②にぶい黄橙色(10YR7/4)	良　好	良　好	口縁部1/3破片
132	甕	①(24.0)	①暗灰色(N3/0)　②淡赤橙色(2.5YR7/4)	良　好	良　好	口縁部1/5～1/6破片
133	甕	① 25.8	①にぶい黄橙色(10YR7/3)　②灰色(7.5Y4/1)	良　好	良　好	口縁部1/2破片
134	甕	①(23.6)	にぶい橙色(5YR7/4)	やや不良	良　好	口縁部1/3破片
135	甕	①(20.8)	①灰褐色(7.5YR4/2)　②淡黄色(2.5Y8/3)	良　好	良　好	口縁部1/5～1/6破片
136	甕	①(27.2)	①灰褐色(5YR5/2)　②にぶい橙色(5YR7/4)	やや不良	良　好	口縁部1/3破片
137	甕		①にぶい黄橙色(10YR6/4)　②褐灰色(7.5YR5/1)	良　好	良　好	口縁片
138	甕	①(22.2)	①灰白色(2.5Y7/1)　②にぶい橙色(7.5YR7/4)	不　良	良　好	口縁部1/4～1/5破片
139	甕	①(27.4)	①にぶい橙色(7.5YR7/4)　②浅黄色(2.5Y8/3)	やや不良	良　好	口縁部1/6破片
140	甕	①(12.2)	①橙色(7.5YR7/6)　②にぶい黄橙色(10YR7/4)	不　良	良　好	口縁部1/4～1/5破片
141	甕	①(13.4)	①橙色(7.5YR7/6)　②黒褐色(2.5Y3/1)	良　好	良　好	口縁部1/5～1/6破片
142	甕	① 23.0	①黄灰色(2.5Y5/1)　②浅黄橙色(10YR8/3)	良　好	良　好	口縁部1/2破片

（①口径 ②底径 ③器高）　（①外面 ②内面）　法量（　）は復原値

番号	器種	法　量（cm）	色　調	胎　土	焼　成	備　考
143	甕	①(22.8)	橙色 (2.5YR 7/8)	良　好	不　良	口縁部1/3破片
144	甕	①(15.4)	黒褐色 (7.5YR 3/1)	やや不良	良　好	口縁部一部欠損
145	甕	② 7.0	①橙色 (2.5YR 6/8)　②暗灰色 (N 3/0)	やや不良	良　好	底部
146	甕	②(7.6)	①赤橙色 (10R 6/8)　②黒色 (7.5Y 2/1)	良　好	良　好	底部1/6～1/7破片
147	甕	② 6.8	①褐灰色 (5YR 5/1)　②淡赤橙色 (2.5YR 7/4)	良　好	良　好	底部1/2破片
SK－10						
119	甕	②(7.5)	①褐灰色 (7.5YR 5/1)　②淡黄色 (2.5Y 8/3)	やや不良	良　好	底部1/3破片
120	甕	②(6.4)	にぶい黄橙色 (10YR 7/2)	良　好	やや良好	底部1/4破片
121	甕		にぶい橙色 (5YR 7/3)	良　好	良　好	口縁片
122	甕		橙色 (5YR 7/6)	不　良	やや不良	口縁片
123	甕	①(21.0)	浅黄橙色 (10YR 8/3)	やや不良	良　好	口縁部1/5破片
SK－12						
124	甕	①(22.4)	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)	良　好	良　好	口縁部1/2破片
125	甕		浅黄色 (2.5Y 8/3)	良　好	良　好	口縁片
126	甕		①灰白色 (2.5Y 1/2)　②黄灰色 (2.5Y 1/2)	良　好	良　好	口縁片
127	甕		灰黄褐色 (10YR 5/2)	やや不良	良　好	口縁片
128	甕	①(12.8)	淡黄色 (2.5Y 8/4)	やや不良	やや不良	口縁部1/3破片
SK－13						
148	壺	①(32.2)	浅黄色 (2.5Y 7/4)	不　良	良　好	口縁部1/7～1/8破片
149	壺	①(27.0)	にぶい黄橙色 (10YR 6/4)	やや不良	良　好	口縁部1/6～1/7破片
150	壺		にぶい黄橙色 (10YR 6/4)	良　好	良　好	胴部片
151	甕	①(30.8)	①灰色 (5Y 4/1)　②浅黄色 (2.5Y 7/4)	良　好	良　好	口縁部1/4～1/5破片
152	甕	①(22.0)	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)	良　好	良　好	口縁部1/6破片
153	甕		①浅黄橙色 (10YR 8/4)　②にぶい黄橙色 (10YR 6/3)	良　好	良　好	口縁片
154	甕	①(24.2)	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)	精　良	やや不良	口縁部1/4破片
155	甕		①にぶい黄橙色 (10YR 7/4)　②褐灰色 (10YR 4/1)	良　好	良　好	口縁片
SK－14						
156	壺	②(6.7)	①赤褐色 (10R 4/4)　②橙色 (2.5YR 7/8)	不　良	良　好	底部1/4破片
SK－15						
157	甕	①(17.0)	①浅橙色 (5YR 8/4)　②淡黄色 (2.5Y 8/4)	良　好	良　好	土師器口縁部1/5破片
SK－16						
158	甕		①赤灰色 (10R 5/1)　②褐灰色 (10YR 6/1)	良　好	やや不良	口縁片
159	高坏		①浅黄橙色 (7.5YR 8/6)　②橙色 (5YR 7/8)	精　良	良　好	脚部片
SK－17						
160	壺		淡橙色 (5YR 8/3)	不　良	やや不良	長頸壺口縁片

(①口径 ②底径 ③器高)　(①外面 ②内面)　法量（　）は復原値

番号	器種	法　量（cm）	色　調	胎　土	焼　成	備　考
161	甕		褐灰色 (10YR 5/1)	良　好	良　好	口縁片
162	甕		褐灰色 (10YR 4/1)	良　好	良　好	口縁片
163	甕		褐灰色 (5YR 4/1)	精　良	精　良	口縁片
164	甕		①橙色 (7.5YR 7/6)　②黄灰色 (2.5YR 4/1)	不　良	やや不良	口縁片
165	甕	①(21.2)	にぶい橙色 (5YR 6/3)	良　好	良　好	口縁部片1/6破片
166	壺	②(8.2)	①にぶい橙色 (10YR 7/3)　②暗灰色 (N 3/0)	不　良	良　好	底部片
167	甕	②(7.2)	橙　色 (2.5YR 6/8)	良　好	良　好	底部1/4～1/5破片
168	甕	②(7.2)	橙　色 (2.5YR 6/8)	良　好	良　好	底部1/4～1/5破片
169	鉢	② 7.8	①淡黄色 (2.5Y 8/4)　②にぶい黄橙色 (10YR 7/4)	良　好	良　好	底部1/2破片
SK－18						
171	壺		①淡黄色 (2.5Y 8/4)　②灰色 (5Y 5/1)	やや不良	良　好	胴部片
172	甕		にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	精　良	良　好	口縁片
173	甕		にぶい橙色 (5YR 7/4)	良　好	良　好	口縁片
174	鉢	②(5.8)	浅黄橙色 (10YR 8/3)	良　好	良　好	底部1/4破片
175	鉢	①(9.8)	①橙色 (2.5YR 7/6)　②黒色 (N 2/0)	良　好	良　好	高坏坏部片
SK－21						
176	壺		浅黄橙色 (7.5YR 8/6)	良　好	やや不良	口縁片
177	壺		淡　橙　色 (5YR 8/4)	良　好	良　好	頸部片
178	甕		淡　黄　色 (2.5Y 8/4)	不　良	不　良	口縁片
SK－22						
179	壺		①浅黄橙色 (10YR 8/3)　②灰色 (5Y 6/1)	やや不良	不　良	口縁片
180	壺	②(7.8)	①明赤褐色 (2.5YR 5/8)　②灰色 (7.5Y 4/1)	良　好	やや不良	底部片
181	甕	② 4.6	①赤橙色 (10R 6/8)　②明褐灰色 (7.5YR 7/2)	やや不良	やや不良	底部1/2破片
SK－23						
182	壺	①(15.0)	淡　橙　色 (5YR 8/4)	良　好	良　好	口縁部1/4破片
183	壺	②(9.6)	淡　黄　色 (2.5Y 8/4)	良　好	不　良	底部破片
184	甕	①(23.6)	①浅黄橙色 (10YR 8/3)　②灰色 (N 5/1)	良　好	良　好	口縁部1/6～1/7破片
185	甕		浅黄橙色 (10YR 8/3)	良　好	不　良	口縁片
186	甕		明黄褐色 (10YR 7/6)	良　好	やや不良	口縁片
187	鉢	①(15.8)	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)	やや不良	良　好	高坏か
188	高坏	①19.2	①にぶい黄橙色 (10YR 8/4)　②淡黄色 (2.5Y 8/4)	やや不良	良　好	坏部
SK－24						
189	壺		淡　黄　色 (2.5Y 8/3)	精　良	良　好	頸部片
SK－25						
190	甕		①赤橙色 (10R 6/6)　②にぶい橙色 (5YR 7/3)	やや不良	良　好	口縁片

（①口径 ②底径 ③器高）　（①外面 ②内面）　法量（　）は復原値

番号	器種	法　量（cm）	色　調	胎　土	焼　成	備　考
191	甕		①橙色（5YR 6/6）②にぶい黄橙色（10YR 3/7）	良　好	良　好	口縁片
SK－26						
192	壺	①(11.0)	橙　色（7.5YR 7/6）	良　好	良　好	口縁片
193	甕	①(17.0)	浅黄色（2.5Y 7/4）	やや不良	良　好	口縁部1/6破片
194	壺	②(5.0)	橙　色（5YR 7/8）	良　好	良　好	底部部1/6破片
195	鉢	①(15.5)	①灰黄褐色（10YR 6/2）②にぶい黄橙色（10YR 7/4）	良　好	良　好	口縁部1/3破片
SK－41						
196	甕		橙　色（2.5YR 6/8）	やや不良	不　良	口縁片
SD－1						
197	壺		にぶい赤褐色（2.5YR 4/4）	不　良	不　良	口縁片
198	甕		①明灰褐色（7.5YR 7/2）②淡黄色（2.5Y 7/3）	やや不良	やや不良	胴部片
SD－2						
199	甕		灰白色（2.5Y 8/2）	不　良	やや不良	
200	高坏	①(25.5)	淡橙色（5YR 8/3）	良　好	良　好	脚部1/7破片
SD－3						
201	壺		淡橙色（5YR 8/3）	やや不良	良　好	口縁片
202	壺	②7.8	①赤色（10R 4/6）②橙色（2.5YR 6/6）	不　良	良　好	底部1/7破片
柱穴						
203	甕		淡橙色（5YR 8/4）	良　好	良　好	口縁片
204	壺		にぶい橙色（7.5Y 7/4）	やや不良	やや不良	口縁片
205	壺		淡黄色（2.5Y 8/3）	精　良	やや不良	胴部片
206	鉢	①6.2②2.5③5.3	橙　色（2.5YR 7/6）	精　良	やや不良	
207	壺		①淡黄色（2.5Y 8/4）②黄橙色（10YR 7/8）	良　好	良　好	口縁片
トレンチ						
208	壺		①にぶい赤褐色（5YR 4/3）②暗赤褐色（5YR 3/2）	良　好	精　良	口縁片
209	壺		橙　色（2.5YR 6/8）	やや不良	不　良	長頸壺
210	壺		橙　色（2.5YR 7/6）	良　好	不　良	口縁片
211	壺	①(36.2)	にぶい黄橙色（10YR 7/3）	良　好	良　好	「U」字形の浮文貼付
212	壺		①赤褐色（2.5YR 4/6）②灰褐色（5YR 6/2）	良　好	やや不良	頸部片
213	壺		①にぶい黄橙色（10YR 7/3）②にぶい橙色（7.5YR 7/4）	精　良	精　良	胴部片
214	甕		①浅黄橙色（10YR 8/3）②黒色（N 2/0）	精　良	やや不良	口縁片
215	甕		①灰褐色（7.5YR 6/2）②浅黄橙色（10YR 8/3）	不　良	良　好	口縁片
216	甕		にぶい橙色（7.5YR 7/4）	良　好	やや不良	口縁片
217	甕	①(17.6)	①灰褐色（5YR 4/2）②にぶい褐色（7.5YR 6/3）	良　好	良　好	口縁部1/5破片
218	甕	①(18.2)	にぶい黄橙色（10YR 7/4）	良　好	精　良	口縁部1/6破片

(①口径 ②底径 ③器高)　(①外面 ②内面)　法量（　）は復原値

番号	器種	法　量（cm）	色　調	胎　土	焼　成	備　考
219	甕		灰黄褐色 (10YR 4/2)	良　好	精　良	口縁片
220	甕		①灰黄褐色 (10YR 5/2)　②淡黄色 (2.5Y 8/3)	不　良	やや不良	口縁片
221	甕		①灰褐色 (5YR 5/2)　②にぶい黄橙色 (10YR 7/4)	精　良	良　好	口縁片
222	甕	②(2.5)	淡　黄　色 (2.5Y 8/3)	良　好	やや不良	鉢か、底部片
223	甕	②(4.0)	①にぶい黄橙色 (10YR 7/3)　②明黄褐色 (2.5Y 7/6)	不　良	良　好	底部1/3破片
224	甕	②(5.5)	①にぶい赤褐色 (2.5YR 5/3)　②灰白色 (2.5Y 8/2)	不　良	良　好	底部1/5破片
225	甕	②(5.8)	①橙色 (2.5YR 6/8)　②にぶい褐色 (7.5YR 5/4)	不　良	やや不良	底部1/3破片
226	甕	②(6.5)	①にぶい黄橙色 (10YR 7/4)　②にぶい橙色 (7.5YR 7/3)	良　好	良　好	底部1/3破片
227	甕	② 7.6	①橙色 (2.5YR 7/6)　②浅黄橙色 (10YR 8/4)	良　好	良　好	底部1/2破片
228	甕	①(15.6)	浅黄橙色 (10YR 8/3)	やや不良	良　好	口縁部1/5破片
229	高坏		①にぶい橙色 (5YR 7/3)　②浅黄橙色 (10YR 8/3)	精　良	やや不良	
230	高坏		にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	良　好	良　好	脚部1/4破片
231	高坏		浅黄橙色 (10YR 8/3)	良　好	やや不良	脚部1/2破片
232	高坏		浅黄橙色 (10YR 8/3)	精　良	良　好	脚部1/2破片
233	手捏ね土器鉢	② 2.0	灰　白　色 (5Y 8/2)	良　好	やや不良	
表土・攪乱壙出土遺物						
237	壺		①明黄褐色 (10YR 7/6)　②赤褐色 (2.5YR 4/6)	やや不良	やや不良	口縁片
238	甕		①にぶい赤褐色 (2.5YR 5/4)　②赤褐色 (2.5Y 8/3)	良　好	良　好	口縁片
239	甕		淡　橙　色 (5YR 8/3)	良　好	良　好	口縁片
240	甕		にぶい橙色 (5YR 7/3)	良　好	やや不良	口縁片
241	甕		浅黄橙色 (10YR 8/3)	良　好	良　好	口縁片
242	甕	①(22.2)	にぶい黄橙色 (10YR 6/4)	やや不良	良　好	口縁部1/6破片
243	甕	②(5.8)	①浅黄橙色 (7.5YR 8/3)　②淡黄色 (2.5Y 8/4)	良　好	良　好	底部1/6破片
244	甕	②(5.6)	①にぶい褐色 (7.5YR 5/4)　②灰褐色 (5YR 4/2)	精　良	精　良	底部1/3破片
245	甕	②(5.5)	①灰赤色 (2.5YR 5/2)　②褐灰色 (10YR 5/1)	良　好	良　好	底部片
246	甕		淡　黄　色 (2.5Y 8/3)	不　良	不　良	鉢か
247	高坏		浅黄橙色 (10YR 8/3)	良　好	不　良	土師器
248	鉢	②(3.0)	浅　黄　色 (2.5Y 8/3)	精　良	やや不良	土師器
249	蓋	①(12.2)	青　灰　色 (5BG 6/1)	良　好	良　好	須恵器
250	擂鉢		暗　灰　色 (N 3/0)	良　好	やや不良	瓦質土器
253	壺		褐　灰　色 (7.5YR 4/1)	良　好	良　好	
254	甕	①(20.0)	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	精　良	精　良	

253は口縁部が下垂する壺形土器で、口縁部平坦面に刷毛目原体によるやや乱れた鋸歯文を施文する。口縁部内外面横ナデ、内面ナデ、外面繊細な縦刷毛目仕上げ。254はいわゆる山陰系の複合口縁をもつ甕で、頸部が屈曲し、さらに外上方へわずかに外彎しながら大きく開く口縁部をもつ。口縁部、頸部内外面横ナデ、胴部外面繊細な斜め方向の刷毛目、内面ヘラ削り。在地の土器と胎土が異なり、搬入品の可能性がある。

255は厚さ0.8㎝を測る薄手の石鎌で、刃・基部を欠損する。刃部の彎曲は極めて小さく、正裏両面からの粗い調整剝離によって刃部を造出する。背部は主に裏面からの粗い剝離によって素材を変形させている。正裏両面中央部は素材面をそのまま残している。緑色片岩製。重量38ｇ。

〔２〕小結

昭和57年度の調査で検出した遺構は、上述のように竪穴住居跡７棟、土壙33基、溝３条柱穴多数である。竪穴住居跡の内訳は弥生時代中期前半～中頃１棟、中期後半２棟、後期後半～古墳時代初頭頃の３棟、および中期のものと思われるもの１棟である。

中期のものはいずれも平面形態円形で、主柱は前半～中頃のものには８本、後半のものには６～７本が配置されているものと考えられる。

中期前半～中頃の第４号住居跡は８本の主柱を有し、床面積は推定約50㎡と大形である。山口盆地内では西遺跡[5]、堂道遺跡[6]、朝田墳墓群第Ⅱおよび第Ⅲ地区[7]で弥生時代の竪穴住居が検出されている。西遺跡では前期末～中期初頭の円形プランをもつ第17号住居跡の床面積は約10.7㎡で、主柱６本が不規則に配置されている。中期前半のものには朝田墳墓群第Ⅱ地区[8]、第４、５号竪穴住居跡がある。いずれも平面形態は円形で、４号住居跡は８本の主柱をもち床面積推定20.4㎡、５号住居跡は７本の主柱をもち床面積推定47.2㎡で、中期前半の段階で住居規模の大形化が進行している。遺跡保存地区第４号住居跡も盆地内各住居跡同様、中期前半～中頃にかけて大形化する住居の一形態と考えられる。

中期後半の住居規模は、第１号住居跡が床面積19.0㎡、第２号住居跡が53.8㎡である。主柱間床面積[9]は、前者が10.6㎡、後者が19.9㎡で、床面積に占める割合は前者55.8％、後者57.2％と住居規模は異なるが、ほぼ同じ主柱間床面積を有している。考察で述べるが、佐波川流域に分布する中期後半の防府市井上山[10]、下右田[11]、奥正権寺Ⅰ[12]の各遺跡ではこの比率が40％以下の住居が大半で、遺跡保存地区で検出された各住居の主柱が同時期の他遺跡の住居に比べより周壁に近く存在していることを示している。

山口盆地内では他に中期後半の住居の検出例はないが、後期前半では西遺跡第16号住居跡で床面積15.4㎡、堂道遺跡で床面積15㎡の住居がある。また、後期末では朝田墳墓群第Ⅱ地区第1号住居跡の12㎡から第10号住居跡の21.5㎡までくらいの床面積をもつ一群と、西遺跡第14号住居跡のように床面積36㎡の大形の一群とがある。中期後半にピークに達する床面積規模の大形化した住居の一群は、西遺跡、堂道遺跡にみられるように、方形住居が出現する後期前半以降はやや規模を減じつつも、10～20㎡前後の床面積規模の一定した一群とは規模を異にする住居として、後期末まで営まれていたことが窺われる。

炉跡は遺跡保存地区では住居に付設された一般的な施設で、第1・2・3号住居跡では床面ほぼ中央、第7号住居跡では中央を外れ周壁に近い位置に営まれている。山口盆地内では西、堂道、朝田墳墓群第Ⅱ地区の各遺跡で後期前半までは炉が住居床面に造出されており、また、遺跡保存地区第2号住居跡床面で作業台と考えられる台石が出土していることから、盆地内では集落内での日常生活的な生産、消費は各住居単位で行なわれていたとみることもできる。しかし、中期後半を主体とする井上山遺跡、前期末～後期末の阿東町突抜遺跡[13]では、住居内に炉が認められず、野外炊飯を行なう生活共同体としての単位集団の存在が想定されている。

いずれにしても、昭和57年度の調査分だけでは遺跡保存地区で検出されている21棟の住居の1／3にしかすぎず、遺跡保存地区集落全体の構造さらには山口盆地内の各集落との対比は、今後の整理、類例の増加を待って言及することにしたい。

土壙は弥生時代中期前半から古墳時代前期にかけてのもの33基が検出された。その内訳は中期前半～中頃4基、中期後半7基、後期前半4基、後期後半2基、後期終末（庄内併行期）3基のほか、中期5基、不明5基である。各時期とも平面形態長楕円形に近いものが多いが、基本的に不整形である。規則的な分布状況は示しておらず、住居跡との関係については十分な資料に乏しい。しかし、調査区北半部に集中する傾向があり、特に、後期終末の土壙は住居跡も含めて調査区北端部および西端部に集中分布している。昭和58年度に実施したラグビー場防球ネット設置に伴う調査[14]でこの時期の方形竪穴住居1棟が検出されていることからも、調査区外北・西方にもこの時期の遺構が埋存している可能性が十分に考えられる。また、同一時期の他の遺構との切り合いは少なく、わずかに中期後半の第1号住居跡と第4号土壙、中期前半の第3号溝と第7号土壙、後期終末の第5号住居跡と第15号土壙が切り合う程度である。

溝は弥生時代中期中葉1条、古墳時代前期（4C後半）1条および弥生時代中期と思わ

れるもの１条の計３条を検出した。溝底レベルから判断すると、前二者は調査区東端部を南東から北西に、後者は調査区西端部を南から北に貫流していたものと考えられる。第１・３号溝とも南端部付近で南ないしは南西方向に流路を変えており、旧地形に対応した掘削の結果かもしれない。

出土遺物には弥生時代中期後半～後期前半を中心とした多量の土器・石器がある。特に、第３号土壙からは後期前半の大量の土器が出土した。甕形土器には短く緩やかに外反する口縁部をもち、わずかに肥厚させた端部外面にヘラによる凹線風の沈線を刻むものがあるが、量的に多くはなく、胴のほとんど張らない「く」の字状のやや長めの口縁部をもつものが大半を占める。逆「Ｌ」字形に強く屈曲する口縁部をもつものも若干ではあるが共伴する。壺形土器は少ないが大きく開く口縁部をもち、肥厚させた端部外面に凹線風の沈線を１条刻むものがある。また、頸部外面に扁平な幅広の粘土帯を貼付し、ヘラによる沈線を刻んで数条の突帯風に仕上げるものもある。底部は窪み底ないしはやや上げ底のものと不安定な平底のものとがあるが、前者の方が優位を占める。また、やや発達した複合口縁をもつ壺形土器も共伴しており、第３号土壙出土土器にはやや時期幅があるものと考えられる。第９号土壙からは口縁部を斜上下両方に拡張させ、口縁端部外面に幅広の施文帯を有する壺形土器があり、円形浮文を貼付している。共伴する甕形土器は後期前半の特徴をもっており、前半でも比較的古い様相を示すものと考えられる。

土器以外の出土遺物には碧玉製管玉、砥石、台石（作業台）が、中期後半の第２号住居跡から出土している。先述したように、この住居は同時期併存したと思われる第１号住居跡に比べ床面積約54㎡と規模の点での大形化を指摘しうる。また、第１・２号住居跡とも炉を造出しており、共同炊飯を行なった形跡は乏しく、消費面からは各住居単位での作業が行なわれたことを暗示している。なお、遺構には伴わないが石製・土製の各紡錘車のほか、緑泥石英片岩製の石鎌が出土しており、石庖丁が出土していないことが注目される。

以上のように、昭和57年度の調査によって遺跡保存地区の集落は高地性集落として位置づけられる朝田墳墓群第Ⅱ地区での中期後半～後期末の集落を除けば、県内でも有数の低地に立地する弥生時代中期後半から後期前半を中心とする集落であることが明らかになった。しかし竪穴住居跡は第２次調査以降の対象となる遺跡保存地区南側部分を中心とした範囲でも確認されていることから、時期的な竪穴住居跡・集落の分布、構造の変遷については稿を改めて述べることにしたい。なお、調査にあたっては人文学部考古学研究室の多大な援助を受けた。記して謝意を表します。

4　考　　察　―弥生時代竪穴住居跡の各属性について

はじめに

近年の相次ぐ諸開発は衰えを見せず、しかもいまだ規模・件数とも増加の一途をたどっている。こうした状況は県下においても例外ではなく、大規模開発の洗礼を受け多数の遺跡が調査されている。それに伴い弥生時代の集落遺跡の調査資料も蓄積され、県下で竪穴住居跡が検出された遺跡数も約50遺跡を数え、その棟数も約 220棟にのぼる。集落の立地は低地、台地および低丘陵上に営まれるもののほか、弥生時代社会の生産活動のなかで大きなウエイトを占める水田耕作や日常生活に不適な沿岸部や丘陵尾根上、山腹あるいは山頂などの高所に立地する北迫、井上山、岡山、岡原の各遺跡のような、いわゆる高地性集落（高地性遺跡）など、幾つかの類型に区分することができる。また、これらのなかには防御的施設あるいは居住区画などの機能をもつと考えられている環濠を巡らす例もあり、集落構造の要素は極めて多岐にわたっている。

小稿の目的は、弥生時代における社会の構造要素と不可分な集落類型を抽出するにあたって、その一つの手段として、大きく九つの水系単位に所在する県内の竪穴住居を概観し、その構造的属性と考えられる平面形態・主柱穴数・床面積および主柱間床面積等から、各水系単位における住居構造の時期的変遷についての問題点を整理することにある。

作業を進めるにあたって、各河川流域に分布する集落遺跡のうち、上記の竪穴住居の各属性が比較的良好な状態で検出された遺跡を中心に抽出した。すなわち、綾羅木川流域では伊倉遺跡、石原遺跡、掛淵川流域では高畑遺跡、木屋川流域では上原遺跡、坂ノ上遺跡、椹野川流域では吉田遺跡、西遺跡、堂道遺跡および朝田墳墓群、佐波川流域では右田・一丁田遺跡、下右田遺跡、大崎遺跡、奥正権寺遺跡および井上山遺跡、末武川流域では宮原遺跡、御屋敷山遺跡、島田川流域では追迫遺跡、岡山遺跡、天王遺跡、岡原遺跡に加えて熊毛半島の吹越遺跡、松尾遺跡、阿武川流域では坂手沖尻遺跡、突抜遺跡、馬場遺跡、宮ヶ久保遺跡である。なお、このうち井上山遺跡、吹越遺跡および松尾遺跡などはいずれも時間的、空間的にみて近接する各河川流域の集落と密接なかかわりあいをもっていたことが予想されるため、あえて各流域区分内に集約した。

各流域の集落遺跡

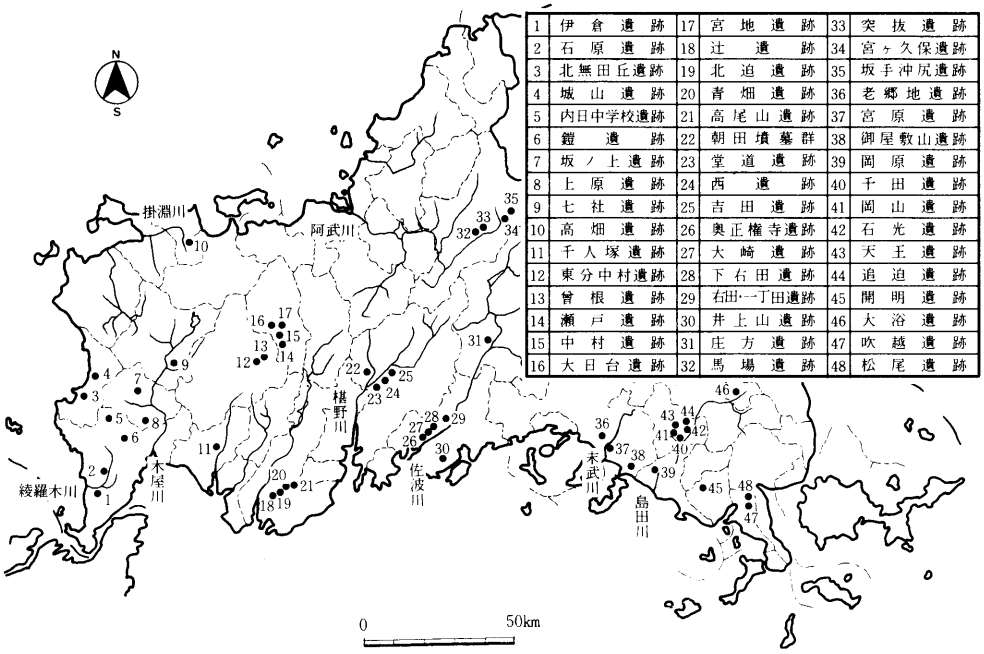
①綾羅木川流域

下関市伊倉遺跡は綾羅木川左岸に位置し、標高約 139mの火の見山から北へ派生する標高約15mの低丘陵上に立地する。前面には綾羅木川によって形成された沖積低地を臨み、遺跡は低丘陵との傾斜変換点付近に所在する。過去2回の調査が実施されており、遺跡のひろがりは現在の伊倉集落を包括する範囲に及ぶものと考えられている。1970年の調査[15]では、後期前半1棟、後半～終末4棟の竪穴住居跡に加え、中期前半を主体とする約70基の袋状竪穴が検出されている。また、1980年の調査[16]は前回調査地点の東方約 500mで行なわれ、前期末～中期初頭の袋状竪穴13基が検出されている。綾羅木川流域にはこのほか前期末～中期初頭の袋状竪穴 900基以上が検出された綾羅木郷遺跡[17]をはじめ、細形銅剣・多紐細文鏡が出土した梶栗浜遺跡[18]などの前～中期を主体とする集落跡、埋葬跡が知られているが、当該期の竪穴住居跡の検出例はない。

下関市石原遺跡は伊倉遺跡の北東約 1.5km、綾羅木川右岸の標高約11mの低丘陵上に立地する後期末の集落跡である。竪穴住居跡14棟が検出されているが[19]、後世の削平によって壁溝のみが残存しているものが多い。

②掛淵川流域

県内北～北西部の沿岸地域では弥生時代の集落遺跡の調査例が乏しく、その実態はいまだ不明瞭な点が多い。大津郡日置町高畑遺跡はそのうちの数少ない当該期の集落遺跡で、



1	伊倉遺跡	17	宮地遺跡	33	突抜遺跡		
2	石原遺跡	18	辻遺跡	34	宮ヶ久保遺跡		
3	北無田丘遺跡	19	北迫遺跡	35	坂手沖尻遺跡		
4	城山遺跡	20	青畑遺跡	36	老郷地遺跡		
5	内日中学校遺跡	21	高尾山遺跡	37	宮原遺跡		
6	鎧遺跡	22	朝田墳墓群	38	御屋敷山遺跡		
7	坂ノ上遺跡	23	堂道遺跡	39	岡原遺跡		
8	上原遺跡	24	西遺跡	40	千田遺跡		
9	七社遺跡	25	吉田遺跡	41	岡山遺跡		
10	高畑遺跡	26	奥正権寺遺跡	42	石光遺跡		
11	千人塚遺跡	27	大崎遺跡	43	天王遺跡		
12	東分中村遺跡	28	下右田遺跡	44	追迫遺跡		
13	曽根遺跡	29	右田一丁田遺跡	45	開明遺跡		
14	瀬戸遺跡	30	井上山遺跡	46	大浴遺跡		
15	中村遺跡	31	庄方遺跡	47	吹越遺跡		
16	大日台遺跡	32	馬場遺跡	48	松尾遺跡		

Fig. 88　主な弥生時代の竪穴住居跡検出遺跡分布図

掛淵川の形成した日置平野の南部に位置し、標高約60m、周囲の扇状地との比高約5mの河岸段丘状の台地縁辺部に立地する。弥生時代の竪穴住居跡は切り合い関係が著しく、中期後半1棟、後期末～古墳時代初頭6棟、不明3棟の計10棟が検出された[20]。後世の削平により周壁が消失し、壁溝のみが残存しているものが多い。なお、後期末のDW1からはガラス小玉2点とともに青銅器片が出土している。

③木屋川流域

上原、坂ノ上両遺跡とも、田部盆地を開析する木屋川右岸に所在する。豊浦郡菊川町上原遺跡は田部盆地の南東端、標高約33mの洪積台地上に立地し、周囲の沖積低地との比高は約19mである。前期後半～末の竪穴住居跡4棟が検出されており、調査区内には同時期の貯蔵穴57基のほか貯蔵穴群を囲繞するかのように溝が巡っている[21]。同坂ノ上遺跡は上原遺跡の北東約2km、標高約20m、低地との比高約3mの洪積扇状地に立地する前期末～中期初頭の集落跡で、土壙・溝とともに2棟の竪穴住居跡が検出されている[22]。

④椹野川流域

標高約12.5mの沖積低地上に立地する山口市西遺跡では前期末～中期初頭1棟、後期末および後期に属すると思われるもの各1棟の竪穴住居跡のほか、前期末～中期前半の土壙30基が検出されている[23]。西遺跡同様、椹野川左岸に位置する山口市堂道遺跡は標高約23mの洪積扇状地に立地しており、後期前半の竪穴住居跡1棟が検出されている[24]。また、椹野川右岸の標高約40～45m、周囲の沖積低地との比高約30mの丘陵頂部から斜面にかけて立地する山口市朝田墳墓群では第Ⅱ地区および第Ⅲ地区で集落跡が検出されている[25]。第Ⅱ地区では計11棟の竪穴住居跡が検出されたが、これらは丘陵斜面をL字状にカットしたのち下位を埋め立てて床面を造出するもので、その内訳は中期前半～中頃2棟、後期末7棟および後期末と考えられるもの3棟である。また、南西斜面には標高約40mの等高線に沿って幅約2～3m、深さ約1～1.5mの中期前半～中頃の溝が巡っており、内部に同時期の住居跡2棟および貯蔵用竪穴20基が分布している。さらに第Ⅱ地区の北約250mの丘陵上に立地する第Ⅲ地区では後期の竪穴住居跡1棟が検出されている。

⑤佐波川流域

佐波川右岸、標高約12mの沖積低地に立地する防府市右田・一丁田遺跡では、中期前半と中期後半各1棟、後期前半2棟、後期後半～末10棟および時期不明のもの2棟の計16棟の竪穴住居跡が検出されている[26]。また、中期後半の土壙や後期の溝も検出されているが竪穴住居跡との関連は不明瞭である。右田・一丁田遺跡の南西約300mに位置する防府市下

右田遺跡では1976年から4次にわたる調査が実施されており、遺跡の東端部を中心に弥生時代の集落遺構が分布している。[27] 竪穴住居跡は標高約10mの沖積台地上に営まれており、第1次調査で中期後半1棟、第3次調査で中期後半～後期前半4棟とともに土壙、溝が検出されている。下右田遺跡の西約2km、標高約20～25mの洪積台地上に立地する防府市奥正権寺遺跡では中期後半の竪穴住居跡2棟のほか、同時期の土壙、溝が検出されている。[28] また、奥正権寺遺跡の南東に近接した標高約60～70m、南に開けた水田面との比高約55mの丘陵頂部には大崎遺跡が所在する。中期後半の竪穴住居跡5棟、袋状竪穴、溝が検出されており、丘陵北～南の斜面上に幅約1～3m、深さ0.5～1mの溝が巡り、環濠内外に竪穴住居跡と土壙が検出されている。[29] 環濠出土土器と環濠内に営まれた数基の袋状竪穴からの出土土器とに接合関係が認められるものがあり、同時期性が指摘できる。竪穴住居跡は環濠内に2棟、環濠外に3棟検出されているが、環濠内の住居は袋状竪穴を切って営まれており、中期後半でも袋状竪穴群よりやや新しい。しかし、環濠外のSB1～3周辺にも袋状竪穴群が大きく2グループ認められており、各グループのうちの数基から炭化材が出土している。SB2が火災住居であることを考えると、SB2が焼失した時点で数基の袋状竪穴が開口していた可能性が考えられ、環濠外の袋状竪穴と住居跡との同時併存の可能性がある。

防府市井上山遺跡は佐波川左岸、標高約57m、周囲の沖積低地との比高約50mの独立丘陵上に立地し、丘頂部を中心にA・B両地区で調査が行なわれている。[30] A地区では少なくとも中期後半1棟、B地区では中期後半9棟、後期後半2棟の竪穴住居跡が検出されている。B地区の中期後半の竪穴住居跡はその切り合い関係から4～5棟の同時併存が想定されており、6基検出された中期後半の土壙との時期的関係、配置状況から各土壙が住居に個別に付属していたものと考えられている。また、7点の鉄器をはじめ、外来要素の強い遺物も出土しており、当集落構成員の傑出した主体的側面を窺わせる。

⑥末武川流域

標高約40～50mの洪積台地上に立地する下松市宮原遺跡では、前期後半1棟、後期末7棟の住居跡が検出されている。[31] また、調査区内で弧状に巡る前期後半～末の環濠が2条検出されており、南半部のみが検出された第Ⅰ環濠内には袋状竪穴、北半部のみ検出された第Ⅱ環濠では竪穴住居跡1棟が認められる。したがって、前期後半～末では環濠内の標高上位に住居、下位に袋状竪穴群の存在が想定される。標高約62mの丘陵上に立地する下松市御屋敷山遺跡からは鉄鏃の出土した後期終末の竪穴住居跡1棟が調査されている。[32]

⑦島田川流域

熊毛郡熊毛町岡山遺跡は標高約54m、比高約35mの丘陵頂部～斜面に立地する。幅約2.5m、深さ約1.2mの中期後半の環濠内に同時期の竪穴住居跡1棟および袋状竪穴が検出されている。また、鉄鏃1点を出土した後期終末の竪穴住居跡1棟も調査されている。[33] 標高約48mの舌状台地に立地する同天王遺跡でも幅6m、深さ3mの環濠内に同時期の少なくとも2棟の竪穴住居跡および袋状竪穴が分布する。また、後期終末の竪穴住居跡も丘頂部を中心に分布しており、同時期の箱式石棺、甕棺墓も存在する。[34] 標高約38m、比高約20mの洪積台地上に立地する光市岡原遺跡では中期後半と後期後半の住居跡計10棟が知られており、岡山・天王両遺跡同様、周囲には幅2m、深さ約1.8mの環濠が巡っている。[35]

吹越・松尾両遺跡は熊毛半島の基部に位置する。熊毛郡平生町吹越遺跡は標高約286m、周囲の山麓からの比高約280mの山稜線上に営まれた後期終末の集落跡で、竪穴住居跡9棟が検出され、うち4棟が調査されている。鉄鏃等の鉄製品の出土量の多さが注目されている。[36] 同松尾遺跡は標高約17mの台地南斜面に立地し、後期後葉～末の竪穴住居跡3棟が調査され、29点にもおよぶ鏃や刀子などの鉄器のほかガラス小玉が出土している。[37]

⑧阿武川流域

徳佐盆地の中央部、標高約300mの洪積台地上に立地する阿武郡阿東町坂手沖尻遺跡では中期後半の竪穴住居跡1棟、[38] 坂手沖尻遺跡の西約300mに所在する同宮ヶ久保遺跡では二重に巡る環濠内に中期中葉を主体とする竪穴住居跡7棟、建物跡が検出されている。[39] 宮ヶ久保遺跡では竪穴住居跡に切り合いがあり、少なくとも中期中葉の二時期の集落が想定される。環濠からは土器、石器に加えて木工具、食器、什器、調理容器、祭祀道具、紡織具、建築部材などの大量の木製品が出土し注目された。また、宮ヶ久保遺跡の南西約8kmの地福(ぢふく)盆地の湖岸段丘上には同突抜、馬場両遺跡が所在し、前期末～中期初頭3棟、中期前半7棟、中期後半1棟、後期前半2棟、後期後半13棟の竪穴住居跡が溝、土壙とともに検出されている。[40]

以上、各河川流域単位での代表的な竪穴住居跡を概観した。以下では、各河川流域単位で竪穴住居の属性と考えられる平面形態・柱穴数・床面積の時期的変遷を検討する。

竪穴住居の各属性

1）平面形態

前期の様相は資料数が乏しく十分とは言えない。しかし、[41] ③坂ノ上遺跡では隅丸方形の

時期		綾羅木川流域	掛淵川流域	木屋川流域	椹野川流域	佐波川流域	末武川流域	島田川流域	阿武川流域
後期	後半	[17]	③ [3]		③ [6]	⑤ [6]	⑤ [3]	③ [1]	⑨ [4]
	前半	①			① [2]	③ [1]		①	① [1]
中期	後半		(①)		[1]	⑮ [3]		[1]	②
	前半				②	①			④
前期	後半			④ ([2])	①				③
	前半								

Fig. 89　竪穴住居の平面形態（○円形　□方形　数値は棟数）

住居跡が検出されており、前期末と考えられている。③上原遺跡では前期後半～末の住居跡はすべて円形で、この時期に方→円の平面形態変化の第一の画期が考えられる。円形の平面形態は④西遺跡、朝田墳墓群第Ⅱ地区、⑤右田・一丁田遺跡など中期後半までの固定的な平面形態となっている。

しかし、中期後半は平面形態変化の第二の画期にあたり、④吉田遺跡、⑤大崎遺跡、⑦岡山遺跡および宇部市北迫遺跡では隅丸方形のプランをもつ住居が出現する。佐波川流域では円形住居15棟に対し方形住居は３棟のみで、棟数的に円形住居が優勢を占めている。椹野川・島田川流域では円形住居の調査例はないが、同様の状況であったものと考えられる。これに対し阿武川流域は保守的で、この段階では方形住居は出現しておらず、他河川流域で方形住居が主体を占める後期後半～末においてもなお円形住居が優位を占めている。しかし、後期後半～末の隅丸方形の住居のなかには一辺が胴張りとなるもの（突抜遺跡ＤＷ15）や上面プランが八角形に近い円形で床面が方形のプランをもつもの（突抜遺跡ＤＷ11）など、円形から方形への過渡的な形状をもつものがある。こうした方形に近い胴張りのプランをもつものは後期前半の右田・一丁田遺跡第６号住居跡、後期末の同遺跡第３・20号住居跡でみられ、床面内部をさらに方形に掘り下げる宮原遺跡１号住居跡（後期

末）とともに過渡形態と考えられる。この傾向は末武川・島田川流域でも認められ、内陸部および東部地域で顕著である。一方、綾羅木川流域の石原遺跡、伊倉遺跡では後期後半の竪穴住居はすべて方形へ変化しており、掛淵川・椹野川・佐波川流域を含めた西部地域沿岸部において円形住居が優位を占めるのと対照的である。

2）床面積・柱穴数

前期末～中期初頭の竪穴住居は木屋川・椹野川・阿武川流域で検出されており、床面積が10m²ないしはそれ以下のもの[42]と5～6本の主柱穴をもつ20～30m²のものとの、規模の異なる二種の住居が営まれる。後述するように、10m²前後あるいはそれ以下の床面積をもつ竪

主柱穴数＼河川流域	木屋川流域	椹野川流域	阿武川流域	椹野川流域	佐波川流域	阿武川流域	椹野川流域	佐波川流域	島田川流域	阿武川流域	綾羅木川流域	椹野川流域	佐波川流域	島田川流域	阿武川流域	綾羅木川流域	掛淵川流域	椹野川流域	佐波川流域	末武川流域	島田川流域	阿武川流域
9								②												① [1]		
8				①											①		①					
7				①		①				①							①	②			①	
6	①	①						②												①	①	
5	①		①			②		⑤													①	
4								④		①		[1]	① [1]		[1]	[6]	① [1]	① [3]	[4]	①		⑨ [2]
3																						
2					①		[1]	①				①				[2]		[2]	[1]	[1]		[1]
1	①																					
0本			①																[1]			
時期	前期末（一部中期初頭含む）			中期前半			中期後半				後期前半					後期後半～終末						

Fig. 90　竪穴住居の主柱数（○円形　□方形　数値は棟数）

穴住居はその後も少数ながら連綿と営まれ、不規則に配置された０～２本の主柱をもち、床面積は７㎡が最小規模となっている。従来の居住最大人口算出法（総面積／３－１）では可住人口は1.3人となり、通常の家族共同体としての機能を持ちえない世帯となる。

こうした超小型の住居が営まれた背景には次のようなことが考えられる。まず、住居構造からは1)住居外周囲の空間をも床面とし、一定の床面積を確保したのち上屋を支えるにたる主柱を住居外の空間に配置する場合、2)本来はベッド状遺構的に床面と異なる一段高い平坦面を有していて、後世の削平により平坦面が消失した場合である。1)は現在超小型の住居外空間に柱穴が確認された事例がなく、検証が不可能である。また、2)は周辺地域で先進的にベッド状の遺構が造出される九州でも中期後半以降のことであり、前期末～

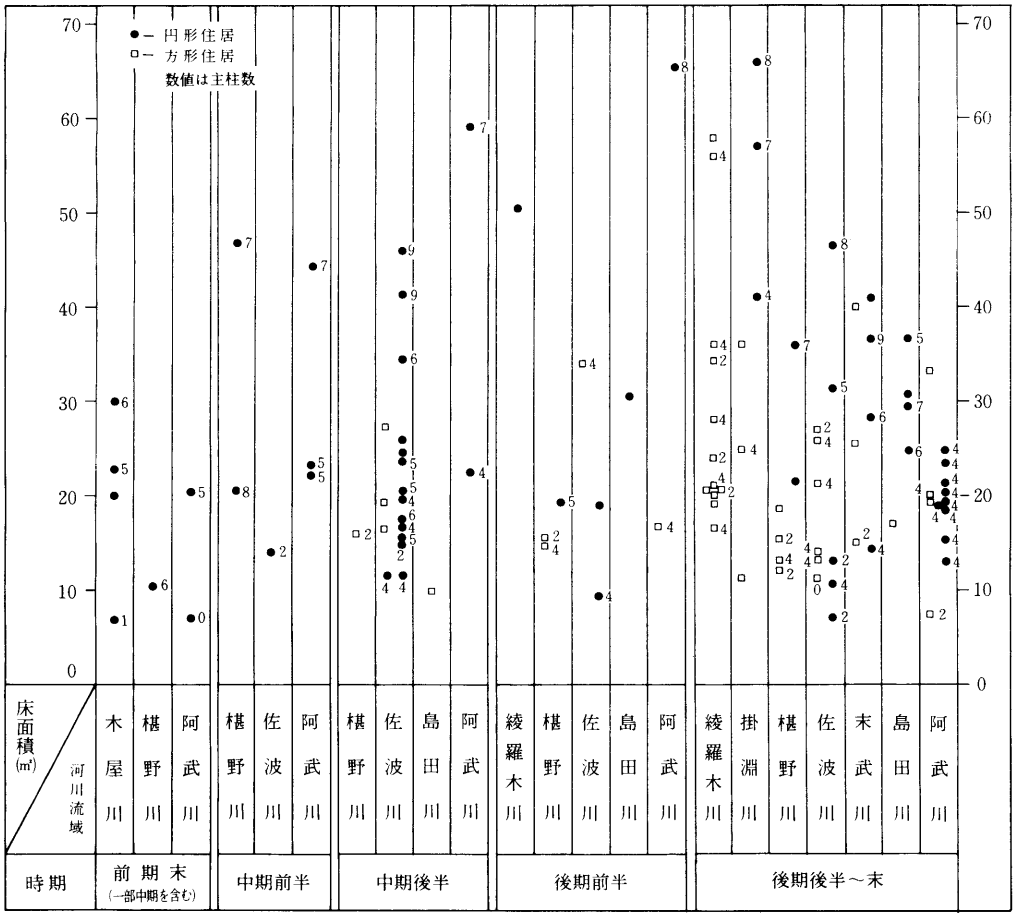


Fig. 91　竪穴住居の床面積

中期初頭との時期的ヒアタスは大きい。

また、機能的側面からは、床面積11～13㎡とやや規模は異なるが、右田・一丁田遺跡第3・4・11号住居跡のように床面に作業台をもつものがあり、工房的住居の存在を想起させる。通常の規模をもつ各住居内でもこうした作業は行なわれたであろうが、広島県横路遺跡[43]では前期の土壙から多量のめのう剝片とともに台石が据えられた状態で出土し、小型の打製石器製作跡と考えられている。また、製作跡を取り囲むように上屋を想起させる1間×1間の建物跡が検出されている。北九州市原遺跡[44]でも土壙内における石器製作が想定されているが、超小型の住居跡を土壙内での製作作業のより普遍・定形化した作業跡として位置づけることも可能である。

中期後半以降は椹野川・佐波川・阿武川流域で床面積規模の変遷を追うことができる。中期前半には、三河川流域とも前期末～中期初頭の規模を継承した約20㎡前後の住居跡に加えて約45㎡前後と大形化した規模のものが出現する。椹野川流域では方形プランをもつ住居も出現する。中期後半ごろまでが大形化のピークと考えられ、それ以後、方形住居は10～20㎡、円形住居も20～35㎡前後と規模が固定化する。しかし、阿武川流域は異なり、後期前半に椹野川・佐波川流域同様方形プランの住居跡が出現するにあたって規模の大形化は収束し、後期後半では20㎡前後と規格化する。佐波川流域は椹野川流域より一時期遅れており、円形・方形両住居の混在する中期後半に大形化のピークがあてられ、各流域での方形住居の出現による円形住居の規模縮小傾向とは逆に、円形住居床面積が25㎡以下となる中期後半～後期後半の円形住居のなかには、やや突出した規模を持つものが存在する。佐波川流域では後期前半の資料に乏しく、大形化のピークは指摘できないため、この傾向は集落構成員間の主体的な力量関係による住居規模の相違として捉えておきたい。

掛淵川流域では、大形化のピークは平面形態変化の保守性と呼応して方形・円形の混在する後期後半～末以後にみられる。主柱の本数も住居の大形化に伴って増加する傾向が窺われ、したがって大型化のピーク時が最多となる。各流域とも円形住居は最多時で7～9本前後、円形・方形住居の混在する段階で円形が4～5本、方形が2ないし4本である。

住居規模の大形化はそれに伴う覆屋に対する構造力学的配慮がなされたはずで、必然的に構造材の大形化や、主柱数の増加あるいは棟持柱、支柱の新設を伴うことは容易に推定できる。また、それに伴い居住空間のより機能的な分化、ひとつには主柱に囲繞された床面空間とそれ以外の床面空間との意識的な空間分化が進展したものと考えられる。

そこで県内で検出される竪穴住居において、床面積および主柱配置から住居内において

主柱間に囲繞された床面空間が床面積全体に占める割合を算出してみた。

円形住居の場合、30㎡以下の床面積をもつ各時期の住居については、柱間に囲繞された床面積は全床面積の45％ないしはそれ以下のものが大半で、４～５本の主柱をもつ中期後半の佐波川流域の住居においては特に顕著である。しかし、35㎡を超える床面積をもつ住居では、７～９本という主柱の増加とあいまってこの割合が45％を超え、後期後半では末武川流域の宮原遺跡で79.5％となり、主柱が周壁に近く配置されたことを示している。これらの大形住居には床面に主柱穴とは別に炉あるいは中央穴の周囲に２ないしは４本の支

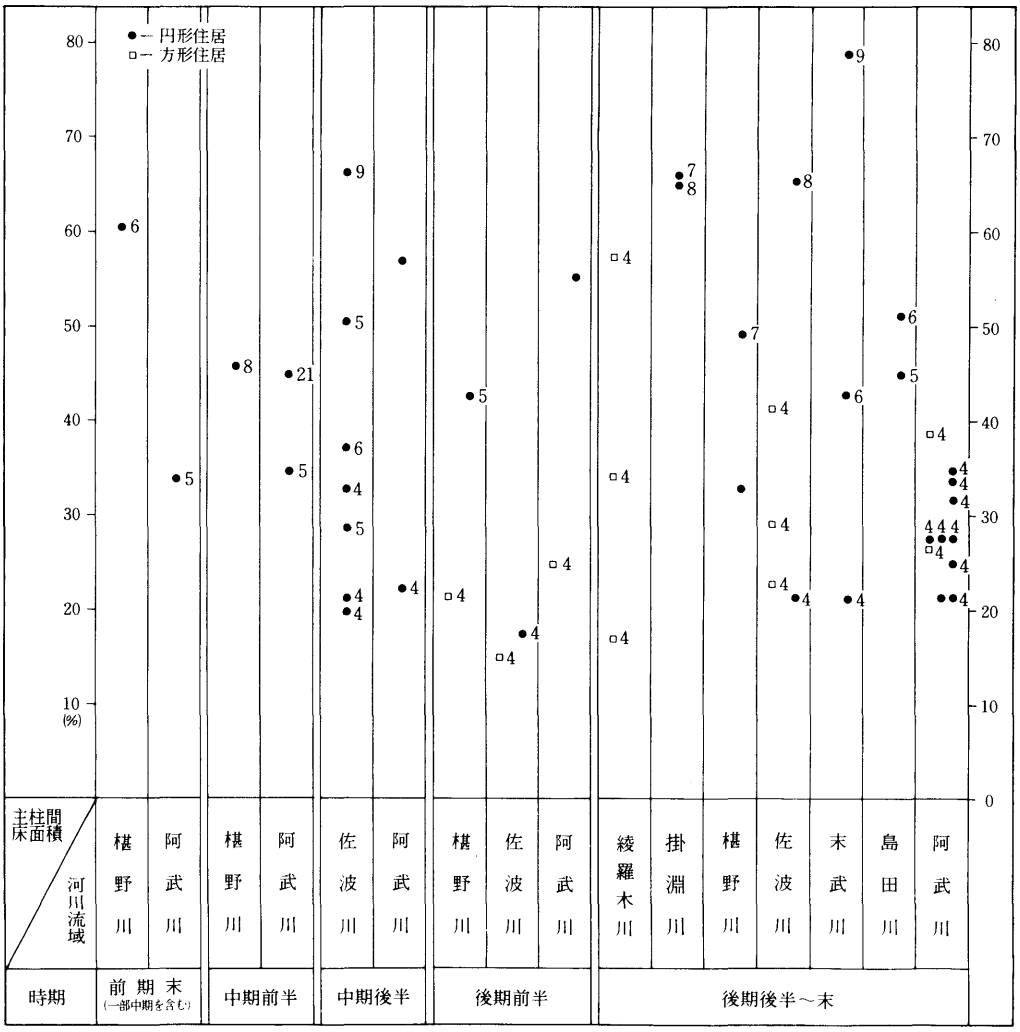


Fig. 92　床面積に占める主柱間床面積（１）（数値は主柱数）

柱穴が検出される傾向にある。したがって、床面積約35㎡以上、主柱間に囲繞された床面積が床面積全体に占める割合が約50％を超えるような場合について、主柱とは別の支柱(棟持柱)を床面に配置する傾向にあることを示唆している。

方形住居の場合後期の資料ではあるが床面積35㎡以下のものがすべてで、この割合は20～40％が一般的である。また円形住居のうち中期末から後期にかけては主柱間に囲繞された床面積は35㎡のものと20㎡のものとがあり、これは方形竪穴住居のうちの大形・小形の各グループの床面積全体に対応している。したがって、大形円形住居の主柱間に囲繞された床面積は方形住居の全床面積に対応していることになり、円形住居においては方形住居では確保できない空間利用の方法が採用されている。

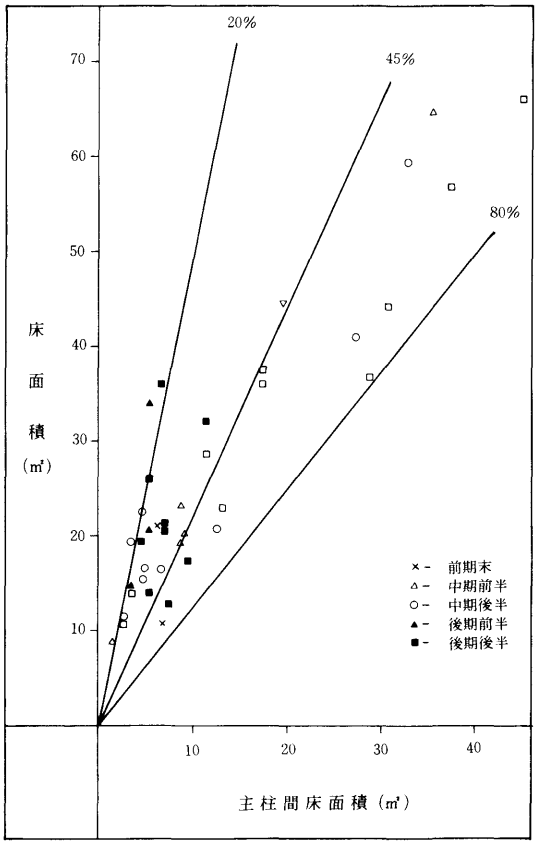


Fig. 93　床面積に占める主柱間床面積（2）

おわりに

県内における弥生時代前期末～後期の竪穴住居を、平面形態・床面積・柱穴数による構造的側面からその特質を概観した。しかし、炉・壁溝の有無、ベッド状遺構の出現時期とその機能など、他にも竪穴住居の属性と考えられる要素があり、床面空間利用法とあいまって、住居構造による集落内での世帯の位置づけ、各集落相互の結びつきも検討する必要があろう。

なお、小論は昭和61年度文部省科学研究補助金（一般研究Ｃ）「防長における律令国家成立以前の集落構造の変遷と推移に関する研究」の研究成果の一部を含んでいる。

Tab. 9　県内の主な弥生時代竪穴住居跡検出遺跡地名表

（　）は推定時期および復原値

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模（cm） 長軸	短軸	深さ	床面積（m²）	主柱間床面積（m²）	主柱間床面積／床面積（%）	柱穴数	壁溝	炉 位置	出土遺物	備考	文献
伊倉遺跡	D区 2号住居跡	後	円	(790)		10	(47.0)			(4)	×	○ 中央		3号住居跡に切られる	1
	3号住居跡	後・前半	円	(800)		40	(50.6)			?	×	?	甕・壺		
	E区 9号住居跡	後・後半	隅丸方	635	450＋α	15	(34.1)			2	○	×	甕・壺	10号住居跡に切られる	
	10号住居跡	後・後半～末	隅丸方	470	110＋α	10	(20.9)			(2)	○	×		11号住居跡に切られる	
	11号住居跡	後・末	隅丸方	430	370＋α	35	(20.5)	6.98	34.0	4	○	×	鉢・高坏・石庖丁		
石原遺跡	B地区 第1号住居跡	(後・末)	隅丸長方	620	465	18	36	6.16	17.1	4	○	－	甕・鉢・石庖丁	中央穴・ベッド状遺構	2
	C地区 第1号住居跡	(後・末)	方	500＋α	430＋α	0	21＋α			2	○	－		壁溝のみ	
	第2号住居跡	(後・末)	方	470	280＋α	0	21＋α			2 or 4	○	－		壁溝のみ	
	第3号住居跡	(後・末)	方	510	320＋α	0	20＋α			2 or 4	○	－		壁溝のみ	
	第4号住居跡	(後・末)	方	340＋α	210＋α	0	?			?	○	－		壁溝のみ	
	第5号住居跡	(後・末)	方	560	140＋α	0	21＋α			?	○	－		壁溝のみ	
	第6号住居跡	(後・末)	方	430	200＋α	0	(16.9)	9.22	57.8	(4)	○	－		壁溝のみ	
	第7号住居跡	(後・末)	方	340＋α	?	0	?			(2)	○	－		壁溝のみ	
	第8号住居跡	(後・末)	方	500	320＋α	0	24＋α			(2)	○	○ 中央		壁溝のみ	
	第9号住居跡	後・末	方	240＋α	120＋α	0	?			?	○	－	甕	壁溝のみ	
	D地区 第1号住居跡	(後・末)	方	280＋α	270＋α	0	?			(4)	×	－	甕		

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	床面積(㎡)	主柱間床面積(㎡)	主柱間床面積/床面積(%)	柱穴数	壁溝	炉 位置	出土遺物	備考	文献
石原遺跡	D地区 第2号住居跡	(後・末)	方	565	280+α	15	28+α			(4)	×	○ 中央	甕・鉢・高坏 滑石製模造品		2
	第3号住居跡	後・末	方	810	260+α	50	56+α			(4)	○	○ 中央	甕・壺・高坏・器台・石斧・石庖丁	第2号住居跡に切られる。建て替えの可能性あり	
	第4号住居跡	後	方	540	280+α	30	58+α			?	○	○ 中央	甕・壺	第1号住居跡に切られる。二辺に沿ってベッド状遺構	
城山遺跡	竪穴住居跡	中・前半～中葉	円	540		20	21.2	8.75	41.3	10	×	×	甕・壺	中央穴。ベッド状の施設をもつ可能性あり	3
高畑遺跡	DW 1	後・末	円	920		20	57.0	37.80	66.0	7	○	×	甕・壺・石鏃・勾玉・ガラス小玉	中央穴はさんで二柱穴の可能性あり	4
	3	(後末～古墳初)	隅丸方	(550)		10	(25.0)			(4)	○	×		胴張り	
	4	(後・後半～古墳初)	やや楕円	970	870	10	66.0	43.0	65.2	8	○	×	甕・砥石	中央穴。DW4に切られる	
	5	(後・後半～古墳初)	円	800			41.0			(4)	○	×			
	6	(後・後半～古墳初)	方	(630)			(36.0)			?	○	×		壁溝のみ	
	7	(後・後半～古墳初)	(方)	(400)			(11.5)			?	○	×	作業台	床面に炭と焼土の集塊	
	8	?	(円)	(780)			?			(7～8)	?	×			
	9	中・後半	(円)	(640)			?			(7)	?	×			
	10	?	(円)	(800)			?			?	?	×			
上原遺跡	DW 7	前・後半～末	円	640		30	(23.0)			(5～6)	○	○ 中央	甕・蓋・砥石		5
	8	前・後半～末	円	580		10	(20.0)			(6～7)	×	×	壺		
	50	前・後半～末	円	706		14	(30.0)			(6)	○	×	蓋		
	58	前・末	円	325	280	30	(7.0)			1	×	×	甕・壺		
坂ノ上遺跡	第1号住居跡	前・末	隅丸方	270+α	264+α	10	(5.8+α)			(2)	○	×			6

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模（cm） 長軸	短軸	深さ	床面積（㎡）	主柱間床面積（㎡）	主柱間床面積／床面積（%）	柱穴数	壁溝	炉 位置	出土遺物	備考	文献
坂ノ上遺跡	第2住居跡	(前・末～中・初)	隅丸方	390	230＋α	10	(8.1＋α)			2 (4)	○	×			6
北迫遺跡	B地区第Ⅰ区 第1号住居跡	中・後半	隅丸方	357	278	15	8.2			?	×	×	甕・壺	火災住居	7
	B地区第Ⅰ区 第2号住居跡	?	(円)	500～600	?	?	?			?	×	×	甕・壺		
	B地区第Ⅱ区 第1号住居跡	中・後半	円	530		26	15.9	15.06	94.7	9	○	○ 中央	甕・壺		
	B地区第Ⅱ区 第2号住居跡	中・後半	方	350	260	20	10.1			0	×	○ 南寄	甕・壺	ベッド状遺構	
	SB6	?	円 or 楕円	(750)	(600)	20	(35.8)			?	○	?	甕・磨石		8
	SB8	?	円 or 楕円	(500)		(18)	(19.6)			0	×	?	蓋	SB6に切られる	
	SB9	後・前半	円	(670)		(17)	(32.1)			1 (8)	○	?	甕・壺		
青畑遺跡	住居跡	中・後半	円	(520)		30	20.1			2 (5)	×	?		周辺の一部に階段状の張り出し	9
朝田墳墓群 第Ⅱ地区	第1号 竪穴住居跡	後・末	(隅丸長方)	(395)	(340)	60	(12)			2	○ 一辺	○ 中央	甕・壺・鉢・鉄鏃	火災住居	10
	第2号 竪穴住居跡	後・末	隅丸方 or 長方	360	135＋α	35	(5.5以上)			2 (4)	×	○ 中央	甕・壺・石斧・砥石		
	第3号 竪穴住居跡	(後・末)	(方)	360	?	53	?			2以上	×	?		火災住居	
	第4号 竪穴住居跡	中・前半	円	520	500	22	(20.4)	9.40	46.0	8	×	○ 西寄	甕・壺・鉄製品	火災住居 ベッド状の平坦面	11
	第5号 竪穴住居跡	中・前半	円	(800)		48	(47.2)			7	×	○ 中央	壺	炉をはさみ二柱穴。壁面に内側へ張り出す平坦面	
	第6号 竪穴住居跡	中	隅丸方 or 長方	340	240＋α	48	(9.5)			1 (4)	×	?	甕・土製投弾	ベッド状の平坦面。住居の重複の可能性あり	
	第7号 竪穴住居跡	?	隅丸長方	230	145	98	3.4			0	×	×	鉄製品		
	第8号 竪穴住居跡	?	方 or 長方	440	325	60	(19.4)			?	×	?	土器片	住居外三柱穴	
	第9号 竪穴住居跡	後・末	隅丸方 or 長方	430	180＋α	38	(18.5)			?	×	?	甕・壺・鉢		

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	床面積(㎡)	主柱間床面積(㎡)	主柱間床面積/床面積(%)	柱穴数	壁溝	炉 位置	出土遺物	備考	文献
朝田墳墓群 第Ⅱ地区	第10号 竪穴住居跡	後・末	円	590	530	60	21.5	7.00	32.6	4	○	×	甕・壺・鉢・鉄製品	中央穴・ベッド状遺構	11
	第11号 竪穴住居跡	後・末	隅丸長方	470	370	21	15.3			2	○	×	甕・壺・器台	中央穴	
朝田墳墓群 第Ⅲ地区	第1号建物跡	後	円	600	550	10	30.0	12.70	42.3	5	×	○ 南寄	甕・鉄製品 滑石製模造品		12
堂道遺跡	竪穴住居跡	後・前半	隅丸方	440	380	18	15.0	3.24	21.6	4	○	○ 南寄	甕		13
西遺跡	第14号住居跡	後・末	円 (楕円)	720	590	6	36.0	17.80	49.5	7	○	×	壺・石鏃 滑石製模造品	中央穴	14
	第16号住居跡	後・前半	隅丸長方	480	320	15	15.4			2	○	×	甕・石斧・砥石	隣接する二辺に住居外へのテラス状の張り出し	
	第17号住居跡	前・末～中・初	円	370		12	10.7	6.44	60.2	6	×	○ 中央	甕		
奥正権寺 遺跡Ⅰ	第1号 竪穴住居跡	中・後半	円	500	460	38	16.5	6.20	37.6	6	×	×	甕・壺・高坏	付近に焼土壙	15
	第3号 竪穴住居跡	中・後半	円	400	370	28	11.6	2.40	21.1	4	×	×	甕・鉢	主柱穴配置不規則	
大崎遺跡	SB 1	中・後半	隅丸方	410	157＋α	23	4.1＋α (16.8)			(4)	×	?	甕	火災住居。二辺胴張り。炉をはさんで二柱穴	16
	SB 2	中・後半	隅丸方	580	362＋α (480)	62	15.6＋α (27.8)			3 (6 or 8)	×	○ 北寄	甕・土錘・砥石・作業台		
	SB 3	中・後半	隅丸方	514	210＋α	56	7.1＋α (19.7)			3 (6 or 8)	×	?	甕・壺・石鏃 敲石		
	SB 4	中・後半	円	552	252＋α	21	7.5＋α (24.4)			3 (5)	×	○ 壁近	甕・壺・砥石・土錘・分銅形土製品		
	SB 5	中・後半～末	円	(510)	(510)	52	4.3＋α (17.6)			2 (4 or 5)	×	?	甕・壺・高坏・石鏃・紡錘車		
下右田遺跡 第1次調査	竪穴住居跡	中・後半	円	445	422	10	14.7			2	×	○ 中央	甕	住居外に周壁に沿って11柱穴	17
下右田遺跡 第3次調査	DW－1	中	円	450	440	?	16.0			2	×	○ 中央			18
	DW－4	中～後	円	440	(600)	?	(21.0)	4.21	20.0	4	×	○ 南寄			
	DW－5	後・前半	円	520	470	?	19.0			?	×	○ 中央	甕		

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	床面積(㎡)	主柱間床面積(㎡)	主柱間床面積/床面積(%)	柱穴数	壁溝	炉 位置	出土遺物	備考	文献
下右田遺跡 第3次調査	D W − 6	中・後半	円	490	430	22	15.9	4.53	28.5	5	×	○ 中央	甕・壺		18
右田・一丁田遺跡〈右田地区〉	第1号住居跡	後・後半	円	350	350	6	10.6	2.29	21.7	4	○	○ 西寄	甕・砥石	住居外に周壁に沿ってめぐる31柱穴	19
	第2号住居跡	?	円	780	760	20	46.6	30.50	65.5	8	×	○ 中央	壺	炉をはさんで4柱穴	
右田・一丁田遺跡〈一丁田地区〉	1号住居跡	後・後半	円	640	622	14	31.2			5	×	○ 中央	甕・壺・高坏・支脚		
	3号住居跡	後・末	方	520		10	(27.0)			2	○ 一辺	×	甕・鉢・高坏・甑	胴張り	
	4号住居跡	後・後半	隅丸方(長方)	370		10	(13.7)			2 (4)	×	○ 南寄	壺・作業台		
	5号住居跡	後・後半	円	425	385	30	13.2			2	×	○ 東寄	甕・高坏・作業台		
	6号住居跡	後・前半	隅丸方	590	580	18	34.0	5.22	15.4	4	×	○ 中央	甕・鉢・高坏	二辺胴張り	
	8号住居跡	後・後半	円	320	260	10	7.0			2	○	×	甕・砥石・紡錘車	周壁に接して貯蔵穴状の土壙	
	11号住居跡	後・後半	隅丸方	387	286	13	4.6			0	○	○ 南西寄	甕・鉢・高坏・鉄塊・作業台	壁溝は幅広で深い	
	13号住居跡	後	円	(500)	(500)	70	(19.6)			?	×	?		周壁に接して貯蔵穴状の土壙	
	14号住居跡	後・前半	円	370	350	30	9.3	1.62	17.4	4	○	×	甕・壺・高坏・器台・紡錘車		
	15号住居跡	中・前半	円	420	(420)	25	(14.0)			2	×	?	甕・壺		
	16号住居跡	中〜後・前半	円	(500)		22	(19.6)	10.45	50.2	?	×	?	甕		
	17号住居跡	中・後半	円	530	500	15	20.8	5.80	22.3	5	×	○ 中央	甕		
	20号住居跡	後・末	方	520	510	22	26.0			4	×	○ 中央	甕・鉢	二辺胴張り。火災住居の可能性あり。	
井上山遺跡	A地区 1号住居跡	中・後半	円	470		42	17	5.60	32.9	4	○	×		周壁と壁溝間に帯状の平坦面	20
	2号住居跡	(後)	(方)	(416)		70	17.3+α			4	○	×			

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	床面積(㎡)	主柱間床面積(㎡)	主柱間床面積/床面積(%)	柱穴数	壁溝	炉 位置	出土遺物	備考	文献
井上山遺跡	B地区 1号住居跡	中・後半	(方)	(650)	?	6	(42+α)			?	○	?	壺	2号住居跡に切られる	20
	2号住居跡	中・後半	円	(400)		40	(11.8)			(4)	×	×	壺	建て替えの可能性あり	
	3号住居跡	(中・後半)	円	(520)		35	(19.6)	3.92	20.0	4	○	×	土器片	建て替えの可能性あり	
	4号住居跡	(中・後半)	円	780	720	50	41.3	27.4	66.3	9	○ 部分	×	土器片・砥石	5号住居跡に切られる 壁溝内に小柱穴	
	5号住居跡	後・後半～末	方	480	470	20	21.1	6.12	29.0	4	○ 部分	×	壺・紡錘車・鉄製品	壁溝内に小柱穴	
	6号住居跡	(後・後半～末)	方	(400)	400	20	14	5.77	41.2	4	×	×	土器片		
	7号住居跡	(中・後半)	円	(880)		30	(46)			(9)	×	×	甕・壺・石鏃・石斧・砥石・鉄製品	8号住居跡に切られる 建て替えの可能性あり	
	8号住居跡	(中・後半)	円	(600)		20	(24)			(5)	×	×	甕		
	9号住居跡	中・後半	円	(760)		50	(34.2)			6	○	×	壺・紡錘車・砥石・鉄斧・鉄鑿	住居外に溝状遺構 (排水溝の可能性あり)	
	10号住居跡	(中・後半)	円	(600)		40	(26)			?	×	×		9号住居跡に切られる	
	11号住居跡	(中・後半)	?	?	?	?	?			?	?	?			
宮原遺跡	1号住居跡	後・末	隅丸方	420	250+α	50	(15.0)			1 (2)	○	?	甕・鉢	胴張り。ベッド状遺構。住居外に周壁に沿って7柱穴。	21
	2号住居跡	(後・末)	円	(600)		15	?			?	×	?		住居外に周壁に沿って4柱穴	
	3号住居跡	(後・末)	隅丸方	520	380+α	40	(25.6)			1 (?)	○	?	甕・鉢・石鏃	中央穴。ベッド状遺構	
	4号住居跡	(後・末)	円	450		28	(14.1)	3.04	21.6	4	○	○ 中央	甕・高坏・石鏃	火災住居。床面に多数の小柱穴	
	5号住居跡	(後・末)	円	610		30	(28.3)	11.96	42.3	6	○	○ 西寄	鉢	火災住居	
	6号住居跡	前・後半	?	?	?	10				(5)	○	○ 中央	壺	火災住居	
	7号住居跡	後・末	円	760		32	37.8	29.00	79.5	9	○	×	甕・壺・高坏・支脚・石鏃・紡錘車	床面にカマド状の施設。中央穴はさみ4柱穴。排水溝	

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	床面積(㎡)	主柱間床面積(㎡)	主柱間床面積/床面積(%)	柱穴数	壁溝	炉 位置	出土遺物	備考	文献
宮原遺跡	8号住居跡	(後・末)	円	800		40	(41.1)			?	○	?	甕	住居外にのびる排水溝	21
御屋敷山遺跡	竪穴住居	後・末	方 or 長方	550	370+α	50	(25.9)			6 (9)	○	○	鉄鏃	火災住居	22
追迫遺跡	竪穴住居跡	後・後半	円	760	750	26	36.6	16.36	44.7	5	○	○ 南寄	壺	壁溝の途切れ部分に外方への張り出し。ベッド状遺構	23
吹越遺跡	第4号住居跡	後・末	不整円	(700)		50	(24.6)	12.54	51.0	6	○	×	甕・壺・鉢・高坏・砥石・鉄鏃・刀子	中央穴周囲に小柱穴多数。ベッド状遺構	24
	B地区 第1号住居跡	(後・末)	(隅丸方)	(450)	?		(17.0)			?	×	?	鉄鏃・炭化米		
	C地区 第1号住居跡	後・末	(長円)							0	×	×	壺・高坏・砥石・作業台		
松尾遺跡	1号住居跡	後・末	円	810		40	45.6				○	○ 中央	甕・壺・器台・鉄器・ガラス小玉	建て替え	25
	2号住居跡	後・末	円	(700)		20	(33.4)				○	?	土器片・鉄鏃	建て替え	
	3号住居跡	後・末	円	(1000)	?	22					×	?	土器片・ガラス小玉		
突抜遺跡	DW 1	前・末～中・初	円	517	512	27	20.7	6.99	33.8	5	×	×	甕・壺	中央穴	26
	DW 17	前・末～中・初	(円)	?	?	20	?			?	×	×	甕	中央穴	
	DW 23	前・末～中・初	円	308		12	7.45			0	×	×	土器片	DW1の附属施設の可能性あり	
	DW 18	中・前半	円	590	540	5	23.3	8.11	34.8	(5)	×	×	甕・石斧		
	DW 20	中・前半	円	560	540	10	22.1			(5)	×	×	石鏃・紡錘車	中央穴	
	DW 21	中・前半	円	?	?	10	?			?	?	?	甕・壺		
	DW 22	中・前半	円	750		12	44	19.96	45.2	7	×	×	甕・壺・石斧		
	DW 19	中・後半	円	870	860	25	59.4	33.70	56.7	7	○	×	甕・壺・磨石・敲石	中央穴めぐる4柱穴	
	DW 8	後・前半	円	920	910	10	65	35.94	55.3	8	○	×	甕	中央穴はさみ二柱穴対峙壁溝一部なし	

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	床面積(㎡)	主柱間床面積(㎡)	主柱間床面積/床面積(%)	柱穴数	壁溝	炉 位置	出土遺物	備考	文献
突抜遺跡	DW 9	後・前半	隅丸方	480	425	8	20.4	5.06	24.8	4	×	×	甕・砥石		26
	DW 3	後・後半～末	円	496		20	19.3	4.12	21.3	4	○	×	甕・壺・鉄製品・スラグ	DW4に切られる。中央穴。床面に集石	
	DW 5	後・後半～末	円	546		10	23.4	5.70	24.4	4	×	×	甕	DW4に切られる	
	DW 6	後・後半～末	円	445		20	15.4	5.25	34.1	4	○	×	甕・鉢・高坏	中央穴	
	DW 10	後・後半～末	円	540	490	15	20.8	5.38	25.9	4	×	×	甕・砥石	中央穴	
	DW 12	後・後半～末	円	500		20	19	6.05	31.8	4	×	×	甕・鉢・スラグ	中央穴	
	DW 2	後・後半～末	楕円	495	490	15	19.1	4.08	21.4	4	×	×	甕・鉄鏃	中央穴	
	DW 4	後・後半～末	円	580		20	25	8.40	33.9	4	○	×	甕・砥石・刀子・作業台・スラグ	中央穴	
	DW 11	後・後半～末	円(八角)	410	350	25	13	3.59	27.6	4	×	×	甕・高坏	火災住居。中央穴。床面さらに方形に掘り込まれる	
	DW 13	後・後半～末	円	530	510	30	21.2	5.90	27.8	4	×	×	甕・砥石	中央穴	
	DW 14	後・後半～末	隅丸方	480	450	35	19.2	4.86	25.3	4	○	×	甕・壺	中央穴。胴張り	
	DW 15	後・後半～古墳・初	隅丸方	700	640	40	33	12.93	39.2	4	○	×	甕・壺・鉢・砥石・鉄鏃・鉄斧	壁溝途切れる部分で2段の平坦面	
	DW 16	(後・後半～末)	隅丸方	450		20	(20)			?	×	×	炭化材		
	DW 24	後・後半～末	隅丸方	310	275	15	7.0			2	×	×	甕・スラグ		
馬場遺跡	DW 1	中・前半	円	460		35	(14)			?	○	?	甕・壺		26
	DW 2	中・前半	円	560		7	(23)			?	×	?	甕・砥石	中央穴	
	DW 4	中・前半	円	486		15	(17)			?	?	?	土器片		
坂手沖尻遺跡	6号住居跡	中・後半	円	530		20	22.1	4.88	22.1	4	○	×		中央穴	27

5　保存地区環境整備に関する一試案

遺跡保存地区の概要、調査・保存に至る経過は先に述べたとおりである。昭和42年以降の統合移転に伴う施設整備のさなかにあって、当地区に埋存する遺跡が現地保存されたことは遺跡保存地区の教育・研究資料としてもつ固有な学術的価値が強く認識され、教育・研究機関である大学の社会的責任の一端が果たされた結果でもあった。

しかし、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての21棟の竪穴住居跡を中心にした各遺構は、調査後再び埋め戻しを行ない保存されているが、活用・公開はほとんどなされていないのが現状である。本稿は、こうした保存・活用・公開に向けての遺跡整備に関する一試案である。[45)]

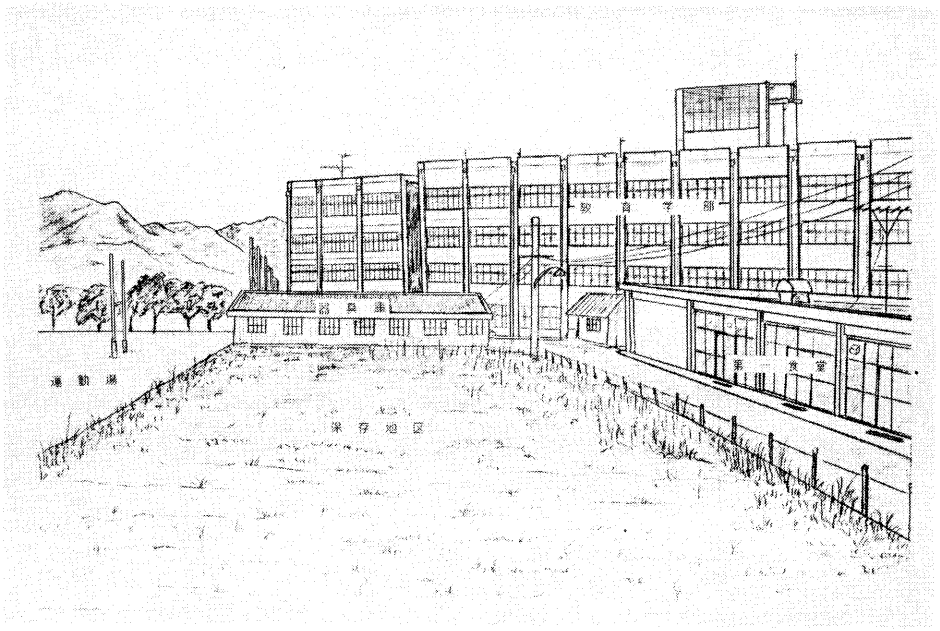
遺跡の現地保存はそれ自身、保存措置として極めて重要である。また、それとともに学内の環境整備の一環として遺跡の構成要素である各遺構を修復し、遺跡本来の機能を表現できるように整備することによって大学独自の積極的な遺跡の利用形態を図ることも、ひとつの効果的な保存、活用措置といえるのではないであろうか。そのためには現在の文化創造の基盤となった歴史的遺産を適切な方法で保存・活用し、後世に継承するために公共施設として整備し、歴史を追体験できる新しい現代的な付加価値をもった歴史ゾーンとして公園化するのも一つの手段であろう。

それにはまず、歴史的理解の一助として住居の構造、形式の時間的な変遷過程が臨場感をもって歴史的に認識できるように、竪穴住居を数棟復原するなどの立体的な整備方法が考えられる。あわせて、教育・研究にふさわしい快適な居住空間を確保するために、遺跡が立地した往時の生活環境の復原を含めた植樹・植栽などの環境整備によって、憩いの場としての機能をもたせることも必要であろう。さいわい、当地区は食堂および運動場等の共同利用施設に隣接しており、遺跡に立って往時を回想する憩いの場的機能は十分果たしうるものと考えられる。

また、歴史的認識を助ける表示板、ベンチ等を公園内の要所に設置し、遊歩道による散策コースも造出することによって、復原した竪穴住居が身近に学習できるようにする開放的な配慮も必要になるものと考えられる。

つぎに、竪穴住居等の平面プランを明示するなどの平面的な整備方法が考えられるが、遺跡を利用する側にとっては、ともすれば遺跡公園としての十分な歴史的理解が伴わない恐れがあり、立体的な整備方法には劣るであろう。

以下、想定される遺跡整備の方法を述べることにする。



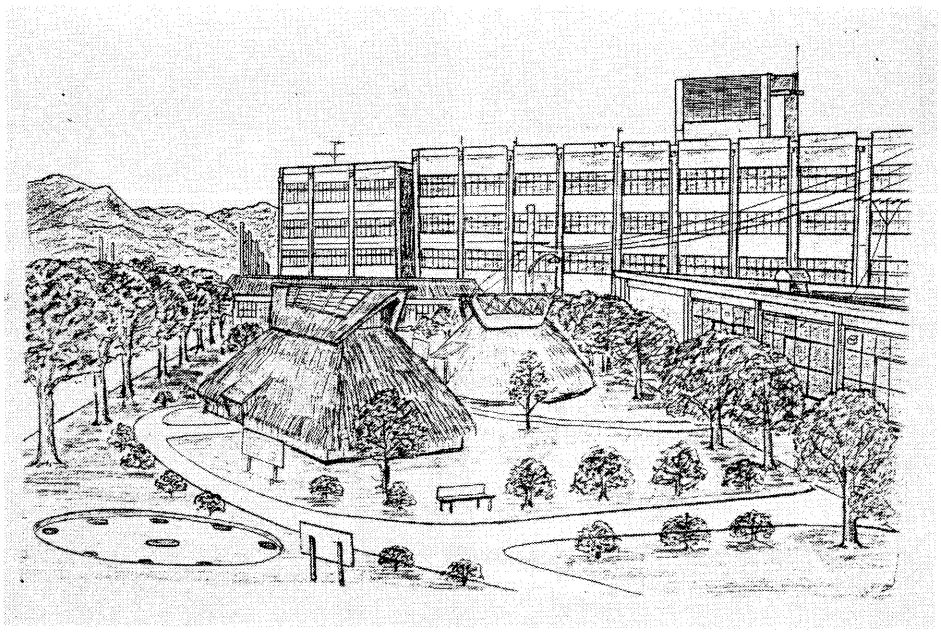


Fig. 94　保存地区環境整備後の想像図(上　現状　　下　整備案)
(画　森田孝一)

1　整備案

施工にあたっては遺構面への盛り土を行ない、地下遺構を損傷する恐れのある掘削は行なわない。また、各遺構は集落内でそれぞれ有機的なかかわりをもって生活の場を構成していることから、発掘された原位置に復原することが望ましい。

1）竪穴住居跡

a）家屋復原住居（1）（Fig. 95）

竪穴住居を当初の姿で立体的に復原するもので、カヤなどで屋根を葺き、上屋を支える柱や梁、棟木、垂木などを木を用いて復原する。その際、見学者が竪穴住居内に入って住居構造や内部施設が効果的に学習できるように配慮する。定常的な保守管理が十分行なえる体制が整えば、往時の住居を視覚的に実体験できる最も望ましい復原方法である。

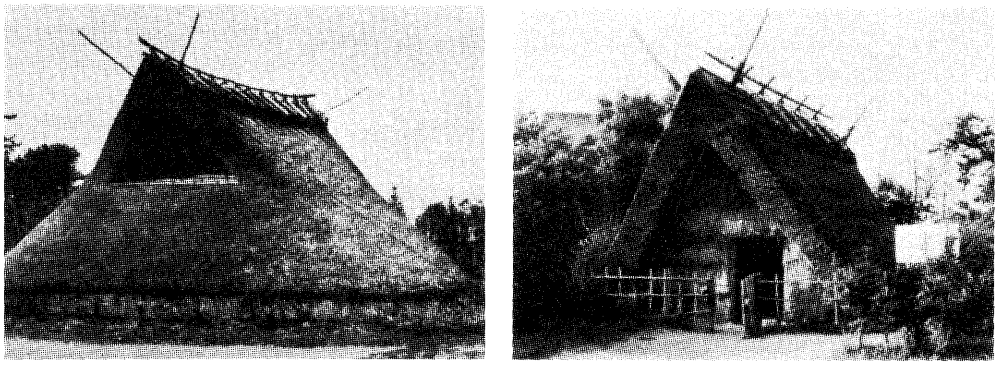


Fig. 95　家屋復原住居（1）例（左　大中遺跡　　右　田能遺跡）

b）家屋復原住居（2）（Fig. 96）

上屋を葺く前段階のもので、住居の骨組み状況を示すものである。柱や梁、棟木、垂木などの構造材に木を使用する場合と類似材、模造材あるいは鉄骨等を使用する場合とが考えられる。家屋復原住居（1）と比較して防災などの点では維持管理は容易であるが臨場感に乏しい。

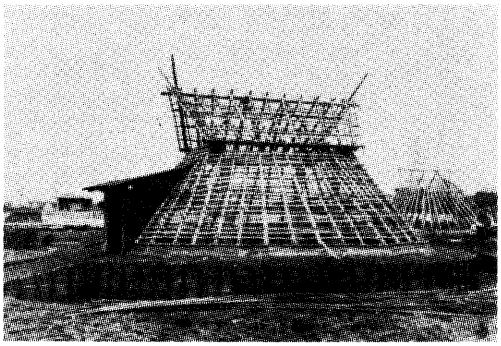


Fig. 96　家屋復原住居（2）例（登呂遺跡）

c）家屋復原住居（3）(Fig. 97)

家屋復原住居（1）をモデルにして家屋をモルタル、柱や梁、棟木、垂木などを鉄筋構造で復原するものである。具体的な整備例はないが、Fig. 97に示した出雲玉作跡で試みられている住居跡覆屋を参考にすれば整備は十分に可能であろう。家屋復原住居（1）、（2）と比較して防災などの維持管理面では効果的であるが、遺跡公園として歴史的環境を修景するうえからは素材のもつ固さがマイナスイメージとなるおそれがある。

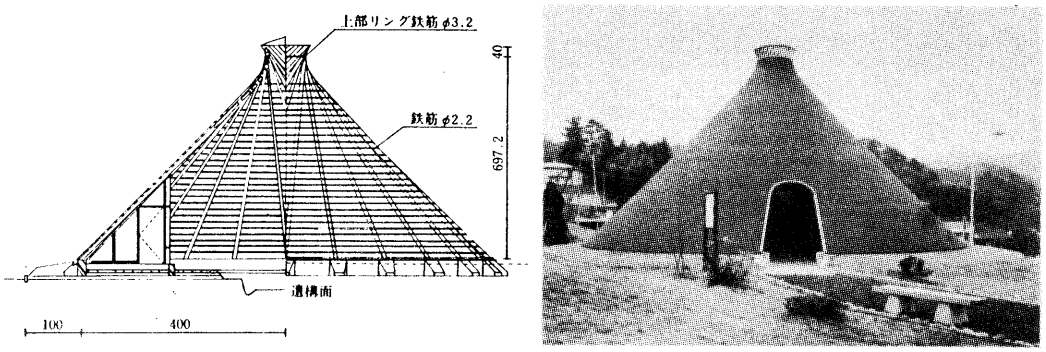


Fig. 97　家屋復原住居（3）例（出雲玉作跡）

d）竪穴住居プランの復原（Fig. 98)

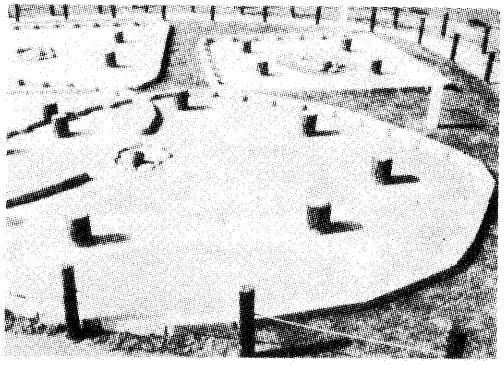
上記したa)～c)三例が立体的な復原方法であるのに対して、竪穴住居の平面形態や規模、柱や炉跡の位置などを平面的に示す復原方法である。また、住居を床面まで掘りこんでモルタルやコンクリート、張り芝などで整備し、柱はコンクリート柱等で立ち上がらせ理解を容易にする方法も考えられる。家屋復原住居に比べ経済性に優れ、平面的な広がりは理解できるが、立体的な規模や住居構造が十分に認識できないディメリットがある。

e）覆屋による検出住居遺構の表示（Fig. 100)

発掘調査で検出した住居跡をそのままの状態で表示するものである。しかし、保存の上から露天させることはできず、覆屋と遺構の保存処理が不可欠であるとともに遺跡から住居跡が隔離され、遊離してしまう危険性がある。

2）河川跡（Fig. 99)

保存地区東部には南から北に流れる古墳時代後期の河川跡が検出されている。その流れを示すため、平面的ではあるが小割石やレンガなどで表示する。また、園路として



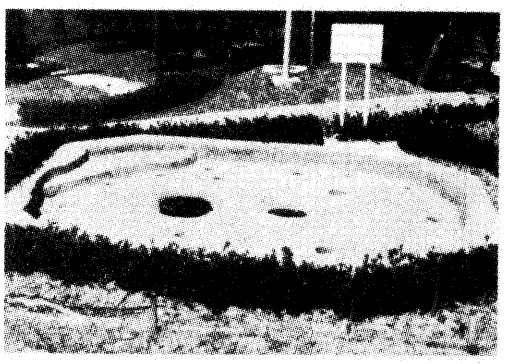


Fig. 98　住居プラン復原例（右　近野遺跡　　左　御経塚遺跡）

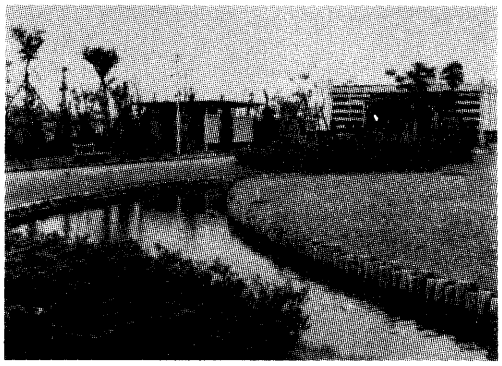


Fig. 99　溝、河川跡復原例（右　伊場遺跡　　左　田能遺跡）

の活用方法も可能である。

3）植栽

整備計画上最も広いスペースを必要とするもので、見学者の休息、歴史を回想する広場として、また、学内のコミュニティ活動や文化活動の場所として多目的な利用が考えられる。

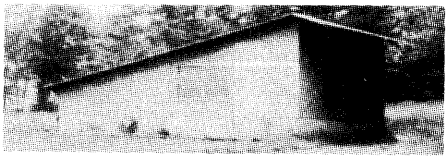


Fig. 100　覆屋復原例（与助尾根遺跡）

4）植樹

遺跡公園としての環境整備には不可欠な要素である。ただし、樹木の配置においては遺跡公園としての歴史的環境にふさわしい配置が必要であろう。また、樹種の選定は発掘調査でその種子が出土し、往時この地の植生を構成していたオニグルミ、モモ、シイなどを植樹し、古環境を復原する方法も考えられる。なお、施工にあたっては地下の遺構に影響のないよう配慮することが肝要である。

2　各地の遺跡整備例

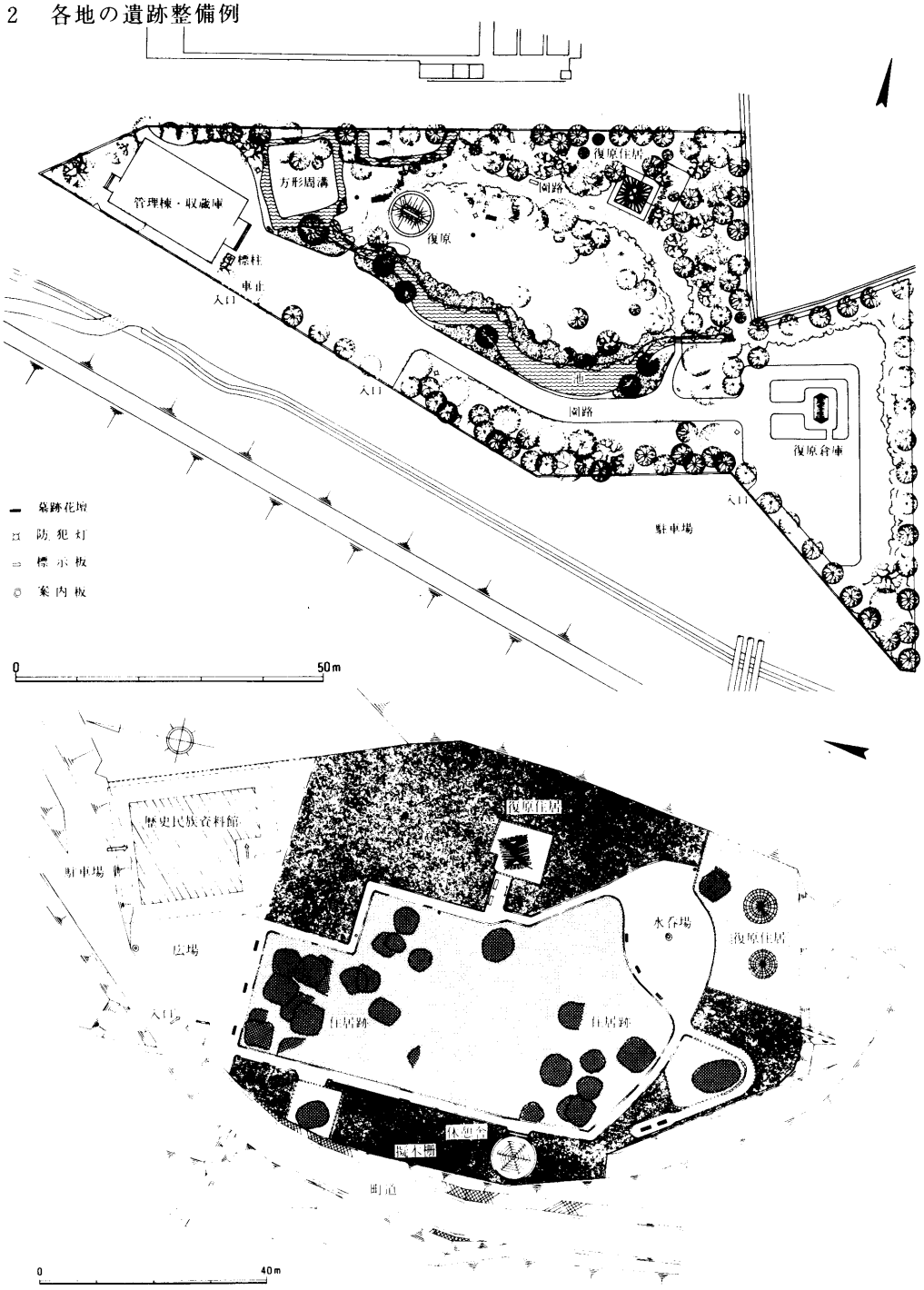


Fig. 101　各地の遺跡整備例（上　田能遺跡　　下　堂之上遺跡）

3　各地の復原住居設計例

1）円形竪穴住居跡

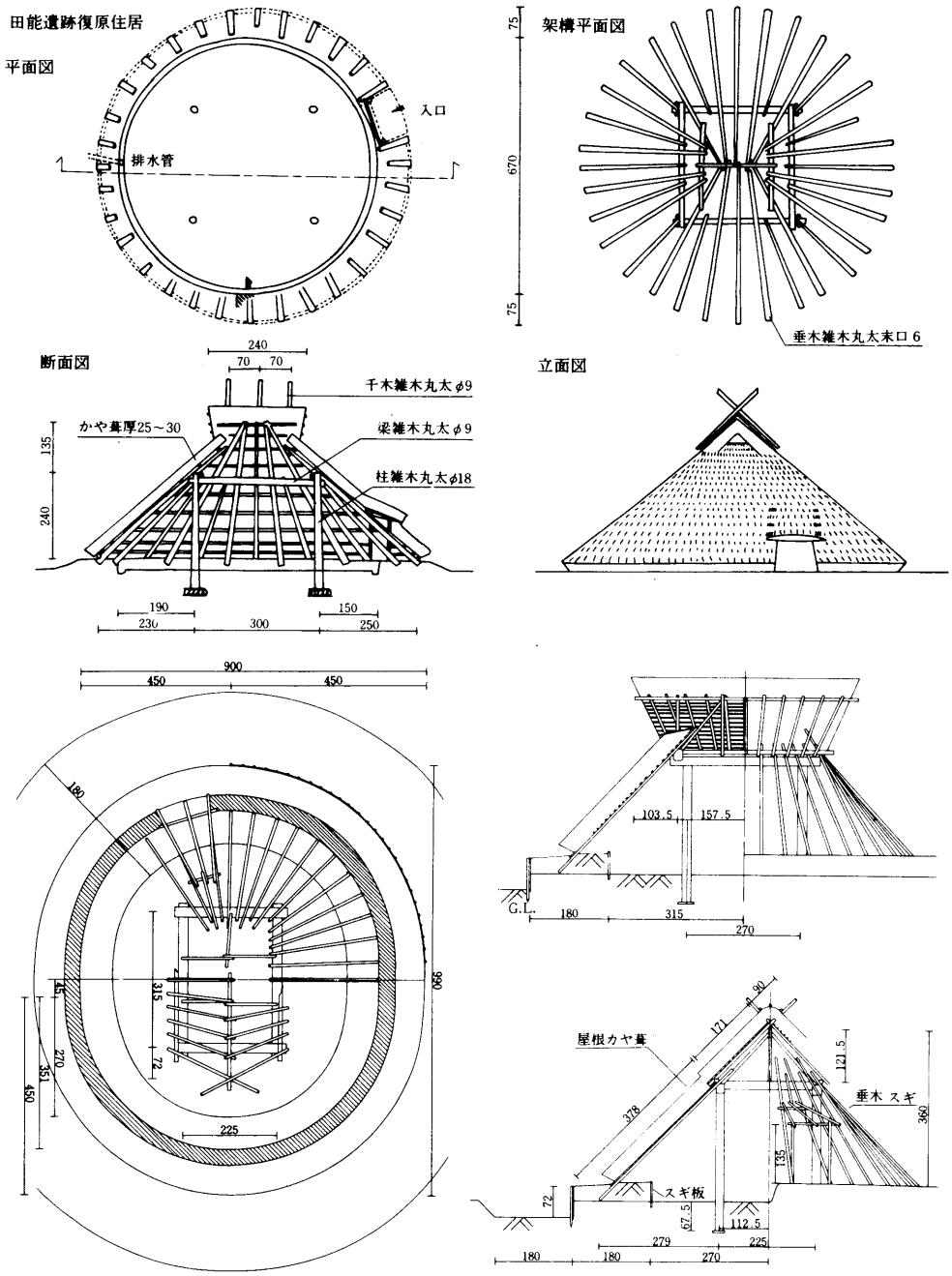


Fig. 102　円形竪穴住居跡設計例（田能遺跡）

2）方形竪穴住居跡

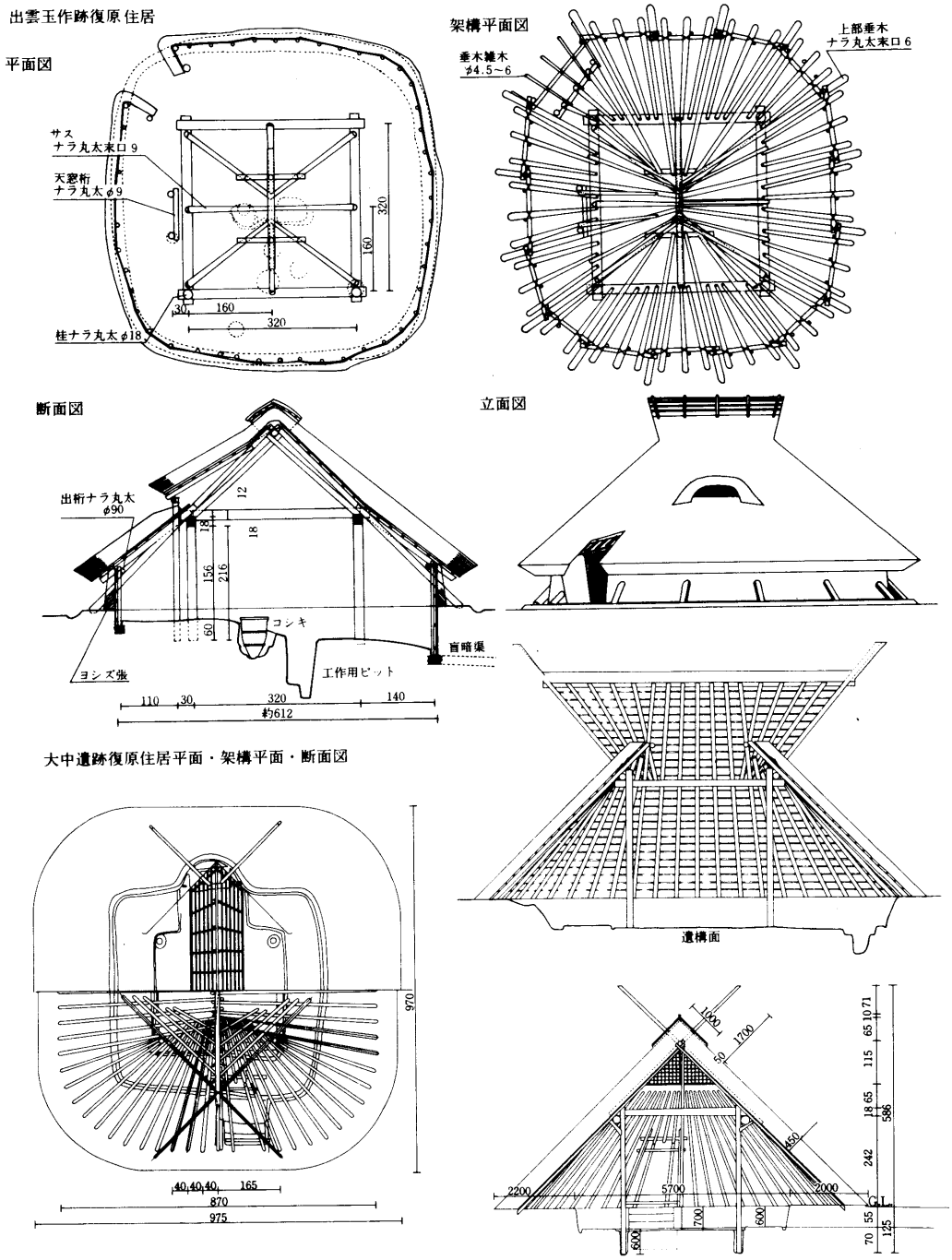
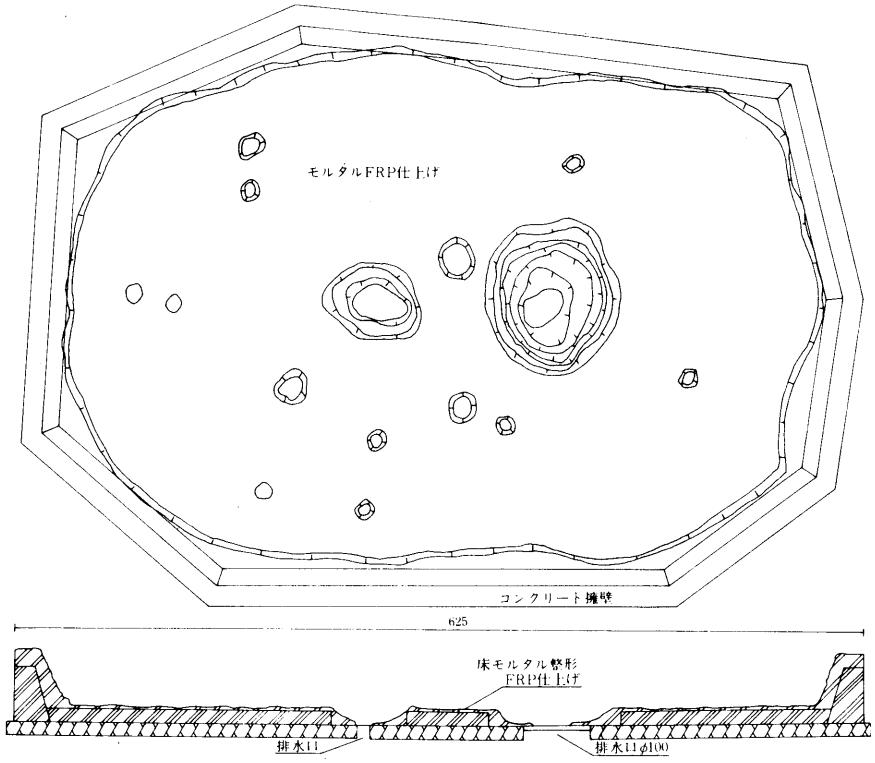


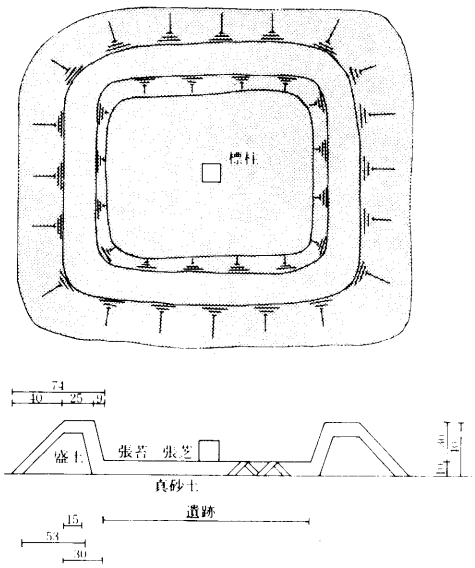
Fig. 103　方形竪穴住居跡設計例（上　出雲玉作跡　　下　大中遺跡）

4　住居プラン復原例

近野遺跡（青森県・青森市）第３号住居跡平面・断面図



福市遺跡住居跡平面・断面図



本江遺跡（富山県・滑川市）住居跡平面・断面図

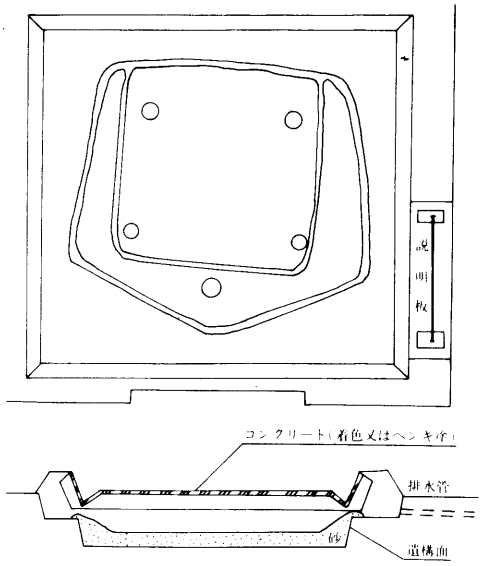


Fig. 104　住居プラン復原例（上　近野遺跡　　下右　本江遺跡　　下左　福市遺跡）

〔注〕

1）a 小野忠熙「山口大学吉田遺跡」(『考古学ジャーナル』第9号、ニューサイエンス社、1967年)。
b 小野忠熙「山口大学構内吉田遺跡の性格」(『学園だより』第6号、山口大学、1970年)。
c 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)。

2）遺構の切り合い関係は昭和42年の吉田遺跡調査団による調査資料および、各遺構からの出土遺物により新旧関係を決定した。しかし、昭和42年に調査されている各遺構のうち、切り合い関係に明確な記述がなく、遺物出土量が少なく時期決定が困難な場合や同時期の遺物が出土している場合は切り合い関係不明とした。

3）山口県教育委員会『伊倉遺跡』(1973年)。

4）山本一朗「防長の土師器」(『山口県の土師器・須恵器一集成と編年一』、周陽考古学研究所、1981)。

5）山口市教育委員会『西遺跡』(1986年)。

6）山口県教育委員会「堂道遺跡」(『堂道・五反地遺跡』、1973年)。

7）山口県教育委員会「朝田墳墓群Ⅱ」(『朝田墳墓群Ⅱ・鴻ノ峰1号墳』、1977年)。

8）a 山口県教育委員会『朝田墳墓群Ⅴ』(1982年)。
b 山口県教育委員会『朝田墳墓群Ⅵ』(1983年)。

9）床面に中央穴を除いた3本以上の主柱を有する竪穴住居について、柱穴心－心間を結んだラインで囲繞される床面中央部分の面積を示す。

10）井上山遺跡発掘調査団『井上山』(1979年)。

11）a 山口県教育委員会『下右田遺跡第1・2次調査概報』(1978年)。
b 山口県教育委員会『下右田遺跡第3次調査概報』(1979年)。

12）三戸田晃司・山本源太郎編『奥正権寺遺跡Ⅰ』(山口県教育委員会、1984年)。

13）渡辺一雄・中村徹也『よみがえる弥生のムラ－突抜・馬場遺跡』(山口県教育委員会、1985年)。

14）磯部貴文・河村吉行「吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1985年)。

15）前掲注3）に同じ。

16）山口大学人文学部考古学研究室「下関市伊倉遺跡の発掘調査」(『西部瀬戸内における弥生文化の研究、1984年)。

17）下関市教育委員会『綾羅木郷遺跡Ⅰ』(1981年)。

18）下関市市史編修委員会「梶栗浜遺跡」(『下関市史　原始—中世』、下関市役所、1965年)。

19）山口県教育委員会「石原遺跡」(『塚本古墳・秋根遺跡・石原遺跡』、1974年)。

20）渡辺一雄『たかはた』(㈶山口県教育財団・山口県教育委員会、1986年)。

21）冨士埜勇『上原遺跡』菊川町教育委員会、1976年)。

22）山口県教育委員会『坂ノ上遺跡』(1974年)。

23）前掲注5）に同じ。

24）前掲注6）に同じ。

25）前掲注7)、8）に同じ。

26）山口県教育委員会『右田・一丁田遺跡』(1973年)。

27）前掲注11）に同じ。

28）前掲注12）に同じ。

29）三戸田晃司・山本源太郎編「大崎遺跡」(『奥正権寺遺跡Ⅱ・大崎岡古墳群・大崎遺跡』、山口県教育委員会、1985年)。

30）前掲注10）に同じ。

31）山口県教育委員会「宮原遺跡」(『宮原遺跡・上広石遺跡』、1973年)。

32）山口県教育委員会『御屋敷山遺跡』(1973年)。

33）小野忠熙編「岡山遺跡」(『島田川』、山口大学島田川遺跡学術調査団、1953年)。

34）小野忠熙編「天王遺跡」(『島田川』、山口大学島田川遺跡学術調査団、1953年)。

35）a 小野忠熙編「岡原遺跡」(『島田川』、山口大学島田川遺跡学術調査団、1953年)。
b 小野忠熙編「岡原遺跡」(『山口県文化財概要第4集、山口県教育委員会、1961年)。

36）a 小野忠熙他『吹越遺跡予備調査概報』(平生町教育委員会、1970年)。

b 小野忠熙他『吹越遺跡第二次調査概報』（平生町教育委員会・山口県教育委員会、1972年）。

37) 山口大学人文学部考古学研究室「平生町松尾遺跡の発掘調査」（『西部瀬戸内における弥生文化の研究、1984年）。

38) 村岡和雄「坂手沖尻遺跡」（『坂手沖尻・惣の尻遺跡』、山口県教育委員会、1978年）。

39) 村岡和雄・藤本嘉明・中村徹也「宮ヶ久保遺跡」（『山口県文化財』第7号、1977年）。

40) 前掲注13）に同じ。

41) 各遺跡に冠する番号は各流域の集落遺跡で付した流域番号に一致する。

42) 北九州市北方遺跡9号竪穴住居跡、筑紫野市野黒坂遺跡31・46号住居跡など前期末には10㎡前後の方形に近い小規模な住居跡が知られている。

a 上村佳典編『北方遺跡』（㈶北九州市教育文化事業団、1986年）。

b 松岡史他「野黒坂遺跡」（『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集、福岡県教育委員会、1970年）。

43) 横路遺跡調査団『横路遺跡』（1982年）。

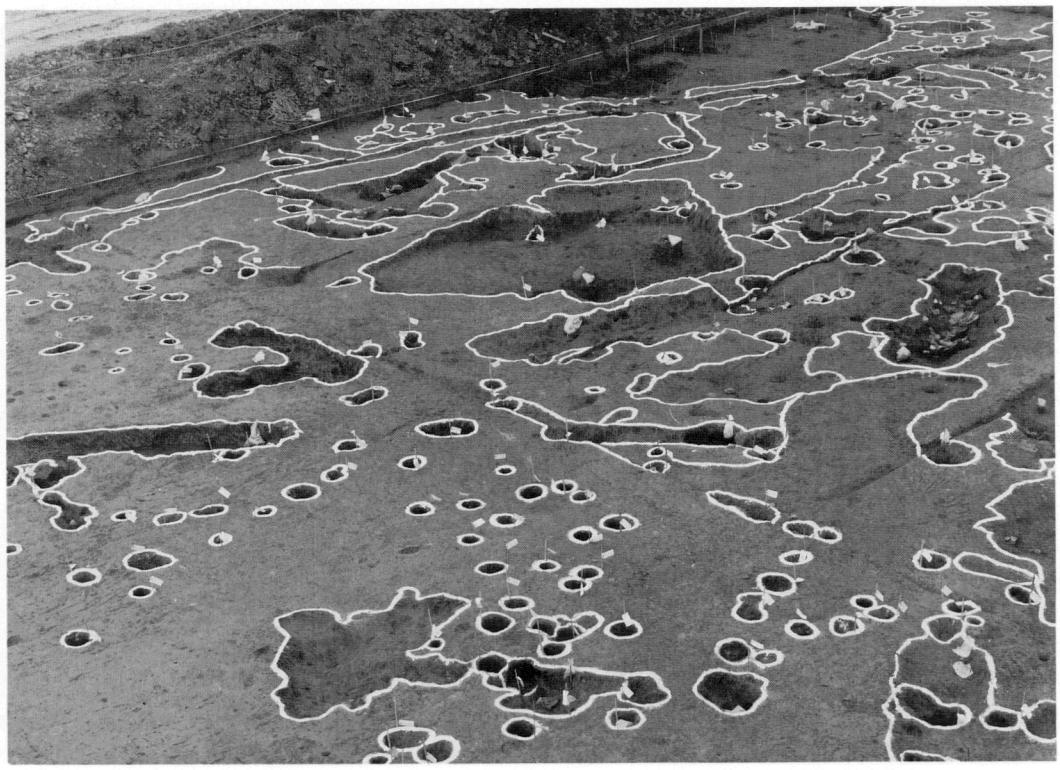
44) 小田富士雄編『原遺跡』（北九州市香月地区埋蔵文化財調査会、1971年）。

45) 具体的な整備例については奈良国立文化財研究所『遺跡整備資料Ⅲ　集落遺跡・製作遺跡』（1984年）より転載した。

文献）

1　山口県教育委員会『伊倉遺跡』（1973年）。
2　山口県教育委員会『石原遺跡』（1973年）。
3　冨士埜勇「響灘沿岸の高地性集落—山口県豊浦町所在・城山遺跡」（『高地性集落と倭国大乱』、吉川弘文館、1984年）。
4　渡辺一雄『たかはた』（㈶山口県教育財団・山口県教育委員会、1986年）。
5　冨士埜勇『上原遺跡』（菊川町教育委員会、1976年）。
6　山口県教育委員会『坂ノ上遺跡』（1974年）。
7　小野忠熙「北迫遺跡」（『宇部の遺跡』、宇部市教育委員会、1968年）。
8　宇部市教育委員会『北迫遺跡遺構確認調査報告』（1982年）。
9　冨士埜勇編『青畑遺跡調査概報』（阿知須町教育委員会、1983年）。
10　山口県教育委員会・建設省山口工事事務所『朝田墳墓群Ⅴ』（1982年）。
11　山口県教育委員会・建設省山口工事事務所『朝田墳墓群Ⅵ』（1983年）。
12　山口県教育委員会・建設省山口工事事務所「朝田墳墓群Ⅱ」（『朝田墳墓群Ⅱ・鴻ノ峰1号墳』、1977年）。
13　山口県教育委員会「堂道遺跡」（『堂道・五反地遺跡』、1973年）。
14　山口市教育委員会『西遺跡』（1986年）。
15　三戸田晃司・山本源太郎編『奥正権寺遺跡』（山口県教育委員会、1984年）。
16　三戸田晃司・山本源太郎編『大崎遺跡』（山口県教育委員会、1985年）。
17　山口県教育委員会『下右田遺跡　第1・2次調査概報』（1978年）。
18　山口県教育委員会『下右田遺跡　第3・4次調査概報』（1979年）。
19　山口県教育委員会『右田・一丁田遺跡』（1973年）。
20　井上山遺跡発掘調査団『井上山』（1979年）。
21　山口県教育委員会『宮原遺跡』（1973年）。
22　山口県教育委会『御屋敷山遺跡』（1973年）。
23　山口県教育委員会『追迫遺跡』（1978年）。
24　小野忠熙他『吹越遺跡予備調査概報』（平生町教育委員会、1970年）。
小野忠熙他『吹越遺跡第二次調査概報』（平生町教育委員会・山口県教育委員会、1972年）。
25　山口大学人文学部考古学研究室「平生町松尾遺跡の発掘調査」（『西部瀬戸内における弥生文化の研究』、1984年）。
26　渡辺一雄・中村徹也『よみがえる弥生のムラー突抜・馬場遺跡』山口県教育委員会、1985年）。
27　村岡和雄「坂手沖尻遺跡」（『坂手沖尻・惣の尻遺跡』、山口県教育委員会、1978年）。

(1)　昭和57年度調査区北端部全景（東から）



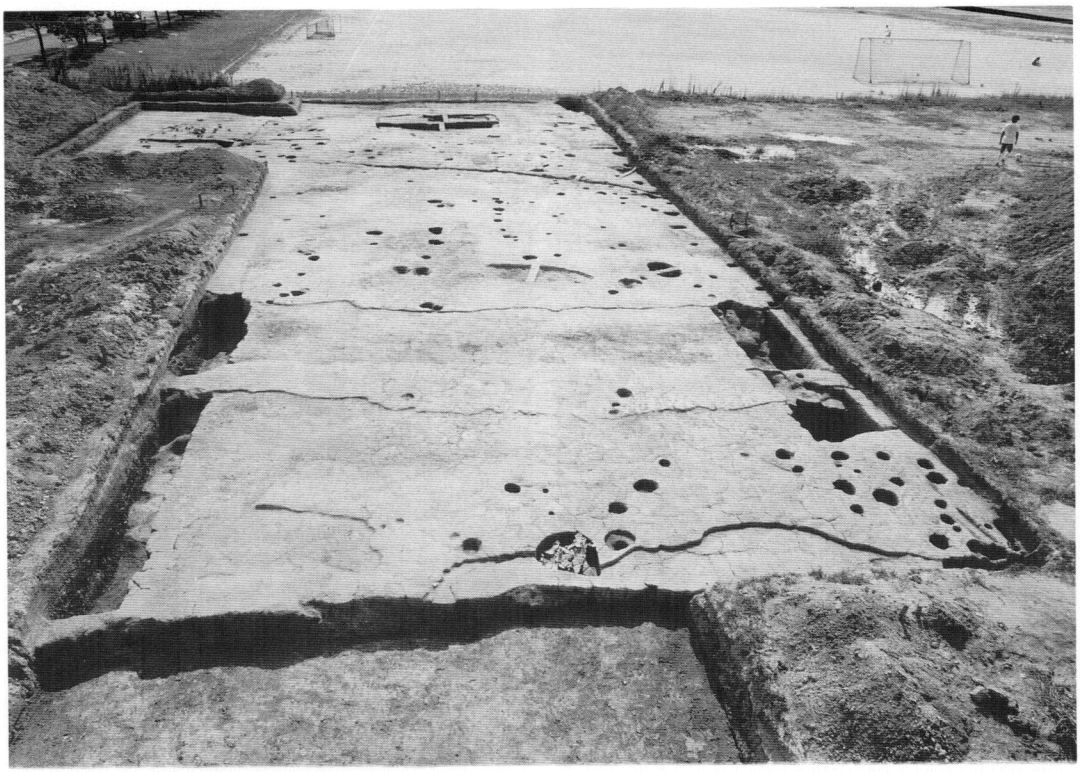
(2)　昭和57年度調査区西端部全景（東から）

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和57年度)

(2)

(1) 昭和57年度調査区南端部全景(東から)

(2) 昭和59年度調査区全景(東から)

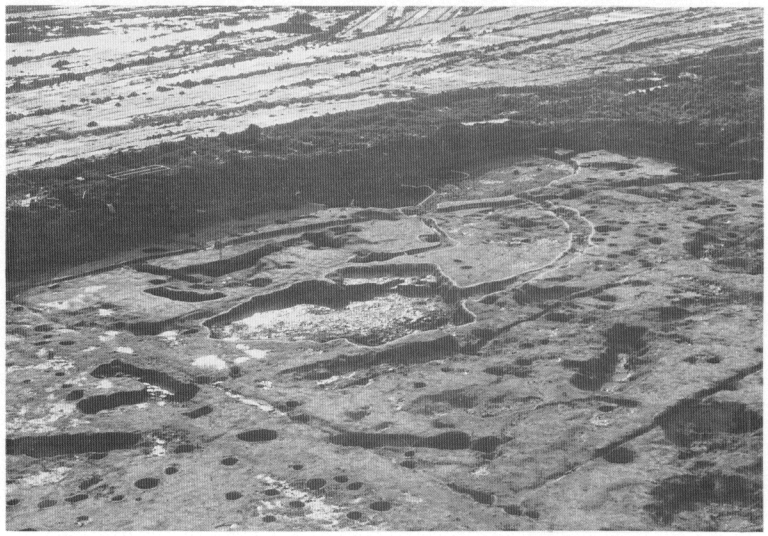


(1) 昭和60年度調査区全景(東から)

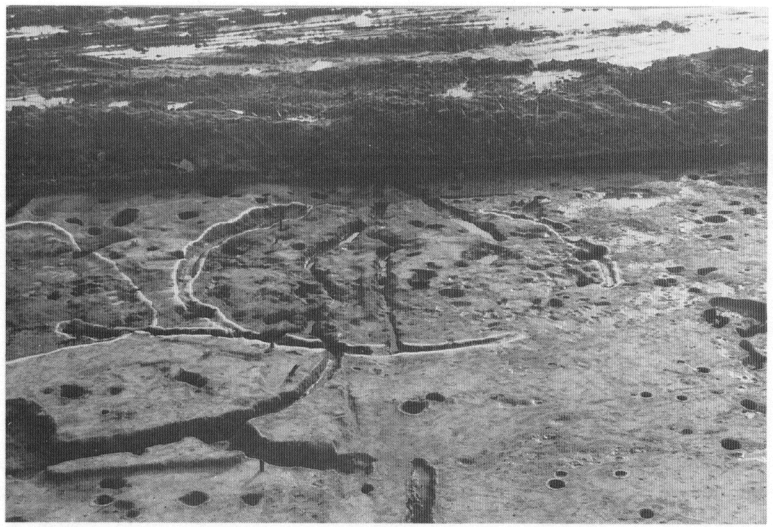
(2) 昭和61年度調査区全景(東から)

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）（4）

(1) 第1号竪穴住居跡（東から）



(2) 第2～4号竪穴住居跡（東から）



(3) 第7号竪穴住居跡（東から）

(4) 第4号土壙（南から）

(1) 第5号土壙(南から)

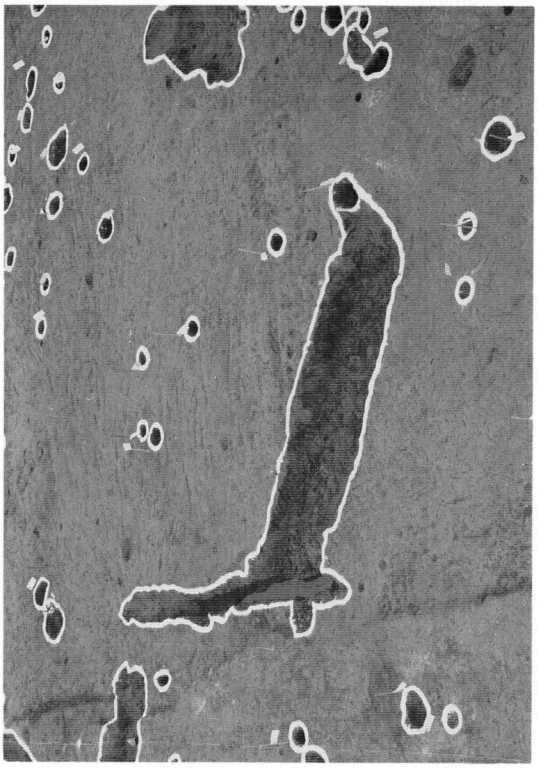
(2) 第8号土壙(南から)

(3) 第9号土壙(北東から)

(4) 第17・18号土壙(北東から)

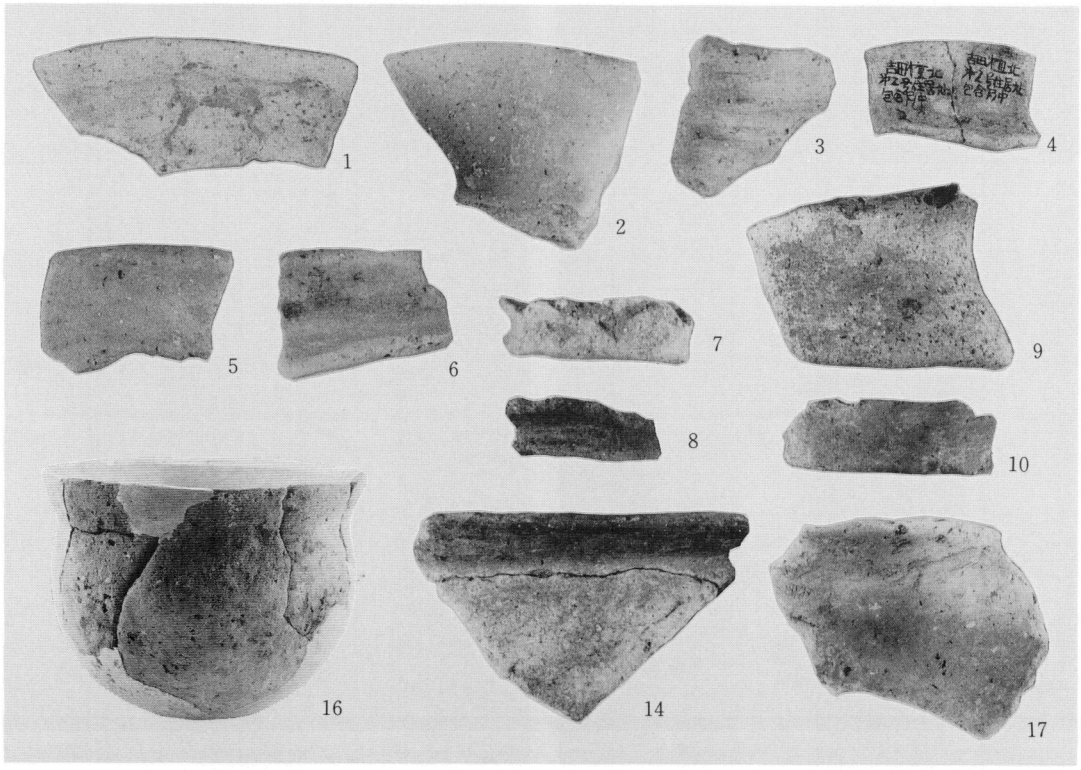
山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和57年度)

(5)

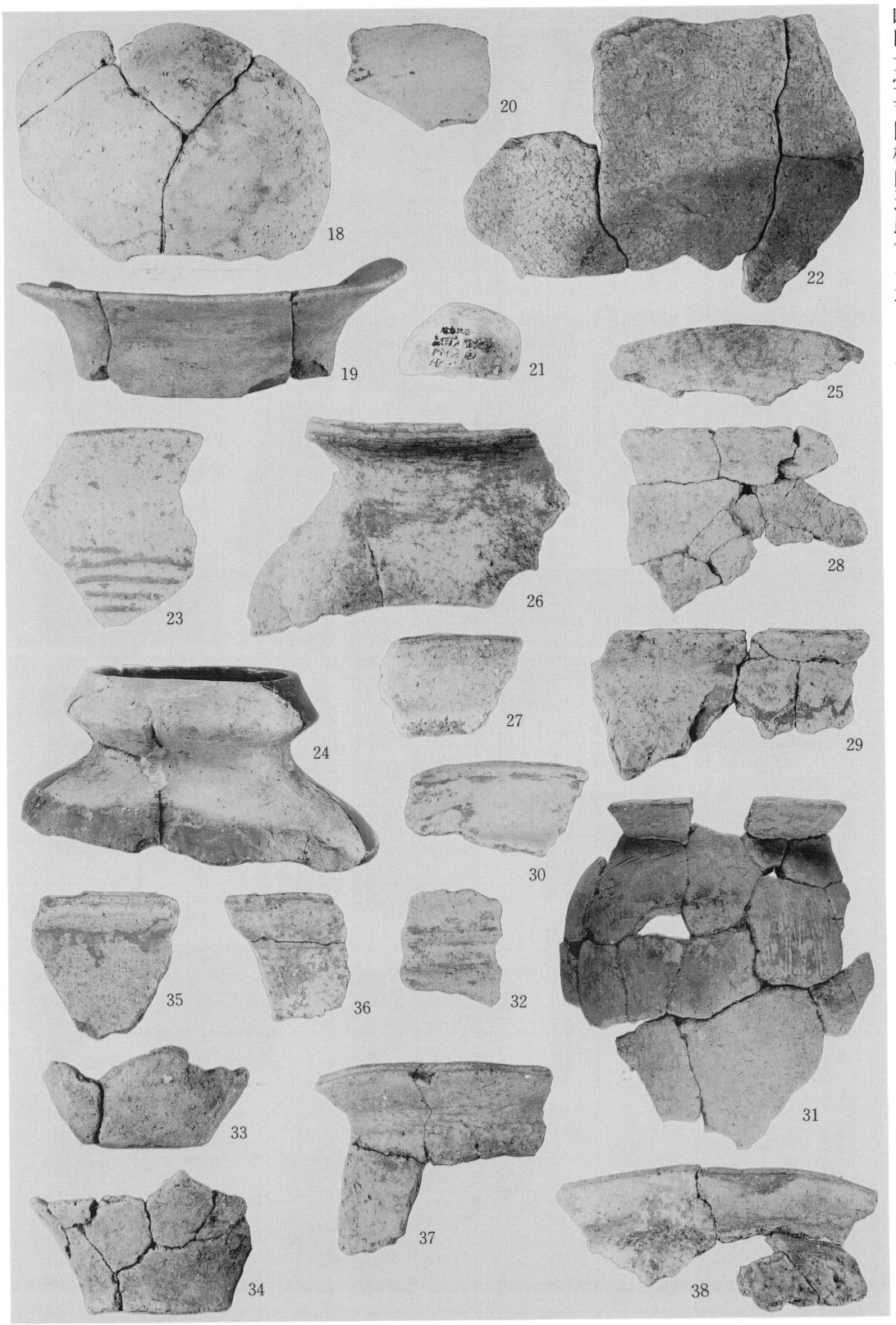


(1) 第29号土壙(東から)

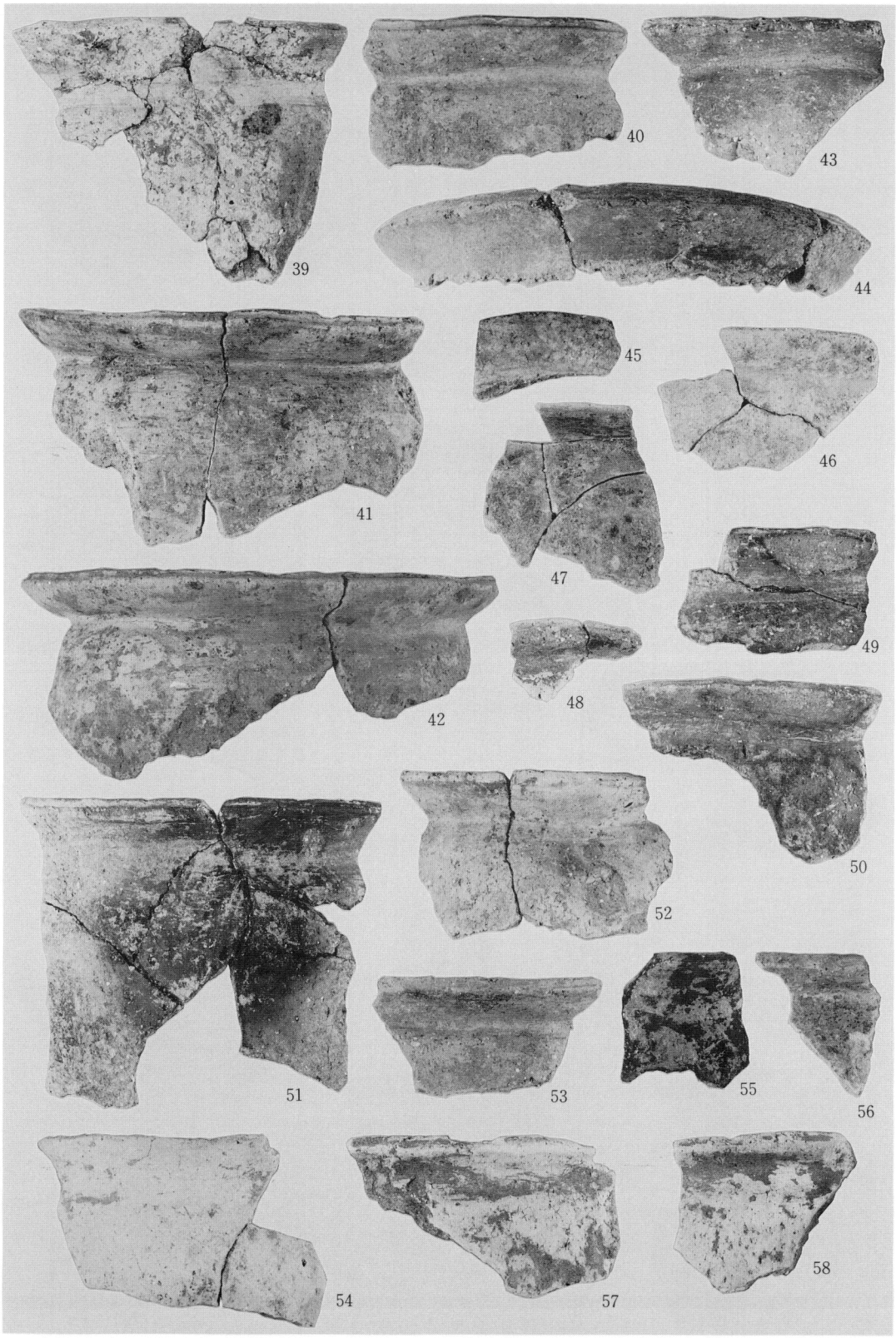
(2) 第42号土壙(東から)



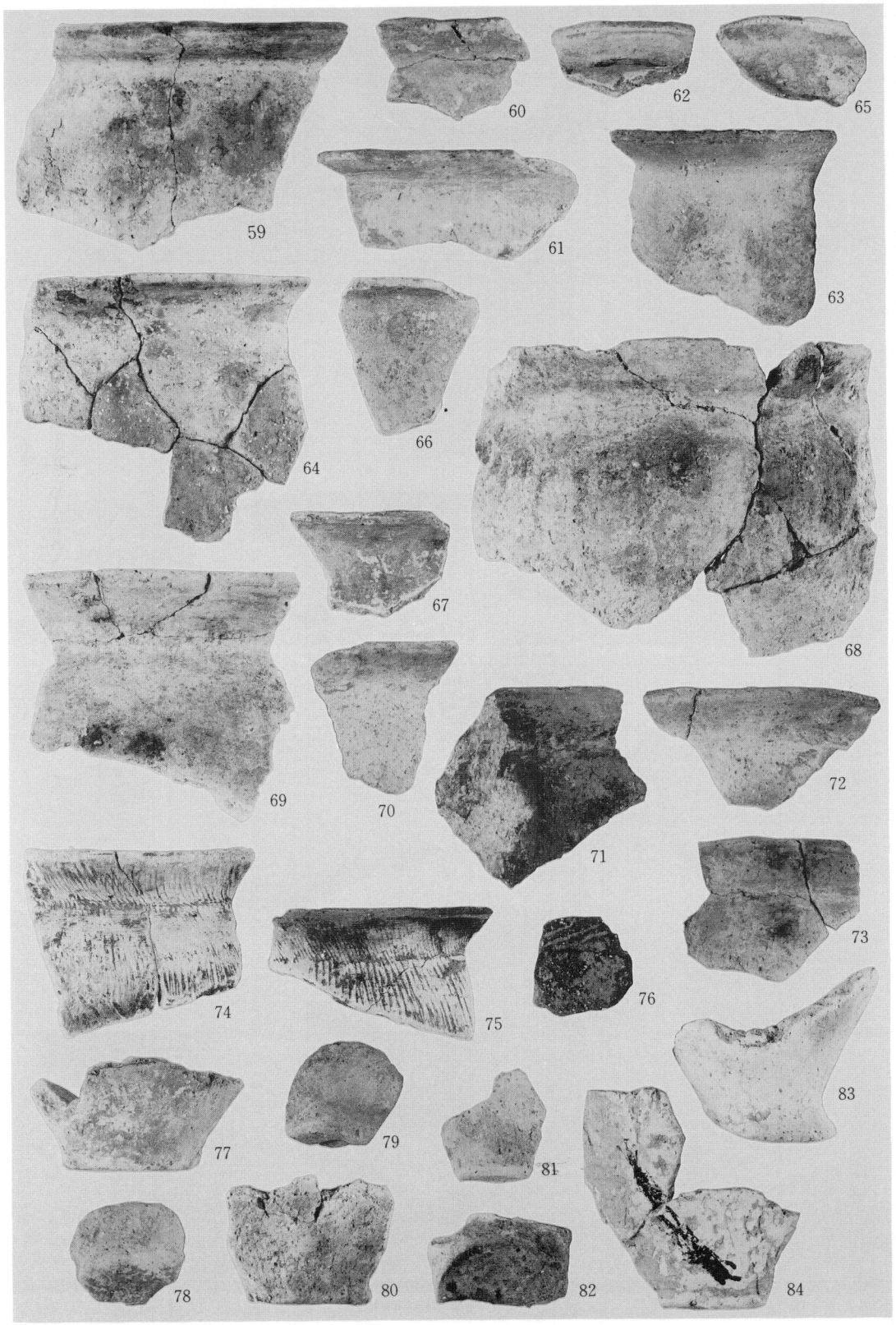
(3) 出 土 遺 物 (1)



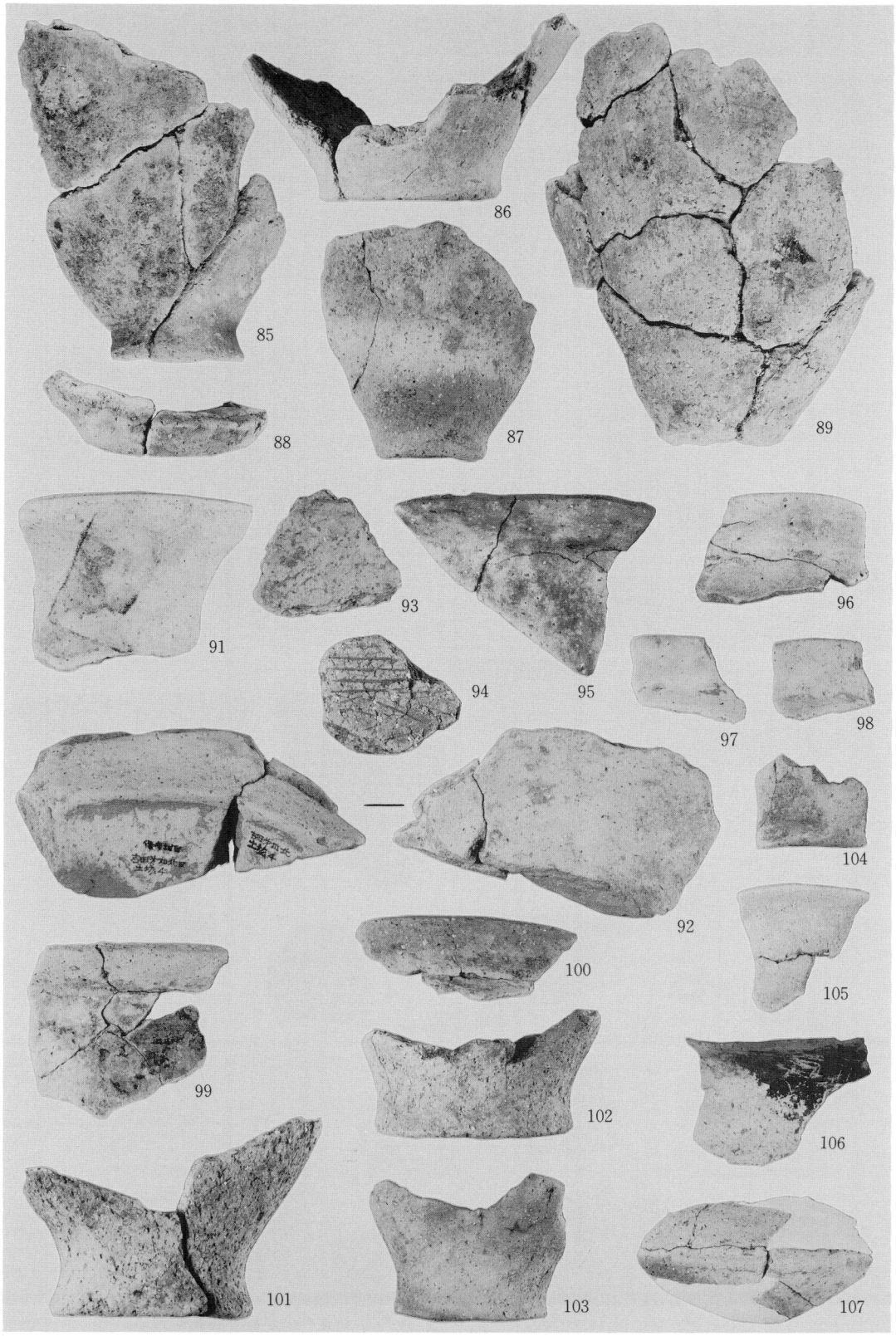
出 土 遺 物 (2)



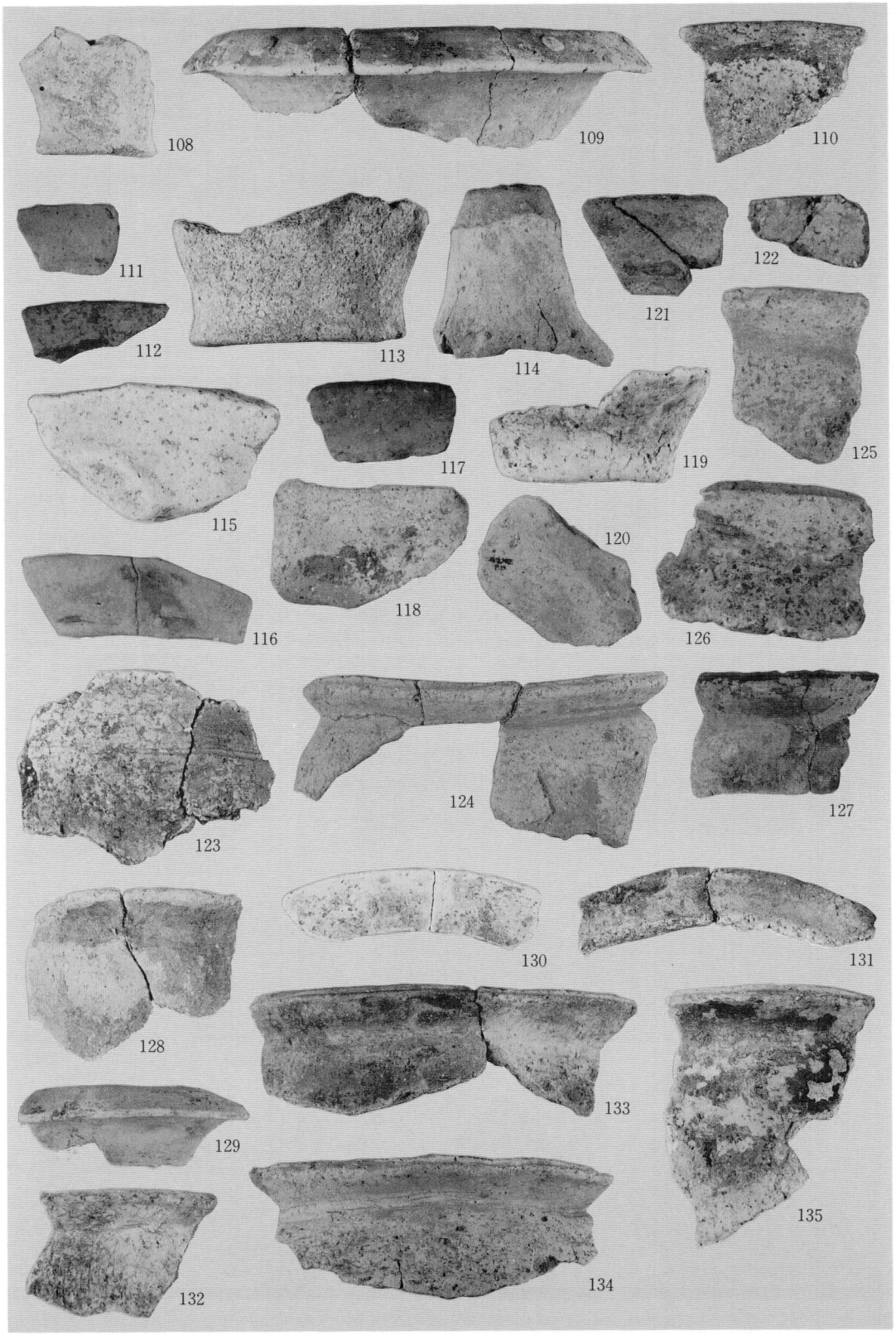
出 土 遺 物 (3)


59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84

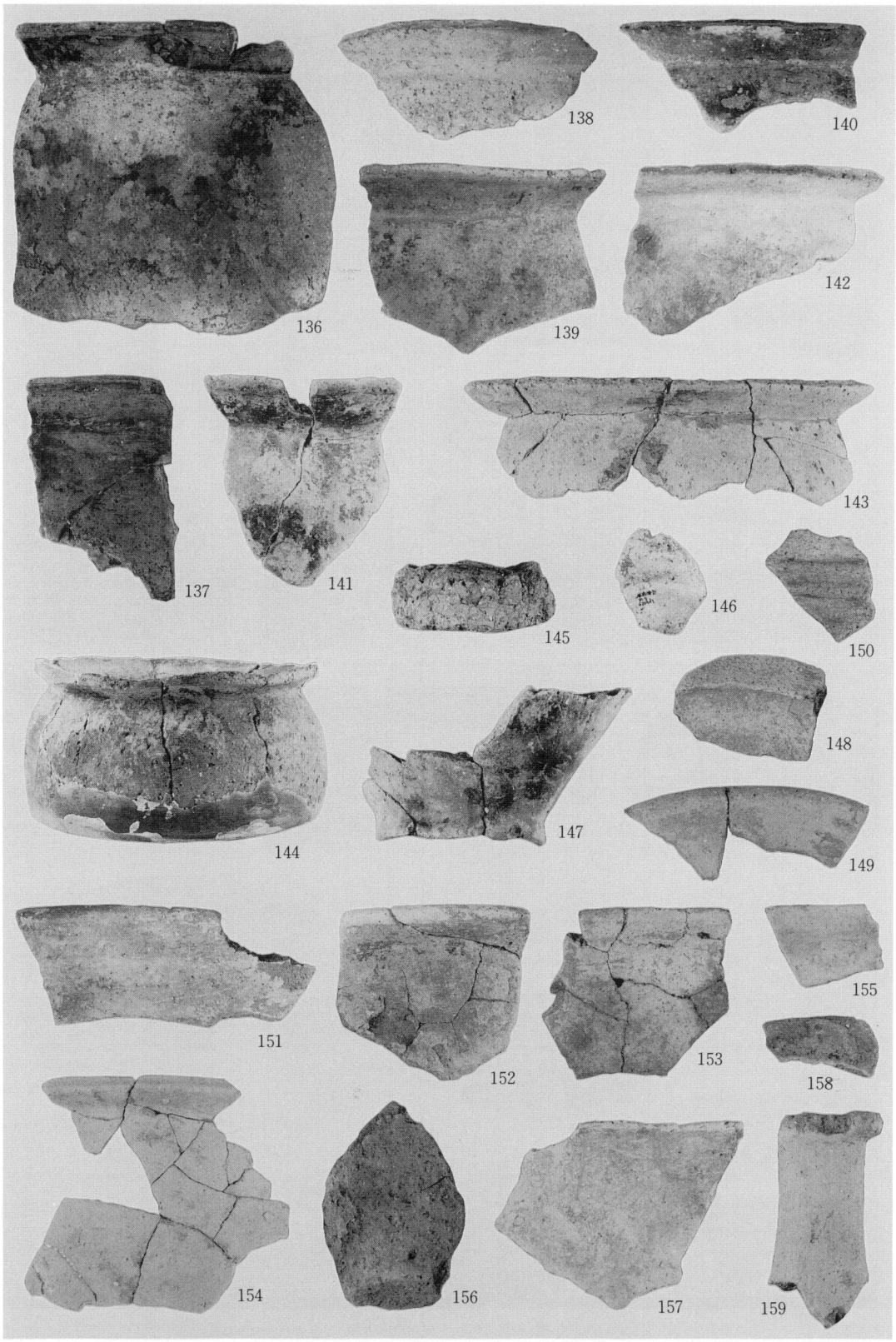
出 土 遺 物 (4)


85
86
87
88
89
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107

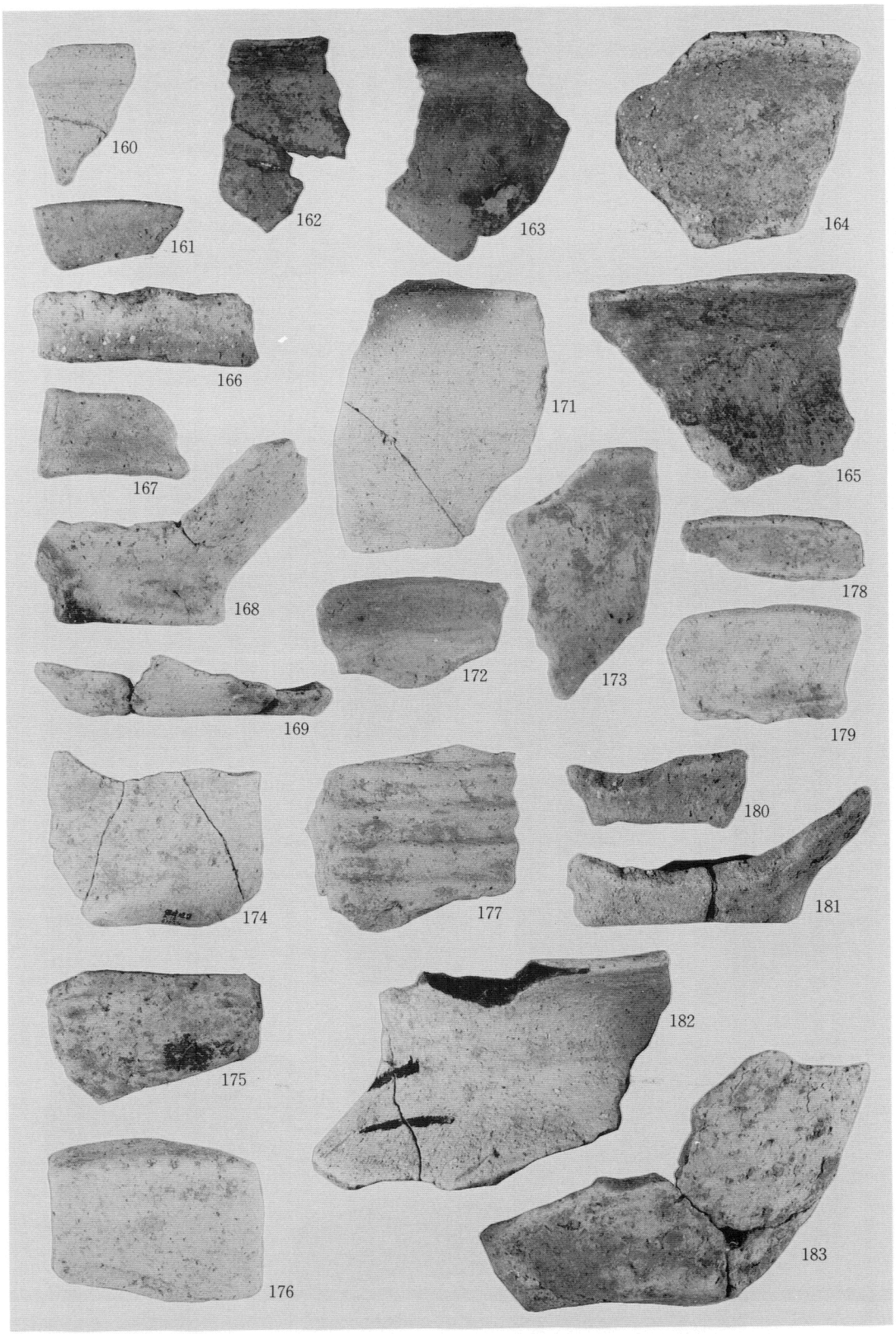
出 土 遺 物 (5)


108
109
110
111
112
113
114
121
122
115
117
119
125
116
118
120
126
123
124
127
128
130
131
129
133
135
132
134

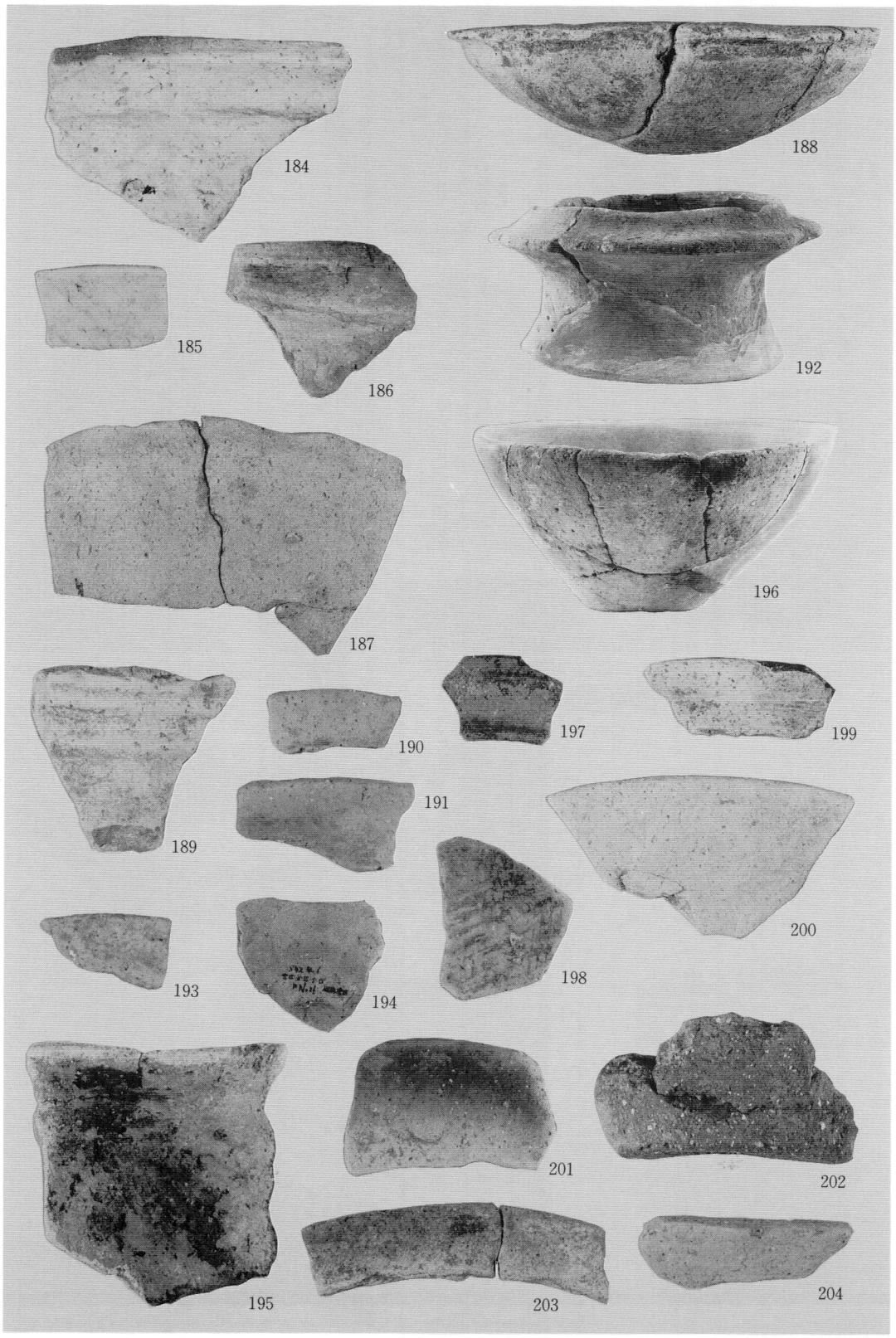
出 土 遺 物 (6)


136
138
140
139
142
137
141
143
145
146
150
144
147
148
149
151
152
153
155
158
154
156
157
159

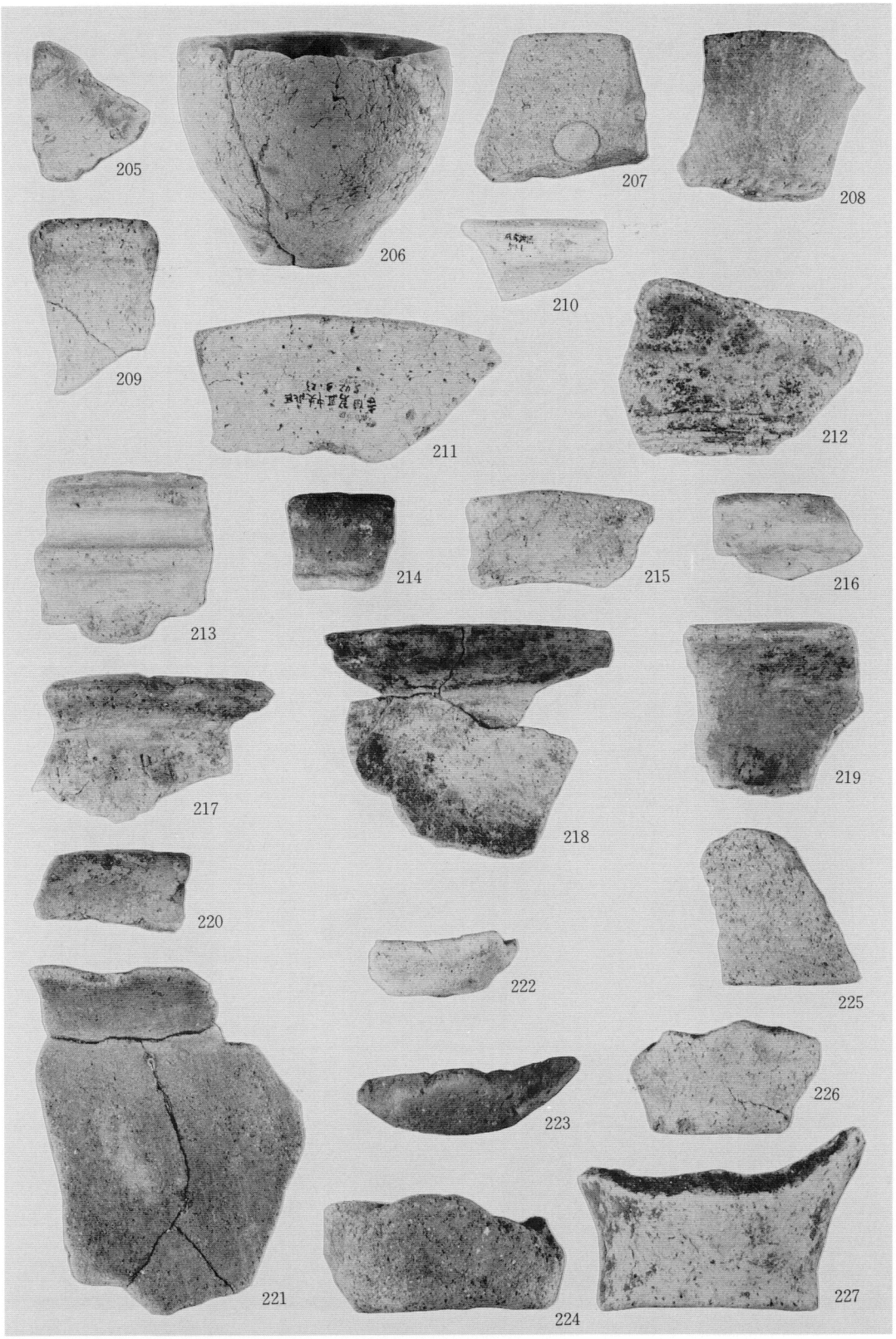
出 土 遺 物 (7)


160
161
162
163
164
166
167
168
169
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183

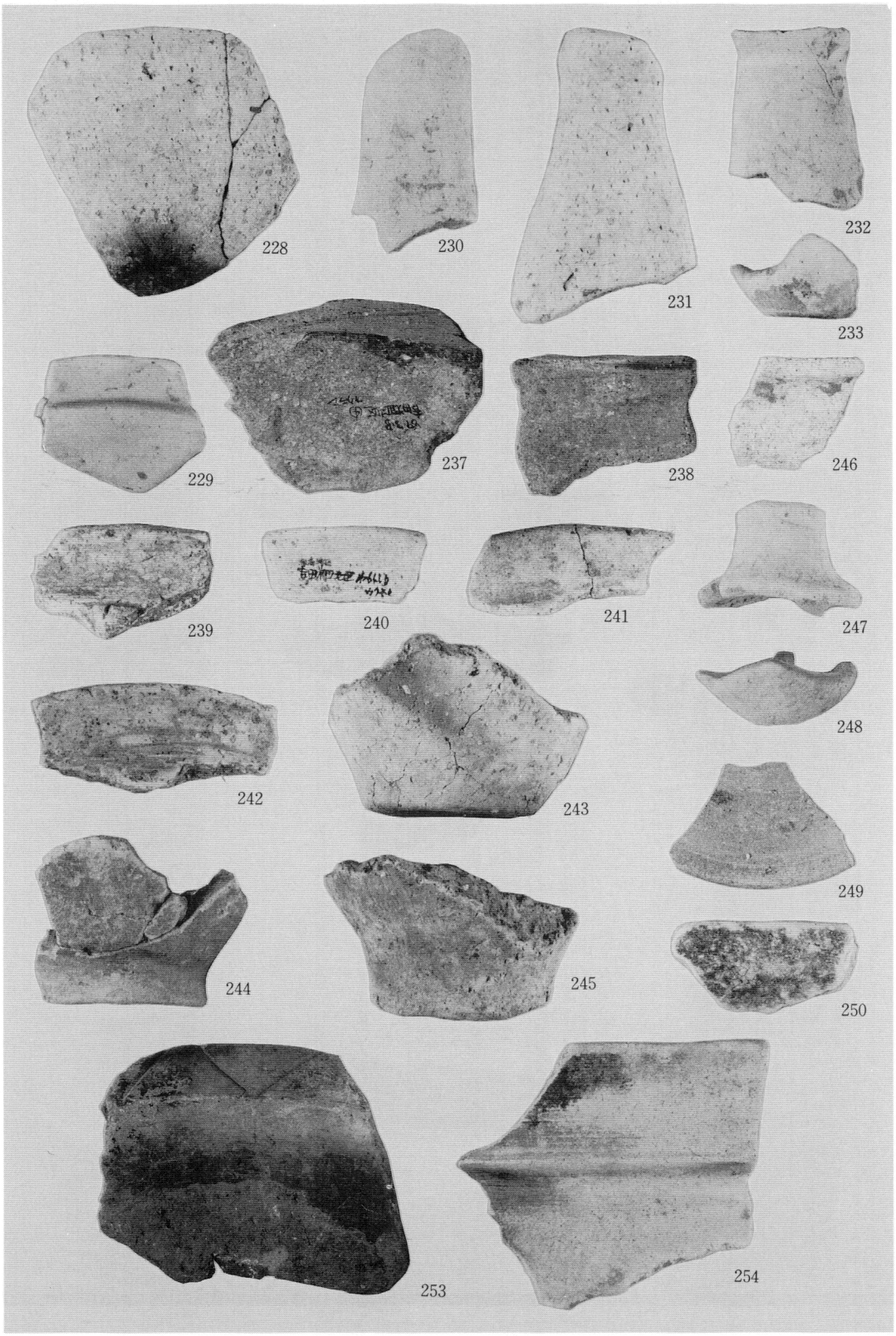
出 土 遺 物 (8)


184
188
185
186
192
187
196
189
190
197
199
191
200
193
194
198
195
201
202
203
204

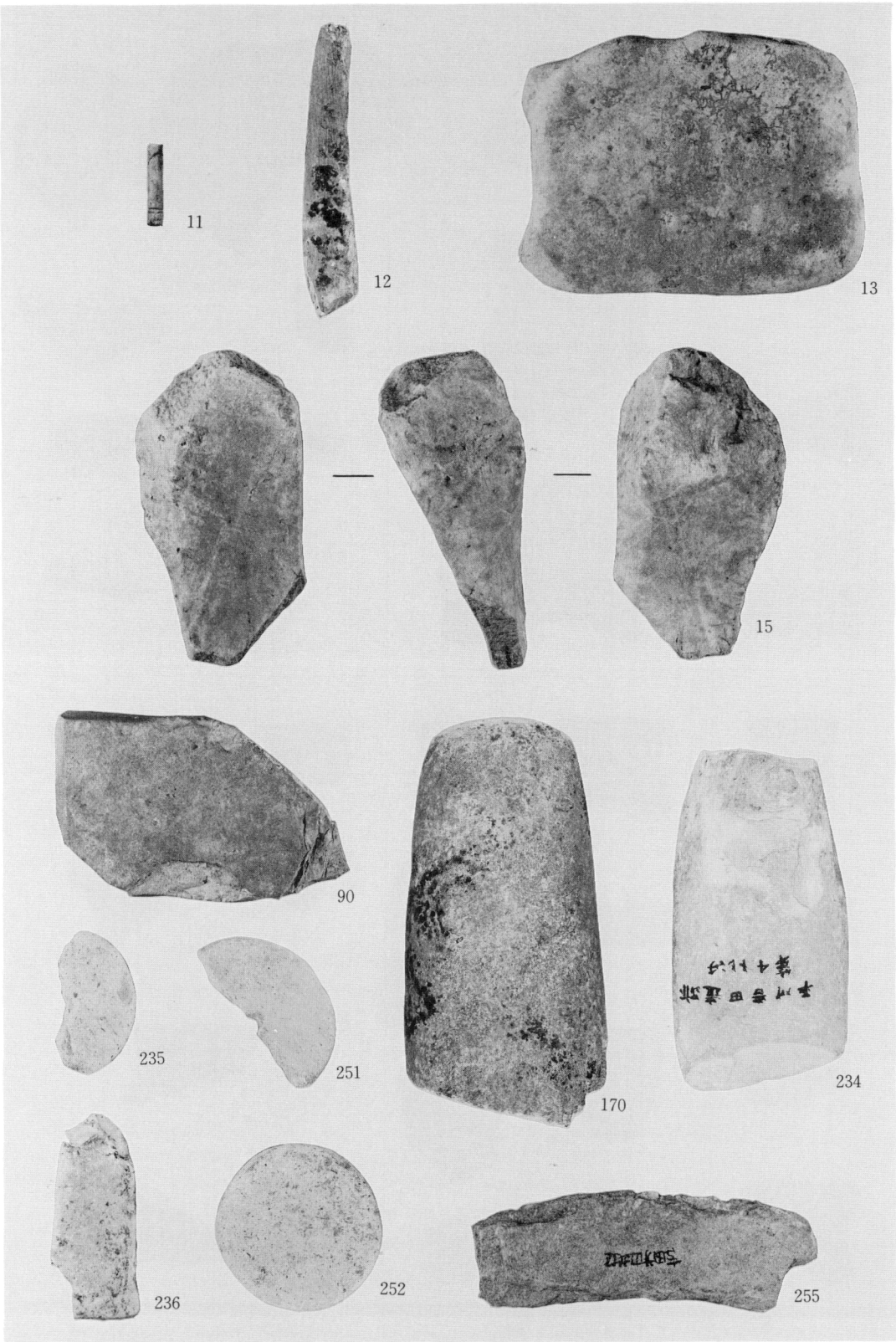
出 土 遺 物 (9)


205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227

出 土 遺 物 (10)


228
230
231
232
233
229
237
238
246
239
240
241
247
242
243
248
249
244
245
250
253
254

出 土 遺 物 (11)



出 土 遺 物 (12)